二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
Volume 109
18 未満
おいしくなって絢登場!!
800P超え
大幅ボリュームアップで
電子書籍でもおかず充実!!
今号の
Special Fetishism Series
特集
くっ殺せ!
試し読み版

新創刊!!!

KTCが贈るヒロイン陵辱アンソロジー
『敗北乙女エクスタシー』
が次号より

くっ殺ヒロインズ

にリニューアル!

創刊号の表紙はシャインミラージュ!!

掲載作は『変幻装姫シャインミラージュ』『ママは対魔忍』『煌装閃姫クリスティア』『黒獣2』『エデンズリッター』他多数!

敗北乙女エクスタシーの連載作品はそのまま継続し、陵辱レベルアップで戦うヒロインを犯し尽くす!
さらに、書籍版には"大判ピンナップ"が付いてくる!

illust 高浜太郎
二次元ドリームコミックス

創刊号は2020年春発売予定!

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

最新情報はオフィシャルサイトへ キルタイムコミュニケーション 検索

新イベント続々開催!!!
対魔忍RPGX
NEAR FUTURE SHINOBI
TAIMANIN STORIES
90万人突破!!!
登録無料、クリックして今すぐプレイ!!!
LiLiTH
DMM GAMES

CONTENTS

2019 12 Volume 139

表紙イラスト／FCT
大きい液タブが欲しいのを妥協して15インチのを買って一年半。…13インチでも大丈夫そう。

きらら★キララNTR
魔法少女は変わっていく… THE COMIC
[漫画]雨宮ミズキ [原作]さかき傘 [キャラクター原案]希望つばめ

新連載

初連載＋初コミカライズ担当となります！　何卒よろしくお願い致します…！（雨宮ミズキ）

特務騎士クリス
～エリート軍人異種交配録～
[小説]089タロー [挿絵]TANA

新連載

またまた書かせていただきました。チラ見だけでも大歓迎です。実は連載はこれが初だったりするのでした。（089 タロー）

●連載&読み切り漫画

超昂神騎エクシール
～双翼、魔悦調教～ THE COMIC

新連載

[漫画]SHUKO [原案]峰崎龍之介
[原作]アリスソフト

初連載、最後まで走り抜けれるよう頑張ります。と、言ったそばからインフルにかかってしまいました。（SHUKO）

亡国のディナーリエ
～オークなんかに屈しませんわ～
[漫画]ばふぇ

電子書籍化で心機一転！　とはいえ戦うヒロインをアレコレするのは変わりませんよ。（ばふぇ）

聖天使ユミエル
カオティックロンド
[漫画]白う～凪い
[原作]黒井弘騎

次回で最終話となりますが、最後まで頑張っていきたいと思います。（白う～凪い）

●特選コラム

二次元GスポットXtasy　夢崎
ちゆ12歳のひとりえっち　ちゆ
官能小説執筆汁まみれ ～作家のココロ～　筑摩十幸
美少女コミック雑誌のゲンバ　稀見理都
にゃるらのブログ出張版　にゃるら

●今号の特集

くっ殺せ！特集

●連載&読み切り小説

ママは対魔忍
乱れ堕ちる熟くノー

新連載

[小説]新居佑
[挿絵]えれ2エアロ [原作]Black Lilith

ノベライズならではの、原作とは異なる展開に、どうかご対魔忍っっ！（新居佑）

騎士団長姫騎士レイン
カラー小説
[小説]上田ながの
[挿絵]FCT

電子版ドリームマガジンです！　その最初にこうして載せていただける！　ああ、嬉しひ！（上田ながの）

淫妖魔ヴェレーナ
「私を慰みものにするくらいなら今すぐ殺せ！」
カラー小説
[小説]蒼井村正
[挿絵]星名めいと

来年でデビューからおよそ20年。まだまだ頑張りますので、応援よろしくお願いいたします。（蒼井村正）

その戦乙女。鋼よりも尚、鉄の如く。
[小説]懺悔
[挿絵]あらと安里

商業同人、和姦凌辱問わず、色んなNTR書いています。ツイッター　@mahoyoba（懺悔）

恥辱の魔女カルラ
～敗北の代償～
[小説]高岡智空
[挿絵]フキタ

電子初の読み切り！　また文章量は予定オーバーです、やったぜ。すみませんでした。（高岡智空）

ロクタの催淫紋とエルフ姫
[小説]大角やぎ
[挿絵]ボリス

『寝取り旅館』の作者です。12月に最新巻出ます。特別短編もあるので宜しくお願いします。（大角やぎ）

惨屈吸血鬼ディアナ
―高貴なるヴァンパイアへの淫処刑―
[小説]下山田ナンプラーの助
[挿絵]論倫理ろんり

ゾイドがどんどん部屋を占領していきます。私自身をベランダに置いとくしかないかも。（下山田ナンプラーの助）

死を超えるモノ
～露出地獄に堕ちる退魔剣士～
[小説]有機企画
[挿絵]弱電波

電子版一冊目に掲載できて嬉しく思います。こちらでも陵辱調教頑張っていきます！（有機企画）

フレイヤガール ハノン
～神の力を受け継いだ乙女～
カラー小説
[小説]天戸祐輝
[挿絵]ﾋﾟｰﾏｰﾝとﾋﾟｰ

祝、新二次マガ！　DL販売の『魔法少女が平和をまもる方法～』もよろしくです！（天戸祐輝）

ママは対魔忍
MAMA WA TAIMANIN
乱れ堕ちる熟くノ一
第一話 狙われた引退対魔忍 非道の肉体調教
Black Lilithの『ママは対魔忍』が
新居佑によって待望のノベライズ!
小説／NOVEL 新居佑（あらいゆう）
挿絵／ILLUSTRATION えれ2エアロ
原作／ORIGINAL Black Lilith

闇の存在・魑魅魍魎（ちみもうりょう）が跋扈（ばっこ）する近未来・日本。

人魔の間で太古より守られてきた「互いに不干渉」という暗黙のルールは、人が外道に堕してからは綻びを見せはじめ、人魔結託した犯罪組織や企業が暗躍、時代は混沌へと凋落していった。

しかし正道を歩まんとする人々も無力ではない。

時の政府は人の身で『魔』に対抗できる〝忍のもの〟たちからなる集団を組織し、人魔外道の悪に対抗したのだ。

人は彼らを〝対魔忍（たいまにん）〟と呼んだ――――。

だが対魔忍とはいえ、一人の人間である。

恋をし、誰かを愛し、そしてその人と結ばれ、子供を作りたい、そんな欲求を忍ばせておくことはできない。

対魔忍を引退し、今は平穏な日常を送る者は大勢いた。

だが、対魔忍であった業を消し去ることはできない。

現役時代に戦ってきた〝魔の存在〟は、引退した対魔忍たちを、捨て置くこと

は決してないのだ――。

季節は真夏を迎えた7月下旬。

首都圏にある、閑静な新興住宅地。

そこに建てられた新築の一軒家。

「悟（さとる）、いつまで寝てるの～～っ。早く起きて、朝ご飯、冷めちゃうわよ～～～～」

一階のダイニングキッチンから、二階の子供部屋に向けて、よく透った、それでいて美しく、ほんのりとした色香を感じる女性の声が発せられる。

声の主の名前は、吉沢加奈（よしざわかな）。

忙しそうな朝にも崩れない、整った面立ちには、優しそうな瞳を携えている。

さらさらのショートヘアと相まって、その笑顔だけで、部屋の雰囲気が明るくなりそうな美貌の持ち主だ。

スタイルもまた抜群であり、一児の母とは思えない、キュッとした腰のくびれや、スラリとした足。

なによりボインッ！　と音が聞こえてきそうなほどの爆乳は、形も張りも若い

時のままで、ツンッと生意気そうに上を向いた乳首などは、魅惑的な卑猥ささえ漂わせている。

その美ボディを包むのは、Tシャツにホットパンツという、非常にラフな格好。そこからのぞく、年齢とともにムチムチ感を増していっている女肉は、しゃぶりつきたくなるほどの張りと艶に溢れている。

加奈は元対魔忍であり、今は引退して、この町、この家で、一人の主婦として、愛する家族とともに暮らしている。

加奈の声が聞こえたのかどうか。それから数分経ってから、寝惚けまなこを擦りながら、加奈、そして、その夫である慎吾（しんご）の一人息子である、悟がのそのそとリビングに現れる。

「ふぁぁ～～、おはよう、ママ。今、何時～～～？」

「もう、8時すぎよ。悟、昨日、夜中までゲームしてたでしょ？　夏休みだからって、あんまりだらけちゃダメよ」

「へへっ、ママ、ごめんごめんっ。この前、買ってもらった〝妖怪テレビ〟の新作ゲーム、ほんとおもしろくってさ。なかなかやめられなくって……」

「はは、パパは疲れて先に寝ちゃったよ。あの後、一人でまだ頑張ってたのか。なかなかやるな、悟」

息子の悟は、快活そうな見た目そのままに、元気が取り柄な性格だ。子供らしくテレビゲームも好きだが、運動も得意なうえ、その明るい性格から、友達も多く、仲間想いでリーダーシップもある。

夫の慎吾は、見た目通りの優しい穏やかな性格で、職業は一般的なサラリーマンだ。

加奈とは友人の紹介で知り合い、そのまま結婚。

専業主婦の加奈にばかり、家事を任せず、こうして子供の相手もしてくれる、加奈にとって最愛の夫なのだ。

そして二人は、加奈が対魔忍であったこと……。そもそも対魔忍というものの存在すら知らない。

加奈も一線から身を引いたこともあり、そのことを打ち明ける必要はないと感じている。

ごく普通の、ありふれた幸せな家庭。それが吉沢家の日常だ。

「ちょっ、あなたっ。そこは褒めるところじゃないでしょ？　まぁ、好きなことに集中できるのは、いいところだと思うけど……」
「だろ？　僕じゃないな。きっと加奈に似たんだよ。よかったなぁ、悟。ママがすごい人で」
「うん、ありがとう、ママっ！」
「あらそう……って、二人して私を丸め込もうとして、もうっ。だから慎吾さんも寝坊したのね⁉　まったく、親子そろって調子がいいんだから」
言った加奈の口調は、やや厳しかったが、そこに込められた感情は、決して怒りのものではなかった。
むしろ、それは差しこむ夏の朝の陽ざしのように、晴れやかで、どこか清々しいものだ。
「悟、起きたんなら、早く顔を洗って、着替えてきなさい。早くしないと……」
ピンポーン。
加奈の言葉に覆いかぶさるように、玄関からチャイム音が響く。
「っと、言ってるそばから。は～～い。……悟、早く着替えて。ご飯食べてっ」

「う、んん……わかったよ～～～」
「ほらほら、しゃきっとしてっ！　……は～い、今行くわね～～」
加奈は、まだ眠そうな顔をしている悟に声をかけると、急いで玄関へと向かい、ドアの鍵を開ける。
そこに立っていたのは、加奈がよく知り、そして心を許している人物だ。
「お、おはようございます、オバさん」
「おはよう、健也君」
ニコリと笑って、どこか気弱そうな目の前の少年……健也に、極上の笑みを送る加奈。
健也は悟の学校での友達であり、今日は朝から、加奈の家で遊ぶ約束をしていたのだ。
身長は悟より、わずかに低く、前髪をきれいに整え、服装も小ぎれいで、いかにも優等生といったいで立ちだ。
その見かけ通り、性格もおとなしく、引っ込み思案で、ともすればいじめられっ子にでもなりそうな、優しく、どこか頼りない健也。

それがなぜか、ガキ大将気質の悟とウマがあうらしく、学校はもとより、家でゲームをするのも、外で身体を動かすのも、悟といつも一緒で、悟にとって最もよき友人であるように、加奈には思えた。

「おっ、きたきた、健也っ。早く上がれよ。頼みがあるんだ、このサラダ……ちょっと代わりに食べてくれない？　いや～、こればっかりは苦手でさぁ」

「え、う……うん、いいけど……」

キッチンからの悟の呼びかけに、健也はいそいそと家へと上がり、悟が座るテーブルの方へと向かう。

そこには、ワンプレートに用意された悟の朝食があり、盛られていたトーストとウインナーの食べ跡、そして野菜たっぷりのサラダだけが、きれいに手付かずで残っていた。

「パパが庭で育てた野菜で、ママの手作りなんだよ。だから味は保証するぜ。ほらほら、健也ぁ。食べた食べたっ！」

「え、あ……お、オバさんの手作り!?　い、いいの？」

「あったり前じゃんっ！　僕たち友達だろ!?　親友だろぉ？　な、頼むよ。あ、

けどママには内緒で……」
「サァトオオルゥウ～～！」
「ひ、ひぃいいっっっ！」
頼まれたら断れない気質の健也に、自分が嫌いな野菜たっぷりのサラダを食べさせようとする悟。
わが息子ながら、呆れた不正行為に、加奈は、その整った顔の眉を吊り上げ、子育てに厳格な母らしい形相をしてみせる。
「ズルをしないのっ！　きちんと全部食べなきゃ、遊びに行かせないわよ、いい？　わかった？」
「は、はいっっ！　わかったっ。わかったよ～～っ。ったく、ニコニコしてたと思ったら、すぐ鬼婆になるんだからさぁ」
「へぇぇぇぇっ、だ～れが鬼ですってエェエ？」
「う、うわっっ。け、健也……悪いけど、ちょっと待っててな。なるべく早く片付けるから」
「う、うん。わかったよ。悟君も頑張って。オバさんの手作りなんだから、絶対

においしいよっ」
「お、おうっっ。そ、そうだよな……うあ、なんで世の中に野菜なんてものがあるかなぁ～」
悟は見るからに嫌そうな顔を浮かべながら、それでも、健也に後押しされる形で、どうにかサラダを喉の奥へと飲み込んでいく。
「まったく。油断も隙もないんだから……ふふ」
加奈は、息子の好き嫌いに呆れながら、それでも、なんとかして食べようとする悟の姿に、母親としての小さな、しかし確かな幸せを感じていた。
すでに表情は穏やかなものに戻り、口元には柔和な笑みが自然と作られる。
「はは、悟、頑張れ。健也君、悟と仲良くしてやってくれな。……よし、じゃあそろそろ仕事の時間だ。行ってくるよ、加奈……」
「ええ、行ってらっしゃい、慎吾さん。……ん、チュッ」
悟の慌ただしい世話に一息ついたのもつかの間、今度は、スーツ姿の慎吾が出勤するのを、玄関で甲斐甲斐しく見送る加奈。
そして、二人はほんのわずか恥ずかしそうに視線を合わし、まるで新婚夫婦の

ように、お出かけのキスを交わした。

それは新婚の時から……もっと前の付き合っていた頃から続く、毎日、毎朝の二人の決まり事だ。

悟が成長し、最近はそちらに意識や時間を取られるようになっても、この一瞬だけはずっと変わらない。

時間にすれば、ほんの一秒か二秒……。

どちらかといえば奥手で、穏やかな性格の慎吾とのキスは、ドラマで見るような、濃厚で情熱的なキスではない。

だが互いの唇と唇がしっかりと触れ合い、そこから伝わる慎吾の愛情に、加奈は確かな女としての幸せと満足感を、毎朝覚えていた。

「じゃあね、加奈」

「はい、慎吾さん。気を付けてね」

加奈たち家族のため、会社へと向かう慎吾の背中を見送りながら、加奈は唇に残った慎吾の夫としての熱の余韻に、恋する乙女のような表情で浸る。

だが、今この場にいるのは、家族である慎吾や悟だけではないということを、

思わず加奈は失念してしまっていた。

「あ、その、え……と……」

「っっっっ、け、健也君っ!?」

気配を感じて、振り向けば、玄関には、恥ずかしそうに顔を赤く染め、可愛らしい瞳を左右にオロオロさせている健也の姿があった。

男女の深い関係がわかる年頃……とさえ、まだいえない年齢の少年には、友達の両親のキスを目撃するなど、気まずいことこの上ないもののはずだ。

そして加奈自身も、息子の同級生に、そんなところを見られた、見せてしまった恥ずかしさに、反射的に頬をはっきりと赤くさせてしまう。

(ど、どうしよう!?　私ったら、なんてところを健也君に!?　と、年上の私がなにかフォローしなくちゃ……え、と、ええっとっっ)

健也がもう少し大人の年齢であったなら……、もしくは悟のように明るく、どこかさっぱりとした性格であったなら、上手いフォローの言葉が浮かんだかもしれない。

しかし健也は、繊細な雰囲気を醸し出しており、不用意な行動は、幼く純粋な

彼の心を強く傷つけてしまいかねない。

（い、いっそ気を失わせて、秘伝の薬で一時的に健也君の記憶を……っ。って、ああ、私ったら、なんてことを……っ。もう対魔忍は引退したっていうのに……。ああ、でもどうしたらいいの……っ!?）

健也を傷つけまいとする思考が、逆にとんでもないことを閃かせてしまう。

見れば健也は、こちら以上に顔を赤らめ、所在なさげにモジモジとしながら、加奈から視線を外し、時折、チラチラと恥ずかしそうに目を向けてくる。

その初心な反応が、愛情ある夫婦のお出かけのキスを、どこか背徳的なものに昇華させ、加奈の思考を、さらに惑わせてくる。

（ま、まずいわ…）

互いに、もうどうしようもなくなった、そのとき。

「おしっ、ごちそうさまっ！　ママ、サラダ食べ終わったから、遊びに行ってくるね！　昼はみんなで食べて、夕方には帰ってくるからっ！　……って、健也、なにやってんだよ!?　ん、顔が赤いけど……ママも!?　なに、二人とも夏風邪かよぉ」

文字通り、親子ほど年の離れた二人の気まずい沈黙を打ち破ってくれたのは、事情を知らない悟の無邪気で明るい声だった。

「えっ、ち……ちがうわよっ。ちょっと外が暑くて……。ね、健也君？」

「は、はいっ。そ、そうだよ。うんっ」

偶然出された、悟からの助け舟。

少し厳しい言い訳かとも思ったが、悟もまだ子供だ。しかも友達思いではあるが、そこまで他人の機微、特にこういったセンシティブな問題に敏感ではない。

わずかに訝しむような表情を見せたが、ものの数秒もたたないうちに、ニカッと笑い、玄関にかけてある、スポーティな帽子を二つ手に取って、朗らかに言う。

「ふ～～ん、天気予報でも言ってたし、やっぱ暑いのか……じゃ、帽子でもかぶっていこうかな。健也も僕の貸してやるよ。……それじゃ、ママ、行ってきま～～すっ！」

「い、行ってきます、オバさん……っ」

健也はまだ少しオドオドしていたが、彼も悟の助け舟がありがたかったようで、すぐに口ぶりを合わせると、何事もなかったかのように、悟とともに駆け出して

行った。

「え、ええっ。いってらっしゃい二人ともっ。気を付けるのよ～～っ」

「は～～～いっ！　よっしゃ、健也、今日はまずみんなでゲームして、それから公園でサッカーしようぜっ」

「う、うん……っ。そうだね」

日よけ用の帽子をかぶり、元気よく話しかけてくる悟に頷きながら、健也が加奈に向けて、軽く会釈をする。

その顔は、まだほんのわずか羞恥の赤が残っており、健也に対する、ズキンッとした、わずかな背徳心を再び覚えさせた。

時間は流れて、正午すぎ。

加奈は、洗濯物の片付けや部屋の掃除などをテキパキとこなした後、息抜きにとリビングに据えられたソファに腰を下ろし、テレビのワイドショー番組を流しっぱなしにしながら、今朝のことを思い出していた。

「はぁ～～、失敗しちゃったなぁ。まさか慎吾さんとのキスに夢中で、健也君の

視線に気づかないなんて……。昔はこんなことなかったけど……」

慎吾と結婚する前……まだ加奈が現役の対魔忍であったときは、周りのどんな些細な気配も見逃すことはなかったし、ほんのわずかな隙を作ることもなかった。

対魔忍の宿敵である、魔族、そして魔の力に染まった者たちは、常に様々な卑劣な手を講じて、対魔忍を貶めようとしているのだ。

しかし今は……。

（対魔忍だった頃は、いつも私の隣には血と戦いがあった、……けど今は、隣には慎吾さんがいて、悟がいて……。本当に幸せな時間が傍にある。そう、これが私の選んだ幸せ。でも私、幸せの中で、ちょっと気を抜いていた部分があったのかも……。ん～、体型の方は、維持してるつもりなんだけどなぁ）

対魔忍を引退したことに未練がないわけではない。

他人の、そして世界の平穏な日常のために、悪を倒す……。

代々受け継いできた忍びとしての宿命と責任には、強い誇りと、陰ながら人の役に立っているという確かな充実感があった。

けれど今、加奈が覚えている、家族を大事にしたいと心から思える幸せは、そ

れとはまったく別の幸福感だ。

自分が選んだ道に、後悔などない。

妻として、母親としての幸せを与えてくれる慎吾や悟には、強い感謝と愛情を忘れたことはない。だからこそ――。

（対魔忍だったときほどってわけでなくても、もう少し気を張った方がいいのかもね。なにより、健也君に悪いことしちゃったし、慎吾さんや悟にだって、変な誤解は与えたくないし……）

対魔忍としてではなく、一人の主婦として――家族の、そして家族を慕ってくれる人の気分を害したくはない。

そのためには、自分や過去を卑下することなく、今ある幸せのために、もう一度心身ともに活を入れる必要がある。

「よしっ、それじゃ気合を入れて、まずは部屋の隅々まで掃除しますかっ。どうせ悟は泥だらけで帰ってくるんだし、それまでにきちんとしておかないとっ」

加奈がそう言って、気持ちを新たにしようとしたときのことだ。

『……この数日、関東一円で続いている、女性の失踪事件のニュースの続報です』

テレビから流れてくるのは、この一か月余りで立て続けに起きている、女性失踪事件についてだ。

ここ数日、芸能人や政治家のスキャンダルばかり流れていて、続報が伝わってこなかった事件だが、どうやらなにか進展があったらしい。

モニターには、さらに新しい被害者が出ていることと、これまでの被害者の顔写真の一覧とともに、これらの女性に大きな関連性は見られない、という警察のコメントを伝えている。

「へぇ、この事件、まだ犯人が捕まっていないのね。被害者は女性ばかりだけど、悟にも注意するよう言っておかないと……えっっ、そ……そんな……っっ!?」

だが、ふとその女性たちの顔写真、そしてその欄外に記された名前を見た加奈は、まるで心臓が飛び出るほどの衝撃に見舞われた。

モニターに映る女性たち数人の顔……、みな加奈と近い年で、美しく、凛々しさを秘めたものばかりだ。その顔、そして名前のすべてに、加奈は確かに見覚えがあった。

「香苗（かなえ）……静（しずか）、涼子（りょうこ）まで……っっ！　彼女たち、みんな引退した対魔忍じゃない

のっ！」

思わず声を荒げ、ソファからバッと立ち上がってしまった加奈。

（間違いない。彼女たちは、みんな私が知っている対魔忍だわ。時期は違うけれど、みんなそれぞれの事情で対魔忍を引退したはず……。これは、何者かが元対魔忍を……。私たちを狙っているというの!?）

さっきまで過去のことだと思っていた〝対魔忍〟という事象が、数年ぶりに、とてつもない現実感をもって、加奈の心を黒い霧で包み込んでいく。

テレビをじっと見つめていたが、それ以上の情報はなく、すぐ別のニュースに切り替わってしまった。

だが加奈は、そのあまりに突然のことに、茫然と立ちすくんでしまう。

（現役対魔忍への人質……!?　いえ、それなら、こんなに複数を、こんな目立つ形でさらうはずがない。それに対魔忍は、今や政府の組織。毎年、毎回、毎日のようにセキュリティは変更、強化されていたし、私たちから得られる情報なんて、たかが知れているはず、なのになぜ……っ!?）

事件を分析していくうちに、加奈の想像を超えた魔の手が、引退した対魔忍た

ちに迫っているという、不吉な予感が冷たく背筋を流れた。

（でもニュースになるほどなんだし、現役の対魔忍たちが気づいていないはずはないわ。人に仇なす魔を誅するのが対魔忍の役目。引退した私がどうこうするより、本部に任せておいた方が安心……か）

対魔忍の実力は、元対魔忍である加奈がよく知っている。

井河アサギを筆頭とする、現在の対魔忍組織は、決して魔族たちやその一派に、後れを取るものではない。

だが、現に見知った元対魔忍の行方が知れないという情報を聞くと、つい心が急いてしまう。

加奈は、リビングを出て、二階にある慎吾との寝室へと入る。

そこに……慎吾や悟、そして忍びの技術を知らない一般人には、決して見つからない場所に隠した、対魔忍時代の愛刀である、短刀を取り出した。

（なにかのためにと、隠しておいたけど、まさかまた目にすることになるなんて……）

アサギたち、本部のことは信頼している。

だが同時に、今の加奈の命や人生は、加奈ひとりだけのものではないのだ。

（私が失踪してしまったら、慎吾さん、それに悟はどうなるの？　いいえ、それだけじゃない。引退した対魔忍がターゲットになっているということは、その周りの人々も襲われる危険があるということ……っ）

使わないのであれば、その方がいい。取り越し苦労であれば、それが一番だ。

しかし、加奈には守る者がいる。守りたい家族のためには、研鑽した力を行使する、妻、そして母親としての覚悟がある。

「慎吾さん、悟……。私のせいで、迷惑をかけるかもしれない……。ごめんなさい、けど……っ。……私が、みんなを絶対に守ってみせるわっっ！」

加奈は湧き上がる強い想いを、忍ばせた愛刀に込める。

（でも、だからといって、変に気を張って、慎吾さんたちにストレスをかけてもいけないわ。いつも通り、いつも通り……。そう、これは潜入任務の延長よ。普通に……そして一瞬で切り替える。そうよね、加奈っ）

主婦であると同時に、忍びの技を使う手練れの戦士でもある。その気持ちを自在にコントロールする。

「って、あれ？　もうこんな時間!?　ああ、まだお風呂の掃除と……それにスーパーのタイムサービスが……っ」

忍びらしく――加奈は、さっきまで、ざわつき、そして昂っていた意識をスッと切り替え、対魔忍ではない……一人の主婦としての柔らかな表情に戻す。

その心の内に、強い家族への愛情と、決して譲れぬ対魔忍としてのプライドの炎を燃やしながら。

それから、数時間後――。

「……よし、必要なものは買ったし……って、もうこんな時間？　悟たち、まだ公園で遊んでいるのかしら？　例の件もあるし……、早く帰るように言わないと」

加奈が様々な主婦の仕事を片付け、買い物袋を携え、自宅を出てから一時間あまり。

時刻はすでに18時を回っており、夏の陽差しは、ここから一気に夜の帳を下ろす時間帯だ。

買い物を終えた加奈は、パンパンにつまった買い物バックを両手に提げながら、

悟たちが遊んでいるだろう公園の前で、足を止めた。
歴戦の元対魔忍らしく、加奈の切り替えは早い。
すでに心は主婦モードだが、だからといって、不審な事件への警戒感を解いたわけではない。
「あ、いたいた。悟～～～～っっ！　もうこんな時間よ～～っ。早く帰りなさ～～～いっ！」
「お、おばさんっ!?　悟くん、加奈おばさんが呼んでるよっ」
「なんだよ健也。今いいとこ……えっ、ママっっ!?　っと、うわ、しまった……っ」
公園の奥で、サッカーに興じている悟を見つけ、加奈は大きな声で呼びかける。
その声にいち早く気づいた健也の知らせに驚いたのか、悟はボールのコントロールを失敗し、蹴り損ねたボールが、ビュンッッ！　と加奈の元へと一直線に向かってくる。
子供のキック力とはいえ、なかなかに強烈（きょうれつ）だ。普通の主婦では、避けることさえ難しい速度。しかし――。

「っと……」

それを加奈は買い物帰りの主婦とは思えない、軽やかな身のこなしで、胸トラップすると、完全に勢いを殺されて落ちてきたボールを軽く蹴り上げ、ポンッと両手でキャッチする。

サッカー経験者でも唸るほど、無駄のない美しい動きだったが、元対魔忍である加奈にとって、この程度どうということはない。

「うわぁぁ、おばさん、サッカー上手なんですねっ。まるでプロの選手みたいだっ！」

ボールを拾いに来た健也が、その無垢で愛らしい瞳をキラキラと輝かせながら、文字通り大人と子供ほどの身長差がある加奈を見上げた。

「ふふ、ありがとう、健也君。って、こら、悟～～～っっ、危ないじゃないのっ！　それに健也君に拾わせるんじゃなくて、自分が取りに来なさ～～～いっっ！　ごめんなさいね、健也君。また悟が勝手なことばかり言って……」

「い、いえ、僕は気にしてないですから」

「健也君は、いつも優しいわね。まったく悟にも爪の垢を煎じて飲ませてあげた

いくらいだわ」

「いや、僕はそんな……。悟君だって優しいですし、それにオバさんの方がもっと……」

夕陽の色か、彼の内に秘めた心の色か。健也の頬が、わずかな朱色に染まる。

「っとぉっ、ごめんママ。いきなり健也が、ママが呼んでるって言うから、つい足元がすべっちゃってさ」

「な～にが、つい、よ。健也君がおとなしいからって、人のせいにしないのっ。まぁ、いいわ。さぁ、もうすぐ暗くなるし、今日はこのあたりにして、ママと一緒に帰りなさい。……あ、そうだ。健也君も今晩いっしょにどう？　ご両親にも伝えておくから、ね？」

「え、い……いいんですか？」

「遠慮しなくてもいいのよ。実は思ったよりお肉が安かったから、ちょ～っと買いすぎちゃって……。夏だから傷むのも早いし、健也君が食べてくれると助かるわ」

「おっ、いいじゃん健也っ。一緒に食べようぜ。あ、わりぃ、みんな。今日はこ

こまでにして、明日また続きやろうぜっ」

悟の一声に、他の子供たちは、嫌がる素振りもみせず、公園の入り口に立つ加奈たちに別れの挨拶をしながら、各々の家へと帰っていく。

わが息子の、たいしたリーダーシップと慕われぶりに感心しながら、加奈は、ひとまず自分の目の届く場所に、悟を置けたことにホッとする。

「ねぇ、ママっ。今日の晩ご飯は⁉」

「ちょっと悟、出がけにちゃんと言ったでしょ。今日は悟からのリクエストのハンバーグだって」

「あっ、ごめんごめん。へへ、食べて驚けよ、健也。ママのハンバーグ、マジでおいしいからさ。結婚する前にパパのために、習ったっていうママの必殺技なんだよ」

「ちょ、悟……っ。必殺技って……もうっ」

まだ恋愛のイロハも知らない悟は、伝え聞いたことを何の気なしに話したのかもしれないが、対魔忍を辞めてまで愛を貫いた夫との関係……もっといえば、対魔忍であった時から、愛を育んできた関係を、健也の前でひやかされているよう

な気持ちになり、年甲斐もなく、初々しい恥ずかしさを覚えてしまう。

「お、オバさんのとっておき……。い、いいんですか、僕、本当に晩ご飯ご一緒して……」

「もちろん、いいのよ。それにご飯はやっぱり大勢で食べた方が楽しいでしょ？」

加奈が帰ろうとした、そのとき……っ。

「……っっ！」

ヒュンッ！

ふいに空気が裂ける音がしたかと思うと、子供たちが帰った公園に、忽然（こつぜん）と一人の男が現れた。

年のほどは40～50。

夕方とはいえ、気温はまだ30度近い。そんな猛暑日に、燕尾服に似た、全身黒づくめの服装。目立つ猫背に、不健康そうな浅黒い肌と白髪……。

「マ、ママ、あの人やばいよ……」

「オバさん……」

一目でわかる、その異質な雰囲気に、さっきまで元気に遊びまわっていた悟た

ちが、ギュッと加奈の手を握る。
常識で考えれば、危険な不審者。しかし周りの空気すら一変させる、その禍々(まがまが)しい趣(おもむき)は、それがただの人間でないことを、加奈の本能に叩きつけてくる。
「……魔族っ！　……まさかっ!?」
「……え？　オバさん、なんて……」
普段の柔和な感じとは、まるで違う……怒りを押し殺すように、小さく呟いた加奈の言葉を問おうとした健也の声は、男の次なる行動によって閉ざされる。
「くくく、察しがいいな。さすがは元対魔忍。わかっているなら話は早い……っ！」
男が、そのヒョロリとした見た目からは想像もつかない、まるで野生の肉食動物のようなダッシュ力で、加奈、そしてその横の悟と健也に飛びかかってくる。
（こいつが引退した対魔忍失踪事件の犯人!?　……っっっ！）
敵の武器は、右手から伸びる五本の爪。
だがブランクがあるとはいえ、戦士として鍛えられた加奈にとって、決して避けられない攻撃ではない。……ただし、それが十全の環境であったならの話だ。
「ひ、いいっっっ、ママッッ。ママっっ！」

「オ、オバさんっっ！」

「え……あっっ、悟っ、健也君っ!?」

反射的に、頼れる加奈の両腕に、ギュッと抱き着いてくる悟と健也。

闇の住人との戦いを知らない一般人、しかも子供であれば当然の行為だ。しかし、守るべき息子たちに身動きを封じられた加奈は、とっさに振り払うこともできず、窮地に陥ってしまう。

（くっ、しまった……っっ！　まさかこいつ、ずっと私の隙を窺って……!?　だめ、このままじゃっっ！）

加奈は、とっさに自ら敵の攻撃を受けるかのように、身体を前に出し、幼い息子と、その友人を守ろうとする。

してやったりと言わんばかりに、メガネの奥の曇った眼を光らせた魔族が、伸びた爪を加奈の肉感的な身体に突き立てようとした、その瞬間……。

ガキンッッッ！

噴き出す鮮血音の代わりに響いたのは、金属と金属が激しくぶつかり合った鈍い音だ。

痛みの覚悟を決めていた加奈と魔族の前に、割り込むように現れた一つの影。
その人物が握っていた鎖が、男の爪に巻き付き、すんでのところで加奈を救ったのだ。
その人物が、ゆっくりと顔だけを振り向かせ、驚く加奈と視線を合わせる。
「……っっっ!?　あ、あなたは……っ！」
加奈は目の前に立つ、その人物……その美しい女性の正体に、小さく声をあげた。
切れ長の瞳に、ふわりとたなびくロングヘア。
まさにクールビューティを体現したかのような、男性ならば放っておかない、とびきりの美人だ。
スッとしつつも、ボンッと突き出た二つの柔らかそうな巨乳に、ボリュームたっぷりのヒップ。そしてムチムチの媚肉がたっぷり乗った、同性から見ても悩ましい気な太もも。
女としての性的魅力に溢れた身体でありながら、その女肉の内側には、力強さと美しささえ感じるほどの、鍛え上げられた筋肉を秘めた、匂いたつほどに官能

的なボディ。

それらを包み込み、女肉を締め付けるのは、ＳＦチックな露出度の高いボディスーツだ。

一見、違和感を覚えそうな、口を覆うマスクも、彼女の美貌の前では、その美しさと妖艶さを際立たせる、至高のアイテムとなっている。

「あなたは……っ！　夏鈴（かりん）……っ！」

「……くっ、また貴様か、夏鈴っ！」

加奈、そして魔族の男が、片方はうれしそうに、そして片方は忌々しそうに、同時に彼女の名前を口に出した。

夏鈴……そう呼ばれた女性は、マスクの下から、その美貌にぴったりの、わずかに低い、美しい声音を吐き出した。

「久しぶりですね、加奈。そして……ふっ、何度だろうとお前の前に現れる。お前が魔族で……私が対魔忍である限りなっ！」

魔族に向けてそう啖呵を切った夏鈴は、再びこちらを見やると、わずかにコクリと頷いた。

「……っっ！　……ごめんなさい、悟、健也君……ハっ！」

そのジェスチャーの意味に気づいた加奈は、高速で繰り出した手刀を、悟、そして健也の首元に打ち込み、二人を気絶させ、地面に優しく寝かせる。

対魔忍の存在は、一般人にとっては知らなくてもよいこと。

そしてなにより、これから起こる人と魔の戦いを、こんな幼い子供たちに見せるわけにはいかない。

夏鈴が、再び小さく頷き、正面へ顔を向け直す。

切れ長の鋭い戦士の目つきが、目の前の白髪の魔族に強い殺意と憎悪を向けた。

「……これ以上、元対魔忍に手を出させるわけにはいかない。失踪した人々の居場所も吐いてもらうぞ、今日、ここでなっ！　はぁぁっっ！」

マスクの下から吐き出した裂帛（れっぱく）の気合とともに、夏鈴は鎖を持った左手に力を込め、同時に、隠し持っていたのだろう、一丁の拳銃を右手に握る。

「食らうがいいっっ！」

ダァァンッッ！

硝煙とともに、男の膝へ向けて放たれる一発の弾丸。

もちろん通常の弾などではなく、対魔族用の特殊金属を用いたものだ。

だが敵も異能の者。

人間では計り知れない膂力を発揮し、夏鈴の鎖の拘束から爪を外すと、人体では不可能なほど歪に足を捻じ曲げ、夏鈴の放った弾丸をすんでのところで回避する。

「ちっ、相変わらず、往生際の悪いヤツだ」

「くくく、戦闘力の低い淫魔だと思って舐めてもらっては困るな。私の目的を果たすまでは、死ぬわけにはいかんのだ。夏鈴、なんなら現役対魔忍である、お前も〝私の計画の贄〟にしてやろう！」

「っっ、ほざけっっっ！」

互いの戦意を、刃のように鋭い言霊に乗せて、対魔忍と魔族の二人が、公園で激突する。

穏やかな日常の象徴であったはずの公園が、一瞬にして非日常の世界の中心へと変貌していく。

ギンッッッ！　ダァァンッッッ！　ガキィイッッ！

土煙を巻き上げ、金属同士の激しい激突音を響かせながら、目にも止まらぬ高速戦闘が繰り広げられている。

「……さすが夏鈴ね。昔とまるで変わってない。……いいえ、さらに強くなっている。すごいわ……これが現役対魔忍の力……っ」

加勢に現れた夏鈴……本名、杉田（すぎた）夏鈴とは、対魔忍を辞める前に、何度か面識があり、同じ任務についたことも、一度や二度ではない。

その頃から夏鈴の実力は、魔族の間でも恐れられるほどのものであり、数年を経て、その技はさらに磨かれている。

それを裏付けるように、戦いは終始、夏鈴の優位に進んでおり、このままいけば、彼女が魔族を打ち倒すのは、時間の問題なのは確実だった。

（この事件、夏鈴が担当していたのね。彼女の腕前なら、もう安心だわ……）

魔族に襲われたときは、自分の命に代えても悟たちを守らなければと覚悟を決めていたが、見知った対魔忍の登場で、加奈の中に強い安心感が広がっていく。

一度引退し、実戦から離れている自分が出しゃばるよりも、夏鈴に任せた方が得策だろう。

しかし同時に、その夏鈴をもってしても、未だ、事件を収めるに至っていないという不安が加奈の心に、わずかな棘となって残ってもいた。

「たかが淫魔ごときが、私に勝てると思うなっっ！　今日こそはっ！」

「ちっ、さすがにやるな夏鈴っっ！　だが……くくくっ！　私とて、対魔忍相手に無策でどうこうできるとは思っていないのだよっ！」

男の眼鏡の奥の、死人のような瞳が赤く光ったかと思うと、公園を赤い瘴気が包み込んだ。

瘴気の広がりに連動するかのように、さっきまで明るかった景色は、ちょうど陽が落ちていく中で、ゆっくりとその色を消していく。

逢魔が時と呼ばれる、光と闇が溶け合い、夜に巣くう魔の力が増してくる時間帯。

足手まといになる悟と健也の存在だけではない。

男は加奈を襲撃するにあたり、夏鈴が加勢にくることを想定し、その対応策として、事前にさらなる罠を張っていたのだ。

「ぐへへっっ、お呼びですかい、旦那あっ？」

霧にも似た赤い瘴気の中から現れたのは、無数のオークたちの群れだった。
その中のリーダー格だろう一匹が、低俗なオークらしい下卑た喋りで、魔族の男に話しかける。
「本音を言えば、お前たちを呼びたくはなかったが、まぁこういう状況だ。せいぜい払った金の分は働いてもらうぞ？」
「ははははっ、そりゃあもうっ。狙いは引退した対魔忍の拉致。で、邪魔な現役対魔忍も倒せば、そいつは俺らでヤリまくってもいいって話でしたよねぇ？」
「まぁな。……そういうことだ、夏鈴。気づいているだろうが、すでにこの一帯は私の結界内。こいつらの能力はかなり底上げされているから、ただのオークと思わない方がいいぞ、くははっっ！」
「チッ、相変わらず姑息な……っっ！」
夏鈴が舌打ちしながら、それでも衰えぬ闘志で銃、そして鎖を構える。
そんな彼女に、三十を超えるオークたちが一斉に襲い掛かってくる。……が、それを呼び寄せた魔族の男は、仇敵たる夏鈴に見向きもせず、オークたちの群れを夏鈴からの壁にするようにして、一直線に加奈の方へと突進してくる。

「っっ、しまった……っ！　加奈、逃げてっっ！」
「夏鈴っっ!?　……っっ！」
敵の狙いは、あくまで加奈。
男は最初から、増援によって夏鈴の心に一瞬の隙を作りだし、その間に、加奈を拉致しようと企んでいたにちがいない。
「くく、逃げたいなら逃げるがいいっ！　お前の息子たちも連れていけるのならばなぁっ！　引退した対魔忍など、私ひとりで十分だっっ！」
瘴気と夕刻という時の力か。男のスピードは、先ほどより格段に上がっている。
加奈ひとりならともかく、悟たちを連れて逃げる時間など与えてくれそうにない。
いや、この魔族は初めから悟たちが、加奈と一緒にいるところを狙ってきた。
それはつまり悟たちを、男が言う〝計画〟のための駒としてしか見ていないということであり、加奈を手に入れるためならば、悟たちの身の危険など全く考えていないということだ。
自分のために傷つく悟、そして健也を想像したとき、加奈の心に、熱いものが走る。

それはかつて日々抱いていた強い使命感。そして今まで感じたことのなかった、使命よりもさらに熱い、何物にも勝る母性の衝動――。

（――私はもう対魔忍を引退している……。けれど、そうっ、決めたはずよっ！私は、家族を……周りにいる人々を守ってみせるってっっ！　だから……っっ！）

男の振りかざした爪が、目の前まで迫る。

「どうした!?　覚悟を決めたか？　ふふ、対魔忍といえど、やはり一度引退してしまえば、ただの女よ……っっ！」

「……ええ、そう。お前の言う通りかもね。けれどそれはお前が私の……私の大切な人たちを傷つける前のこと……」

ゴウッッッ！

公園を覆う瘴気が、大きく揺れる。その圧力は、今まさに危機に陥っている加奈から発せられたものだ。

その気迫は、ただ戦いから退いた者のそれではない。

大切な人たちのために、自分のすべてをかけられる妻、そして母親になった、それを貫く覚悟を決めた者だけが放てる、唯一無二の輝きだ。

「……覚悟しなさいっ！　今だけ戻るわっ！　私は……対魔忍よっっ！」

ギィィンッッ！

甲高い金属音が響き、男の爪が根元から、きれいに切断され、力なく宙を舞う。

揺るぎない信念とともに、目にも止まらぬ速度で繰り出されたのは、隠し持った愛刀の閃きだ。

「な、なにっ!?　そ、その姿は……き、貴様ぁぁっっ！」

魔族が驚くのも無理はない。

まるで変わり身の術のように、加奈はさっきまで着ていた、若い一児の母らしいラフな上下を脱ぎ捨て、かつての……悪しき魔族を屠（ほふ）っていた頃の姿を、今一度晒したのだ。

対魔忍スーツ――それは、アメコミヒーローのピッチリボディスーツと、忍者の忍び装束をミックスしたかのような、サイバー感あふれるデザインの、戦闘用多機能スーツだ。

ボンッと突き出た爆乳や、股間部からお尻にかけての、柔らかく張りのある媚肉の形がはっきりと現れた姿は、加奈の熟れた女ならではの、たまらないエロテ

ィックさを醸し出す。
見る者の心を奪う官能とは裏腹に、各方面の最新技術が詰め込まれたそのスーツは、鍛え上げられている対魔忍の能力を、さらに引き上げるよう設計された、まさに対魔忍の象徴ともいえるものである。
「加奈……っ」
「迷惑をかけたわね、夏鈴っ！　悪いけれど、こいつは私に任せてもらうわっ！　家族を傷つけようとする魔族は、絶対に許さないっ！」
数年ぶりとなる加奈の対魔忍姿、そしてその力強い覇気ある言葉に、クールな夏鈴の口元が、マスクの下でわずかにほほ笑んだようにも見える。
「ふっ、久しぶりだな、その姿。おい、淫魔。ひとつ忠告しておいてやる。降伏するなら今のうちだ。対魔忍の情け……命が大事なら従うことだな」
「くっ、ふはは！　なにを言っている夏鈴っ!?　スーツを着たくらいで、ブランクが戻るものかっ。現役のお前ならともかく、こんな平和ボケの元対魔忍に私が……っ！」
「……へぇ、でも悪いけど、ぜんぜん隙だらけなのよねっっ！　でぇぇやあああ

っっっ！」

「なに……!?　ぐぼげおあぁっっ、おぁああぐぁはあああっっ！」

ババババッッッ！　ドガッッ、バギィィッッ！　グボォオッッ！

ビュッ！　と風が揺れ動いたあとには、すでにすべてが終わっていた。

加奈の猛烈な拳、そして蹴りのラッシュが、鈍く、そして重い音をたてながら、男を問答無用で殴り倒し、ドシャァアッという、痛々しい音とともに地面に沈めてしまう。

目にも止まらぬ速さと、格闘技のヘビー級チャンピオンを上回る重さの攻撃を繰り出しながら、加奈の呼吸はまったく乱れていない。

「き、きしゃま……な、なんだその強さは……っ!?　とっくに引退したはずでは……っ」

鼻は曲がり、歯は折れ、足元をガクガクとふらつかせながら、男がどうにか立ち上がり、壊れたメガネの奥から、腫れ上がった瞳で、忌々しそうに加奈を見つめる。

「母は強し、ってやつよ。お前は私の家族を傷つけようとした。家族を守るため

なら、ブランクなんて軽く越えてみせる。……それが母親となった対魔忍の力よっ！」

その穏やかそうな見た目とは裏腹に、現役時代から、加奈はパワー系の対魔忍として、広く知られ、闇の者たちから恐れられてきた。

シンプルがゆえに強烈な打撃の連続……。

今まで無数の強敵を打ち倒してきた加奈にとって……、そして守るべき者のために戦う母の顔を持つ対魔忍にとって、拳が届くこの至近距離で、目の前の淫魔に負ける要素は、１％も見つからない。

「くっ、おのれ……おい、オークどもっっ！　夏鈴はいいっ！　この女を……っ!?　な、なにぃっ!?」

「――なんだ、金で雇ったチンピラオークどもか？　こんな連中が結界で多少強くなった程度で、この私に……いや、対魔忍に勝てるはずがないだろう？」

「く、くそ……い、痛てぇっ。なんだこの女っ！　くそ対魔忍がぁぁっっっ！」

夏鈴の周りにいた三十を数えたオークたちは、すでにその大半が絶命しており、リーダー格の額には、苦無（くない）で斬り裂かれた傷が、深々と残っている。

「さすがっ。やるわね、夏鈴っ」

「そちらもな、加奈。さぁ、これが対魔忍の力だ。覚悟しろ、淫魔っ！」

じりっと、前後から挟み込み、事の元凶である魔族を追い詰める麗しい二人の対魔忍。

「ちっっ、まさかこれほどとは……っ。くくく、だが気に入った。吉沢加奈。そして杉田夏鈴。その強さ、気高さ……そしてその内に秘めた……。くく、やはり対魔忍はいい。私の計画に相応しい牝豚どもよ……っ」

「っっ!?　しま……っっ」

パパパパパァンッッッ！

瞬間、歯の折れた男の唇がニヤリとほほ笑んだと思ったときには、オークたちの死体から発した、強烈な音と光が周囲に炸裂し、それが収まったときには、男がまんまと逃げおおせた後だった。

オークたちに事前に目くらましを仕込んでいたのだろう。オークの生き残りも逃げおおせており、後に残ったのは、平常に戻った夕刻の景色だけだった。

加奈は対魔忍スーツを、元のラフな服装に素早く戻し、悔しそうに唇を噛む。

「くっ、まさかまだ逃げる手を残していたなんて……っ」
「すまない、加奈。私の油断だ。この件は必ずこちらで……」
いつもクールビューティ然としている夏鈴のすまなそうな表情に、加奈は責めることなく、穏やかな笑みを返す。
「いいのよ、気にしないで夏鈴。ひとまずみんな無事だったのだし。それより、また会えてうれしいわ」
「ありがとう。私もだ、加奈。しかしまさか、また加奈の対魔忍姿を見られるとは思わなかった」
「ちょ～っと、現役時代よりパツパツになっちゃってたけどねぇ。……はぁ。けど、私たちのことは心配しないで。私自身はもちろん、家族は必ず守ってみせる。だから夏鈴は、あの魔族を捕らえることに集中してちょうだい。あなたが担当なら、私も安心できるわ」
「ふっ、そういってくれると助かる。この件に関しては、本部も憂慮している。あいつが狙っているのは、加奈も知っての通り、引退した元対魔忍だ。……目的も失踪者の居場所もまだわからないが、これ以上、やつの好きなようにはさせん」

「ふふ、それでこそ現役の対魔忍ね。懐かしいわ、その雰囲気」
「こちらは私たちに任せてくれ。加奈は、その子たちのために、優しい母親をやってくれればいい。……ただ奴はこちらの予想以上に狡猾だ。注意だけは怠らないでくれれば助かる。それでは……」
「ええ、事件が終わったら、またどこかで会いましょう。気を付けてね、夏鈴」
加奈の言葉に、夏鈴は何も言わず、目だけで頷くと、忍びの者らしく、シュッとその場から消え去ってしまう。
そのタイミングに合わせたかのように、加奈が気絶させた悟、健也が目を覚ましはじめた。
「……う、う～んっっ。あれ？　どうしたの、ママ？　あれれ～～っ？　ぼ、僕なんで寝てたんだっけ!?」
「あ、オ、オバさん……っ？　ぼ、僕はいったい……っ」
「ふふ、何でもないわ。遊びに熱中しすぎて、暑さで二人とも倒れちゃったのよ。涼しいところで安静にすれば、治るはずよ。だから、さっ、早く家に帰って夕ご飯にしましょっ、ね、悟、健也君？」

「おお、ご飯っご飯んっ！　そうだ、ママ、その荷物、重いでしょ？　僕が持ってあげるよっ」

「あ、あの……っ。ぼ、僕も持ちますっ！　オバさんは手ぶらで……っ」

そう言って、悟と健也が、二人で分け合って、買い物の袋を持ってくれる。

先ほど守ったお礼……というわけでは、もちろんない。

二人とも、自発的に加奈を想ってくれているのだ。だからこそ、悟はもちろん、その良き友達でいてくれる健也にも、感謝の念は尽きない。

「へぇ、ありがとう二人ともっ。それじゃ、家まで手を繋いで帰りましょうか？」

「え、い、いいよ……っ。さすがにそれは恥ずかしいでしょ、ママっ」

「遠慮しないのっ、本当は甘えん坊のくせにっ。ほら、健也君も。ふふっ」

「あ、はい……オバさんと一緒に。へへ……」

そうやって、加奈を中心に三人で手を繋ぐ光景は、幸せな主婦の生活の一幕そのものだ。

先ほどまで……そして現在進行形で動いている魔族の陰謀など、微塵（みじん）も感じられない。

（そう、今はこれでいいの。私がみんなを守らなくちゃ！）

気絶させたと同時に、特性の薬を嗅がせたことで、二人の気絶前の記憶は曖昧なはずだ。

対魔忍、そして魔族という単語も存在も覚えてはいないだろう。

知らない方がいい現実もある。

悟、そして健也は、普段から加奈を守る、と男の子らしく意気込んでみせたりすることがあるが、人外の者が相手では、あまりに危険すぎる。

「ママ、そういえば今日のご飯なんだっけ？」

「ん～～、今日はママの必殺ハンバーグよ。健也君、楽しみにしててね」

「オ、オバさんのひ、必殺……っ。は、はいっ！」

「おっ、健也、なに顔赤くしてんだよ？　はは～ん、さては朝のも、ママとパパのお出かけのキスを見て……」

「ちょっ、悟っ！　なにいきなり……っ。ね、ねぇ、健也君!?　違うわよ、ねぇ？」

「は、はいっ。ち、違うよ。ぼ、僕、なにも見てないから……そんな。キス、あれがオバさんとおじさんの、なんて……っ」

「おいおい～～、嘘が下手だな、健也はぁ？　顔がめちゃくちゃ……あ、ママも真っ赤だ～～っ」

「こ、これは夕陽のせいよっ！　あ、暑いなぁっ！　……もうっ、こら、悟、健也君の前でなんてこと……」

ひとまずの危機を乗り越え、加奈は主婦としての穏やかな日常へと戻っていく。しかし加奈は気づいてはいなかった。

一度、逃走したと思われた淫魔の気配が、すぐ近くに迫っているということを。

「ふぅ、家事って夏休みの方が、むしろ大変よね。お昼は毎日作らなきゃだし、洗濯物は増えるし……。さて、今日のお仕事も終わり、っと。……ふふ、慎吾さん、それに悟も健也君も、ぐっすり寝れてるみたいね」

時刻は、夜中の23時を回った頃。

仕事から帰ってきた夫の慎吾、そして息子の悟とその親友である健也との、楽しい夕食の後、遊び相手が欲しいという、悟のわがままから、今晩、健也は加奈の家に泊まることになった。

そして子供好きな慎吾、悟と健也がリビングでテレビゲームに熱中し、時折、負けたからとダダをこねる悟を加奈が叱ったりしていたのが、およそ一時間前までのこと。

仕事で、そして遊び疲れた男三人は、すでに二階に上がって、就寝中だ。

皆が寝静まった家の中、加奈は一人、一階のリビングで、乾燥が終わったばかりの洗濯物の仕分け作業を行っていた。

それが今、ちょうどひと段落ついたばかりだ。

加奈が作ったハンバーグをおいしそうに食べ、今もよく眠っている悟と健也。

その様子を見るかぎり、戦いが終わった直後に、二人に使った対魔忍秘伝の薬が効果を発揮し、二人はあの公園での恐怖の出来事、魔族、そして対魔忍という単語を覚えてはいないようだ。

慎吾の方は、最近仕事が忙しく、疲れがたまっているようで、加奈との夜の営みも、ここ数週間、行われていない。

（まぁ、その……慎吾さんとのセックスのことは、うん、いいとして……っ。とにかく二人に何事もなくてよかったわ。けど、あの魔族……。夏鈴の言う通り、

かなり狡猾ね。私を一度取り逃がしたからといって、諦めるようなタイプじゃない。あいつの脅威が去るまでは、気を抜くことはできないわ）

加奈の腰には、いまだに短刀が隠されており、戦闘に特化した対魔忍スーツにも、いつでも着替えられる準備はできている。

家の各所には、魔族の侵入を監視する仕掛けがいくつも施されており、加奈の心自体も、まるで現役の頃に戻ったかのように、常に周囲に気を張っている。

（絶対に、みんなを守るっ。それが対魔忍だった私の使命よっ！）

「……さて、と……時間も時間だし、いい加減お風呂に入ってこようかな。久しぶりにスーツを着て、ちょっと蒸れちゃったし……。うぅ、でもちょっと、いやかなりピチピチだったな……。戦いに備えるのもいいけど、少しダイエットしなきゃ……」

数年ぶりに対魔忍スーツを着たとき、幸せな生活の中で、ふくよかになった媚肉が、今にもはちきれんばかりだったのを思い出し、加奈は立ち上がり、ちょっとお腹やお尻周りを触ってみる。

決して太っているという感じではない……逆に、年齢を重ねた女性らしい、若

い時よりも色気の増した豊満な肉付きボディだが、身体のラインがはっきりと出る対魔忍スーツを着ることを思えば、少し気恥ずかしくもなってしまう。

「よし、明日からトレーニングするわよっ！　鍛えないとっ、みんなを守るために……っ！」

そう言って、加奈がお風呂場へ向かおうとしたときのこと……。

「あ、オ、オバさん……っ」

リビングの入り口に、健也が立っていた。

「あら、どうしたの、健也君？　喉かわいちゃったとか？　お水、ついであげようか？」

健也はいい子だが、奥手でナイーブなところがある。

公園での記憶は失っているとしても、そのストレスが身体や心に負荷をかけていないとは言い切れない。

加奈は、健也にニコリとほほ笑むと、優しく穏やかな声で問いかけた。

「い、いえ……ち、ちがうんですオバさん……っ。あ、あの僕……うぅ、僕のアソコが……うぅっっ！」

「ちょ、どうしたの健也君っ!?　一体何が……っ？　え、こ……これは……っ!?」

ふいに健也の穏やかな顔が、苦悶の表情に変わる。

慌てて健也に近づき、腰を下ろして症状を確かめようとした加奈の目に飛び込んできたのは、半ズボンのファスナーを突き破らんばかりに、ギンギンに勃起した健也の、幼いというには凶悪すぎる、牡欲に膨れ上がった肉棒だった。

（え、これ……健也君のオ、オチンチン、なのっ!?　な、なんて大きさ……っ。い、いえ。そうじゃなくて、この立ち上がる淫気は……っ！）

可愛らしい顔の眉をしかめながら、苦しそうに、そしてせつなそうに呻く健也の勃起ペニスの先から、性欲の乱れ……淫気と呼ばれる悪しき気配が漂っている。

それは明らかに、普通の性的興奮反応ではなく、何者かによって、性欲を暴発させられている証だ。思い浮かぶ相手は一人しかいない。

（あの淫魔だわ……っ！　あいつ、いつの間にか、健也君にこんな仕掛けを……っ！　許せないっっ！　くっ、ごめんなさい、健也君っ）

息子の大切な親友を対魔忍と魔族の抗争に巻き込んだだけでなく、こんな卑劣

な罠を仕込まれたことに気づけなかったことを詫びる。

「オ、オバさん……っ。ごめんなさいっ。ぼ、僕、寝てたら急にオ、オチンチンが熱くなって……っ。が、我慢しようと思ったんだけど、ぜ、全然治まらなくて……っ。は、ぅううっ！　ど、どうなってるんでしょう、ぼくの……ああぅっ、僕のオチンチンんっっ！」

狂おしそうに言った健也が、その華奢な身体をブルッと震わせ、腰をグンッと前に突き出す。太ももはガクガクと震えており、女の加奈であっても、その暴走した性欲に翻弄されている様子が、はっきりとわかる。

（すさまじい淫気が健也君のオ、オチ……ペニスに充填されているわ。これは淫魔が使う性欲の呪い……っ。たしか対処方法は……っ）

対魔忍は相手が魔の力を使うものである以上、それに対処する知識も身につけている。

今日戦った相手は淫魔。そして健也のペニスにかけられた呪術は、淫魔が得意とする責めで、相手に性的興奮を高める呪いをかけ、それを発散させなければ、その相手を淫魔の下僕に貶めるという卑劣極まるものだ。

（その対処方法は、対象が男性の場合、精液を吐き出させ続け、その呪いの効力を弱めていくこと……。くっ、相手は悟の親友で、まだキスを見ただけで恥ずかしがるような、純粋な男の子なのに……っ！　なんて卑怯なことをっ！　けど……このままじゃ健也君が……っ）

強靭な精神力を持つ対魔忍であっても、淫魔の呪術には苦しめられることが多い。

それを一般人の……しかもまだ幼い子供の健也が耐えられるはずがない。下手をすれば、発狂して命を落としてしまいかねないだろう。

「はぁはぁ、オバさんっ！　おチンチンが爆発しそうですっ！　う、あぁっ！　ムズムズして、熱くて……っ！　ああ、こんなところ見せちゃって……ごめんなさい、オバさんっ！　うぅっ。僕、恥ずかしい……っ」

健也は、幼いながらも感じる恥ずかしさと申し訳なさで、今にも泣きだしそうに、顔をくしゃくしゃにしている。

そんな光景に、純粋無垢な子供の気持ちと身体を弄ぶ淫魔に対する怒り。そして、それを許した自分への叱責、なにより早く健也を楽にさせてあげなくてはと

いう母性が、加奈の想いを突き動かす。

「……健也君が謝ることなんてないわ。それに恥ずかしがることもないの。健也君くらいの男の子なら、おチンチンがこうなるのは普通のことなのよ。さぁ、深呼吸して。オバさんが、すぐにラクにしてあげるわ」

「は、はい……っ。ふぁっ!?　え、オ、オバさんっ!?」

加奈は言うと、そっと健也をリビングの床に押し倒し、はちきれそうなズボンをパンツごとずり下ろす。

狭いズボンの中から解放された健也の逸物が、グンッッッ！　と勢いよく、加奈の目の前にそそり立つ。

（この手の呪術は、性的快感が高まった方が、早く呪いが解けるはず……。大人の私が子供にこんなこと……。健也君のためにもよくないけど、仕方ないわ……っ！）

先ほど使った記憶を操作する薬は、脳に直接影響を及ぼすため、乱用はできない。

助けるためとはいえ、こんな淫らな行為を健也に刻むことに、後ろめたさを覚

えるが、それでも彼の命には代えられない。
「オ、オバさん……いったいなにを……!?　はぅぅっ」
「大丈夫よ、健也君。怖がらないで……気をしっかり持って。心配しないで、すぐにおチンチンの痛みも治まるわ」
（ふ～……。い、いくわよ加奈。これも元対魔忍の務め。私のせいでこんなことに。私しか健也君を救えないんだからっ！）
加奈もまたひとつ大きく深呼吸すると、着ていたシャツをブラジャーごと上げ、その年齢を重ねても、張りをまったく失わない爆乳を、息子の友達の前に晒す。
そのまま健也の下半身に覆いかぶさり、そのはちきれんばかりにパンパンに膨らんだ怒張を、柔らかく弾力の強い二つの乳脂肪で、根元からグニンンッッ、と思い切り挟み込んだ。
ブルンッッ！　むにむに……ッ。ぐにぐにぃッ。
「ふあっっっ、あ、んひぃぃっっ！　オ、オバさんっっ！　ああっっ!?　な、なにするのっ!?」
「今から、健也君のおチンチンに溜まった毒を、オバさんが搾り取ってあげるの

よ。気にしないで、健也君。こうするしか、あなたを助けられないから……っ」

言った加奈は、覚悟を決めたかのように、自分の胸を左右から両手で押し込むと、そのまま挟んだペニスを擦り上げるように、胸を上下に揉みこんでいく。

グニンッッ、グニンッッ！　プニィィィッ！

「あっ、ふぅううっっ！　ひぃいいんっ！　あっ、ああっっ、な……なにこれっ!?　す、すごくおチンチンっっ！　ああっ、オバさんのおっぱい、すごく……あああっっ！」

おそらく生まれて初めて、しかも親友の母親からのパイズリに、健也の可愛らしい顔が、まるで処女をなくした生娘のような涙目に変わり、頬が赤く染まる。

「いいのよ、健也君っ。我慢しないで。どういう気持ちか、言ってみて？　あふっ、オバさんのおっぱい、おチンチン、どんな感じなの？」

「あああっっ、き……気持ちイイです……っ！　ああっ、オバさん、ごめんなさいっ！　僕、気持ちいいっっ！　オバさんのおっぱい、柔らかくてあったかくて……オチンチン、気持ち良すぎるんですぅうっっ！」

床に寝転んだ健也が、今にも泣きだしそうな、恥ずかしさと幼い牡の興奮を全

開にした声音で、快楽を訴える。

小柄な全身がガクガクと痙攣しっぱなしで、加奈の胸にギュッと挟まれた肉棒が、さらに硬さと熱さ、そして大きさまでをも増大させる。

それは加奈の爆乳をもってしても、勃起ペニスのすべてを包み込めないほど巨大なものだった。

（な、なんて大きいおチンチンなのっ!?　この呪いにペニスを増大する力はないはずだから、これが健也君の大きさってこと!?　さ、悟のより……し、慎吾さんのよりはるかに大きいなんて……。くぅ、淫魔めぇっ！）

並の大人が租チンに見える健也の剛直の大きさ、太さに、加奈は自分の息子、そして夫のものと無意識に比べてしまい、強い羞恥心と背徳感に、ゾクリと背筋を震わせてしまう。

（わ、私がこうすることを見込んで、精神的に焦らしていこうというつもりなのねっ。本当に卑劣で下賤な魔族だわっ。けれどこれは人助けなのよ。私は家族を愛している。淫魔の手にはのらないわっ！）

加奈の対魔忍として全く衰えていない戦闘力から、正攻法では勝てないと知っ

た淫魔のことだ。

性的にジワジワと人間関係を侵食していくことで、加奈の心の疲弊を狙っている……最悪、加奈に淫らな欲求が芽生えることを期待してのことだろう。

だが、対魔忍、そして母親という、二つの折れない鋼（はがね）の心をもつ加奈に、そんな卑俗な罠は通用しない。

「健也君、もう少しよ。もう少しで終わるから、我慢してねっ……っ。ん、ふぅっ。んぐぅんっっ！」

加奈は胸の谷間から、己の存在を主張するかのようにそそり立つ健也の陰茎、子供らしくわずかに皮の剥けた雁首を、大きく開けた口で……まさにオナホールのように、パクリと頬の奥まで呑み込んだ。

「あっっ、あああああっっっ！」

瞬間、口の中で健也の極太カリが、ビクンッッ！　と跳ね上がり、加奈の舌を熱く硬い突起が思い切り叩く。

男の肉棒の中で最も感じる部位である、雁首、そして裏筋を、加奈は夫である慎吾のモノにするときを思い出しながら、口をいやらしくすぼめ、舌をねっとり

絡め、扱きぬいていく。

チュプ、ジュブンジュブンッッ！　じゅぶじゅぶっっ！　ぶじゅぅうっっ！

喉奥から染み出してくる唾液と、亀頭からあふれ出すカウパー粘液が、エロティックにすぼまった加奈の口の中で混ざり合い、男根を上下に扱く顔の動きに合わせて、卑猥な水音を家族団らんの象徴であるリビングに響かせる。

（あぁっ、慎吾さんにも滅多にしたことないのに……。息子の親友にこんなことっ。そ、それにやっぱり大きいわ、健也君のオチンチン……っ。し、慎吾さんのは、私のおっぱいから、ほとんど顔を出さないのに……。唇に触れる熱さがまったくちがう……っ。はぁ、んふぁ……っ。最近、ご無沙汰だったから……くぅ、余計に身体が……ぁっ）

加奈にとって、夫である慎吾が、初めてにして、唯一、身体を許し、愛した男性だ。

初めて触れる、慎吾以外の……それもまだ息子と同じ年でありながら、夫よりもたくましい逸物に、頭ではわかっていても、数週間セックスと無縁だった牝の身体と本能が、熱く貪欲に反応してしまう。

大人気PCゲームのコミカライズ始動!

『敗北乙女エクスタシー』にて連載中の期待の新作をピックアップ！　今回は大人気『対魔忍シリーズ』から『ママは対魔忍』のコミカライズのご紹介！　原作ストーリーに加えてコミカライズ版ならではのオリジナル要素も追加予定！

©Lilith

CHARACTER
吉沢 加奈
よしざわ　かな

ストーリー

優しい夫と元気いっぱいの息子、三人家族で平和に暮らす吉沢加奈。以前は対魔忍として活躍していたが、結婚を機に引退。十年以上経っても未だ新婚のような雰囲気で居られる事に幸せを感じながら、出勤する夫と登校する息子を見送る。家事をこなして何気なくテレビをつけると、聞こえてきたニュースにひかれて顔を向ける。ワイドショーをにぎわしている連続主婦失踪事件。「嘘でしょ…香苗、静、涼子」世間的には何のつながりもない女性たちではあったが、分かる人には分かる共通点があった。

母性溢れる女体が少年の欲望によって新たな快楽に目覚め堕ちていく描写は必見!

『敗北乙女エクスタシー Vol.22』にて連載開始!

■原作：Black Lilith　■https://www.lilith-soft.com/black/product74

ニジマガでもおなじみの人気ゲームがコミカライズ連載開始！

BEAT VALKYRIE EXSEAL

超昂神騎 エクシール 01

～双翼、魔悦調教～

THE COMIC

原作 ORIGINAL／アリスソフト

漫画 COMIC／SHUKO　原案 DRAFT／峰崎龍之介（みねさきりゅうのすけ）

神に代わりて
誅滅します！
バッ
よく吼えるわね
八つ裂きにしてあげたくなるわ
ブィィンッ
ズッ
ガキィィン
キリエル！
ズッ
ふふ
この程度
ガッ
どうと言う事ないわね
ガンッ
ズッ
ズッ

ドゴッ
たあ！
おのれっ
くそっ
結界が…！
よそ見してると
死ぬよ
キャアッ
あ!?

ぐ…
おのれ…
おのれおのれおのれ――

さあ
償いの時です
『悪意』の番人
シェムール！
あなたを封印します！
!!
アゼル！

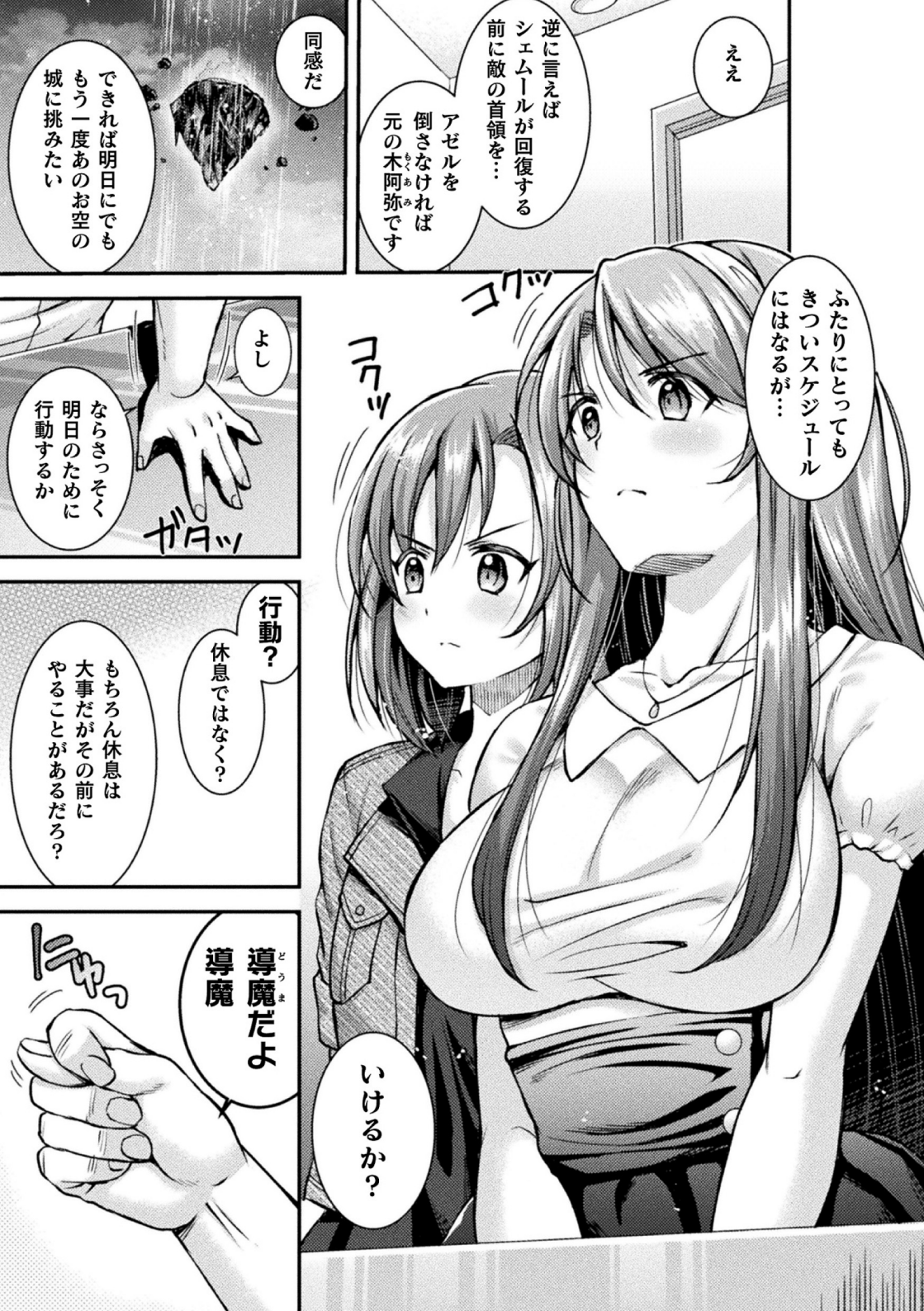
まさか
負けているとはな
ガタ
ガタ
ガタ
まあいい
お前はもう下がれ
ブツ
アゼル……
私たちが倒すべき
最後にして最大の敵
いつかは
向き合う相手
でも……
私もキリエも
いまの戦いで
消耗しています
このまま戦って
勝てるでしょうか……？
……ふん
興が乗らんな
…え？
見逃して
くれるって？
元より力の差は
歴然としている

そのうえ相手が肩で息をしているとあっては
殺す気も失せるというものだ
アゼル…
消えちゃったね
スゥ…
やれやれいまのは正直ビビったな
まさか中ボス戦にラスボスが乱入してくるとは
継彦
センパイ
ふたりともお疲れ
話すべきことはいくつもあるがまずは帰還してくれ
ベゼルにピザを用意させる
今日の分の祝勝会といこうぜ
はいっ
うんっ

スッ
エリス様
飲み物のおかわり
でございます
あっ
有難うございます
…
エリスさん
どうしたの？
え？
いえそのコトッ
いまさら
なのですが…
悪魔が自分の家にいて
あまつさえ
給仕までしてくる状況に
まだ慣れなくて…
あー なるほど
こうなるまでには
色々あった
もんね……
継彦？
そうだな

まず
『魔王エイダム』の
力を俺が継承し
だが
ベゼルが俺を
裏切ったことで
時を同じくして
やってきた
神騎のエリスが
これと対立した
『ベゼルを倒して
エイダムの力を取り戻す』
という目的が一致
元は一般市民だった
キリカが神騎の力を
得たのはこのあたりだ
幹部である
『魔将』を
次々と撃破していった
俺たちはそうして
新魔王ベゼル率いる
悪魔の軍団ウォーグリムと
戦い始め…
そして迎えた
決戦の時――

今度はベゼルがシェムザードを
つまり悪魔を騙っていた
堕天使シェムールに裏切られた
そしてその時神騎の頂点でありエリスの大先輩でもある
アズエルが強制的に『堕天』させられて誕生したのが最強の堕天使アゼル
つまりはこいつがラスボスというわけだ！
イッツ
なにはともあれシェムールっていう厄介な敵は倒した
結果的に逃げられはしたけど一朝一夕で回復するダメージではないはずだよ


ええ
逆に言えば
シェムールが回復する
前に敵の首領を…
アゼルを
倒さなければ
元の木阿弥です
同感だ
できれば明日にでも
もう一度あのお空の
城に挑みたい
ふたりにとっても
きついスケジュール
にはなるが…
コクッ
コクッ
よし
ならさっそく
明日のために
行動するか
ガタッ
行動？
休息ではなく？
もちろん休息は
大事だがその前に
やることがあるだろ？
導魔だよ
導魔
ニヤっ
いけるか？

今日の戦いでふたりとも魔力を消耗してる
明日また戦いに出るなら補給は必須だ
あと時間がもったいないから
もみん
バッ
今日は三人でヤろう
つ 継彦
もみん
ひゃんっ♡
いまは真面目な話をしているんです
スタ
スタ
スタ
なのに三人でだなんてそんな魔王的なこと…！
つ 継彦!?
あー もう聞いてないね
バターン!!

特務騎士
クリス
Special Knight
CHRIS
エリート軍人
異種交配録
高潔な女軍人に迫る触手生物の大群!
089タロー×TANAによる
SFファンタジー連載スタート!
小説 NOVEL／089タロー
挿絵 ILLUSTRATION／TANA

――バシュバシュッ！　ヂュドォ！　ヂュドォッ！

ピンクに輝くレーザー光が宙を切り裂き肉を貫く。

頭部と胴部に風穴を開けられターゲットどもが硬質な床に倒れ伏す。

「二体撃破。残り三！」

白と赤の人影が、右椀部に装着した銃口を向ける。

そこに飛びかかる敵影は二つ。腕は二本、足も二本、頭部は一つ、胴部も一つ。

しかしそれは、人間などではあり得なかった。

甲虫類を思わせる顔面。閉じきらない唇から覗くむき出しの歯。不気味に輝く瞳のない白い両眼。筋骨隆々の体躯（たいく）に赤褐色の肌。

二足歩行の人型エイリアン――そう呼ぶのがしっくりくる相手である。

その二体に向き合う人物は、ガントレットに似た右腕の得物から、続けざまに光条を撃ち放った。

――バシュッバシュッバシュッ！　ドウッドウッ！

二体は共に頭を撃ち抜かれ、もんどりうって床に落下する。熱線に焼かれた皮膚からはじゅわじゅわと肉の焦げる音がした。

「さらに撃破、数は二！」
「こちらは一体撃破。――合計12。残敵数無し。全員、警戒を怠らず損害状況を確認せよ」
全身黒の戦闘服を着た肩幅の広い長身の男が、ヘルメットのバイザー越しにざっと周囲を見渡した。
「我々は三。そちらは九。さすがだな、まさに達人技だ」
男はバイザーをあげ、堅物そうな精悍な顔立ちに、小さく笑みを作った。
「見事だった。クリス」
男が労ったのは白と赤の人影だった。先ほど四体を屠った者だ。
警戒を解く事なく注意深く周囲を観察しながら、人影は小さく、頭部を覆うヘルメットを揺すった。
「散発的な襲撃だ。問題ない。――ニザムたちの方は？」
ぶっきらぼうと言える口調とアルト領域の声で応じる。
その声の主は、パワードスーツで全身を覆った人物だった。人物――そう、人間。中身は見えないが、間違いなく地球人類だった。

戦闘服の男も然りだが、こちらはそれ以上に重厚な装いである。両肩、胸部、腹部、頭部、それら急所は肉厚な装甲に覆い隠され、一般的な戦闘員とは明らかに異なる兵装だった。

白を基調とし、各所にアクセント調の赤。顔を覆い尽くすヘルメットのバイザーは、濃淡のある橙色（だいだい）。一見すると宇宙服に見えなくもない。

重装ゆえに肩幅は広く見え、全体的にも大柄と目に映る。しかし手足等は意外にもスリムであった。耐衝撃性を重視した曲線中心のフォルムは見た目ほどの重量感はなく、太古の鎧甲冑とは異なる近代的な機能美すらあった。機動性確保のため上腕や脇腹等は比較的装甲も薄くなっており、随所に人間らしさも垣間見える姿であった。

（連中が潜んでいたという事は、やはり、ここに奴が……）

クリスと呼ばれた白と赤のその人物は、右腕に装着した得物を撫で、地下坑内にアリの巣のごとく広がる施設、その硬質な人工の壁を見やる。

倒れ息絶えているのは12体ものエイリアン。漠然としたその呼称は、しかし、あながち間違いでも無い。連中はこの地球上においては異物、すなわち地球外生

命体なのだから。

そのエイリアンどもを辛くもといった形で撃退した、自分を除く五名の戦闘員たち。

緊張に強張った彼らの表情をチラリと目で窺いながら、クリスは無音で小さく息をついた。

※

22世紀初頭。

人類長年の夢だった宇宙開拓が進み、ようやく月面にステーションが建造された矢先の出来事であった。

ふとしたきっかけから地球人類は異星人の存在を確認し、未知との邂逅に不安と期待とで大いに沸いた。

果たしてその期待感は、現実の前に脆くも崩れ去った。

ファーストコンタクトは散々たるものだった。相手は知的生命体であったが、あまりに価値観が違いすぎた。彼らは獰猛かつ身勝手な種族で、資源と娯楽を求め星々を渡り歩く略奪民族であり、地球及び地球人類など略奪対象としか見なさ

なかったのだ。

人類の存在を知った彼らは無差別に襲来し地球各地を荒らし回った。まさに野盗か暴徒さながらに。女を攫い弄ぶ事も多々あった。結果として地球は遠き星からの侵略者に脅かされる羽目となった。

彼ら異星人を、人類はマリグーノと命名。最優先の除去対象に認定した。

このマリグーノに対抗すべく設立されたのが地球連邦迎撃防衛軍、通称ＥＦＩＤＡである。各地で勃発するマリグーノと思しき凶行を調査、排除するのが主な任務とされる組織だ。そこには宇宙開拓事業の副産物であるナノマシンを始めとする最先端技術が惜しみなく投入されていた。

そのＥＦＩＤＡにおいて特に優れた戦士たちが集められた部署がある。彼らは特務騎士と呼ばれ、一般的なＥＦＩＤＡ軍人より優れた武装で身を固め、基本単独で任務に当たり各地を飛び回っていた。

クリス・エルディオン。軍歴3年。現在20歳。

その人物もまた特務騎士として任務に当たり、その日も報告にあったマリグーノと一戦交え、難なく撃破したところであった。

「？　――救援要請？」

単独での調査任務を終え一度帰還を考えたその時、同じＥＦＩＤＡ部隊からの信号を受信した。

「廃棄研究施設内にマリグーノ潜伏の疑いあり。当第七部隊が調査中ボート損傷にて帰還不能。至急救援を求む」

自身のボートにて詳細を閲覧し黙考後、すぐ行動に移る。

特務騎士は基本単独で任務に当たる。一般兵との共闘はほとんどない。

が、だからといって見過ごす理由にはならない。民間人は守り同僚は見捨てるなど愚かな話だ。

救援に向かう旨を本部に報告後、ボートを飛ばし座標地点へと向かう。ちなみにボートとは小型高速輸送艇の通称である。21世紀では夢物語だったスカイカーに当たる乗り物だった。

――特務騎士クリス・エルディオン、これより任務を開始する。戦闘兵装、装着、起動――。

到着後ボートを降り、軽く目を伏せ脳内にて指示を送る。

直後、青白い燐光が周囲を乱舞し始めた。無数の蛍が集うがごとくほっそりとした体躯に収束、瞬きの間にフォルムを形成し、全身を覆う白と赤の防御兵装へと変化する。

一旦脱いでいたパワードスーツが再び装備されその身を覆い尽くしていた。魔法や手品の類(たぐい)ではない、れっきとした科学技術による現象だ。周囲に常時滞留するナノ粒子に脳内チップにて信号を送り、身体強化機能を持つ特殊兵装として形成、装着される仕組みだ。変身ヒーローみたいだなどと軍部でもジョークが飛び交う代物であった。

――身体機能(コンディション)、兵装(アーマメント)とも問題無し。これより施設内部へと向かう。

目標地点は孤島に位置する打ち捨てられた地下研究施設だった。

データによると遺伝子研究設備があり、地下深くまで続いているらしい。

なるほど、連中が潜むには適している。自分が得た情報とも合致する。

当たりであれば良いが――期待と緊張半々に施設内へと侵入してみれば。

「誰だ!?　マリグーノでないなら名を言え！」

施設一階入り口に到着後、待機していた複数の人間が、こちらに気づいて一斉

に銃口を向けてきた。
　同様に銃器を構えたクリスは、かけられた声に既知を認め、思わず相手の名を口にしていた。
「っ――――ニザム？」
「その声――まさか、クリス？　みんな銃をおろせ、相手は仲間だ！」
　真っ先に接触した相手はＥＦＩＤＡ第七機動部隊の六名であった。救援要請の出所は彼らに間違いなかった。
「君が来てくれるとはな。すまない。報告を受け現地入りしたはいいが、マリグーノと接触しボートがやられた。おそらく内部にもいるだろうが現戦力での対処は困難と判断した」
　警戒を解きそう語ったのは隊長であるニザム・ロッドという男だった。
　堅物風な彫りのある顔立ちに落ち着きを宿す目、黒い戦闘服越しにも知れる鍛え上げられた長身。
　なんの因果か、彼とは面識があった。
「久しぶりだなクリス。変わり無いようで何よりだ」

「……そちらも。2年ぶりになるか」
差し出された手を、少しぎこちなくクリスは握り返す。
「君が来てくれるとはありがたい。これほど心強い援軍はないとも」
「隊長、誰なんです、この――男？　っていうか特務騎士が来るなんて？」
親しげにニザムが微笑む一方、面食らった様子の隊員の一人が訝しげに横から割り込んだ。バイザーをあげていたのでひと目で若い女だと分かった。
「紹介しよう。特務騎士のクラ――クリス・エルディオン。私の元同僚だ」
聞いた隊員らは皆一様に驚いた表情を浮かべた。
そう、クリスは以前ニザムと同じ部隊にいた。クリスは新人、ニザムは上官として。二人は知己の間柄であった。
共にあったのはおよそ一年間。その一年の間に彼から様々な事を教わった。軍人としての在り方や心構え、士官学校では教わらない現場での戦技、その他基礎を事細かに教わった、言わば師のごとき存在であった。
「……外にボートがある。あなた方は脱出を。後の調査は私が引き継ごう」
クリスが言うと、ニザムは首を横に振った。

「ありがたいが施設の調査がまだ終わっていない。報告では何か危険な物体が潜んでいるらしい。放置はできん。援軍到着後調査を続行する手はずだった」
「特務騎士は単独行動が基本だ」
「我が隊も任務を放棄はできん。せめてなんらかの情報を得るまでは」
ニザムは言って、小さく苦笑し肩に手を置いてきた。
「ハハ、相変わらず生真面目で愛想がないな。さて、私としては同行を要請したい。特務騎士が同行してくれれば我々としても大いに助かる」
「隊長、本気ですかぁ？　特務騎士と現場で組むとか」
「せめて美女なら大歓迎ですがネ、こんな取っつきにくそうな野郎なんザと」
「問題ない。信頼できる人物だと私が保証しよう」
隊員の不満げな反応にもニザムは動じる事がなかった。気難しそうな顔を緩め、久々に会う弟相手に向けるような表情を浮かべていた。
「活躍は聞いている。特務騎士きっての期待のホープ。お偉方の間でもその名は有名だそうだ。私も鼻が高い」
「っ……」

クリスは一瞬言葉に詰まったが、しばし黙考し、姿勢を正して首肯した。
「了解した。こちらも任務だ。あなた方と同行する」
「助かる。よし、全員準備にかかれ。3分後、深部に向けて行軍する」
厳格な指揮官の顔に戻り、ニザムはレーザー銃を握り直したのだった。

※

その後、二つほど階層を降りた辺りでマリグーノたちと遭遇戦に入った。
総数12。うち九体をクリスが、ほか隊員らが三体撃滅し、ひと息ついたところで先の会話となったのだった。
「やっぱマリグーノは厄介だなぁ、レーザー食らってすぐ死なねぇとかどういう身体してんだぁ、ったく」
隊員の一人、ベニー・トニーが軽口を叩いた。
「虫みてぇな顔して人間みたく歩いたりしやがって。おまけに賢い奴は擬態して人間そっくりに化けられるときた。紛れ込まれちゃバケモンかどうか見分けがつかねぇ」
ベニーの言う通り上位種は厄介だ。なまじ知能があるだけに姿を変えられれば

判別は困難だ。全軍でもって掃滅できないのはこれが一因でもあった。
「特務騎士さんには判別つくんだってナ？　ご自慢のスーツのおかげでサ」
冷ややかな笑みを向けて言うのはジャック・タナベという東洋系の男だ。
「エリートなんだから仕方ないだろう。俺たち平隊員とは扱いが違うんだろ」
肩を持つのか皮肉なのか分からない事を言うのはアントニオ・オベロという名のひと際大柄な隊員だ。
「くだらん私語は慎め」
「けど隊長、この人の事信頼しすぎじゃないですか？」
ニザムの言に食って掛かったのは第七部隊の紅一点、マリーン・グシアスという名の女性隊員だった。
「たった一人の援軍なんて心もとなくないですか？　別の隊呼んだほうがいいんじゃないですか？」
「我らは総がかりで三体。クリスは一人で九体を倒した。これで不服か？」
「それは……むぅ……」
「古巣でもクリスは有能だった。なるべくして特務騎士になった。この場でもっ

とも頼りになる存在だ」

他もそうだがマリーンは特に気に召さない様子である。自分より歳上に見えるが子供みたいな表情で睨んでくる。

（まるで嫉妬されているみたいだ。まさか……いや、まさかな）

ほんの小さなため息をつき、床に転がるマリグーノの死骸を調べる。スキャン結果がバイザーに映し出され、合致したとの情報を得る。

（やはり当たりか。この奥に奴が……）

決してその場の成り行きなどではない、こちらはこちらで目的はあった。第七部隊と同行を決めたのもこれが大きな理由である。独自調査し探し求めていた存在が今ここに潜んでいる——放置できないのは自分も同じだ。

（とはいえ嫌われたものだ。特務騎士がやっかみ対象であるのは事実だが）

仲間——そう呼ぶべきだろう——からの視線と態度は明確に歓迎とは真逆のものだ。装備と名声もさることながら、隊長であるニザムが全幅の信頼を寄せているのが気に入らないのだろう。

「気を悪くしないでくれ。末端など、どこの組織も似たようなものだ」

ニザムがそう言って気に掛けるのも面白くないに違いない。マリーンなどはあからさまに舌打ちをしている。

言われるまでもなく気にしても仕方ない。無言で小さく首を振り進軍を促すと、またも不満の声が聞こえた。

「不愛想な野郎だな。バイザーの奥でどんな顔してるんだかな」

「スカした優男に違いないゼ。スーツのおかげでガタイ良く見えるが中身は案外ヒョロヒョロかもヨ？」

「アッチのほうは実は貧弱なんじゃねえのぉ？　実はブ男だったりとかよぉ」

――そう言われるのも――そのように思われるのも慣れている。光感度調整のためバイザーは色濃く外から中は窺えないのだ。パワードスーツで大柄に見えるのも仕方のない話だ。実は中身はロボットじゃないのか、そんなジョークすら軍内部で飛び交うくらいだ。

構いはしない。部隊には部隊の結束というものがある。自分という異物を前に身構えてしまうのは当然だ。

「……行こう」

ひと言だけ告げて先頭に立ち、索敵を行いつつ、さらに深部へ。

階層を下り半ばほどまで来ると、観葉植物が生い茂ったレクリエーション施設と思しき広間と、電子ロックされた巨大な隔壁扉にぶつかった。

「ここからでは開けられないか。お前たちはここで待て、私がロックを解除してくる」

端にある整備区画用のドアへとニザムは歩き出した。途中こちらの肩を叩き「何かあったら部下たちを頼む」と告げて。それが気に入らないのか隊員たちはムッとした。

口から小さくフッ、と吐息し、軽く頷いてみせる。あれでニザムは技術畑出身だ、この程度のロックなど造作もなかろう。頼もしげな背中を見送り、かつての上官を待つ事しばし。

(!? センサーに反応？ 上!?)

直後の行動は咄嗟(とっさ)のものだった。気づかぬ仲間たちを強く突き飛ばし床を転がって右腕を構える。

仲間たちからの罵倒の声。それも襲撃者の姿を前に瞬時に掻き消えた。

「なんだこいつは!?　マリグーノじゃない、一体なんだ!?」

アントニオが銃口を向けた先、奇妙な物体が床に複数の穴を穿ち、ふよふよと宙に浮いていた。

（これは――クラゲか？）

初見の感想はそれだった。巨大な傘を広げたような半透明の白い物体が、長い触手を幾本も垂らし、海中を遊泳するかのごとく中空を漂っていたのだ。

無論クラゲなどではあり得ない。クラゲに浮遊能力などない。そもそも大きさからして小熊程度はある。

何より触手。あれが床に穴を作った。あの場に居たならば隊員らが串刺しになったのは明白だった。

「くそっ、なんなんだよこいつぁ！」

「よせ、迂闊に刺激するな！」

慌てて静止を試みたが、間に合わずベニーが銃口を向け引き金を絞った。

レーザー光が立て続けに走りクラゲもどきを瞬時に貫く。やった――と見えたのも束の間、穿たれた穴はぶくぶくと泡を立て見る間に塞がり、

「し、死なねぇ!?　冗談だろおい！」
「散開しろ！　いや――集結しろ、陣形を組め！　フォーメーションΔ（デルタ）だ、急げ！」
「何てめえが指示なんザ、うわぁ！」
「早く！　私は数を減らす、そちらは防衛に専念しろ！」
自らもトリガーを引き絞りながらクリスは隊員らを背後に庇った。一体だけかと思ったが違う、よく似た、否、同種の敵が上から複数舞い降りてくる。包囲し殲滅（せんめつ）しようにも、こちらが先に包囲されていた。
（スキャン結果――該当種無し。生体反応あり、熱源微弱、高度の再生能力ありと推定！）
このまま守勢に回ったとしても長くは持たないだろう。クリスは駆け出し迎撃に打って出た。一般的なレーザー銃では射殺不能なのは今しがた知れた。仲間たちが凌いでいる間に自分が活路を見出すほかない。
『どうした、何があったクリス!?』
『襲撃だ、アンノウン、数は11、通常射撃は効果見られず！』

『なんだと!?　今行く！』

『来るな、そちら側もすでに封鎖されている！』

ニザムからの通信に応じつつ出力最大でレーザーを放つ。

ヒット、しかし効果なし。連射モードに切り替え射撃、反応こそ軽微だが再生にやや手間取る様子。

覚悟を決め間合いを詰める。パワードスーツの身体強化を得て弾丸のごとく跳躍、連射で削り、モードをレーザーブレードに切り替えシャマダハルの要領で連続で切りつける。

（よし、まずは一！　再生力を上回れば――！）

細胞自体が強固なわけではないらしい、連続でダメージを負えばとりあえず死滅するのだろう。特に斬撃のような接触面の多い攻撃は有効と見えた。

（しかしこの戦術では殲滅に時間が、仲間たちにブレードはない――！）

たかが一体を仕留めるのに3分はかかってしまった。包囲網を掻い潜りながらの単独遊撃戦は辛い。護衛対象がいるならなおさらだ。

仲間たちは半ばパニックでこちらの動きについてこれていない。集結し陣形を

整えはしたが当てずっぽうでの射撃に等しい。敵は無感情とも見える動作でマリーンの暴れる銃に触れた。

「きゃあ!?　と、溶けるっ……!?」

酸性の体液でも出せるのか、触手が触れた傍から銃がぐずぐずと音を立てて融解していく。

（このままではみんなが……！　退路はない、援護も、これでは……！）

やっと二体目を倒したところで触手を避け後方へ跳躍する。こちらは無傷だがもう時間がない、せめて突破口を開かねば。

が、三体目を切り裂いた刹那、仲間たちの悲鳴が一つに重なった。

（武器が――無力化された――！）

ついに最後の銃が溶かされ仲間たち四人は抵抗する手段を失った。

『終わったな。ここまでだ、クリス・エルディオン！』

と、不意にどこかでスピーカーらしき機器が作動し、クラゲもどきらが一斉に動きを止めた。

『どうかね、私の傑作品は？　なかなかのものだろう？』

「その声――ジャグハバット！」

『そうとも。来ると思ったよクリス、君ならば私に追いついてくるに違いないだろうとね』

スピーカーの声の主は、クツクツと喉で笑声を作る。

「どこにいる、姿を見せろ！」

『それは無意味というものだ。見せたところで状況は変わらない』

切りつけるような鋭い声にも相手に動じた気配はない。勝ち誇って見下した表情が目に浮かぶようだった。

『投降したまえ。それ以外に彼らが助かる道はない』

クリスは言われてぐっと歯噛みした。

（……私一人ならば脱出くらいは……しかし、それは……）

仲間を置いて逃げようものなら彼らは確実に殺されるだろう。戦闘を継続しても結果は同じに違いない。

その上で敵は投降せよと言う。つまり、自分には用があるという意味だ。

「……彼らの命は保証されるのか？」

『もちろんだとも。君が大人しくしてくれるならね』
「……分かった」
クリスは右腕を下ろし得物を前腕から分離させ、床に放って転がした。
『賢明な判断だ。さすが特務騎士どの、覚悟がいい』
「お、お前、俺らのために……!?」
ベニーが心底驚いた様子で呟く。
「会ったばっかなのにそこまで……」
「あんただけならどうにかなるだろうに……」
「仲間を見捨てる事などしない。それが私の信条であり誇りだ」
クリスはきっぱりと言い、彼らに向けてバイザーの奥で微笑みかけた。
「約束は守ってもらうぞ、ジャグハバット。仲間たちには手を出さないと」
『ああ、今はね。もっとも、今後についてはお前次第という事になるが』
意味深な物言いに、悟られないよう覚悟を決める。
これから起こるのは拷問か、果たしてそれとも。
いずれにせよ逃げはしない。耐え抜いてみせる。仲間を見捨てる隊員は無能だ

――かつて古巣で上官に教わった言葉が、今になって耳に響くようだ。
（分かっている。最後まで見捨てない、必ず――）
次の瞬間、首に鋭い衝撃を覚え目の奥が暗転する。
白と赤の特務騎士は、その場にドサリと倒れ伏した。

※

――君は本当に寝相が悪いな、そんな事では――はできんぞ？
そんな台詞を投げかけられたのは、果たしていつの時分だったか。
夜間演習の時だったか。高熱で倒れ野宿した時かもしれない。あるいは宿舎で寝泊まりしていた時期か。
目覚めてまず最初に行ったのは苦笑いだった。久しぶりに恥ずかしい夢を見た。
その気はないと子供さながらに怒鳴り返したと記憶している。
（寝相を気にする必要はないか。寝返りを打てる状況じゃない）
身を起こすと身体の節々が少し痛んだ。パワードスーツを着たまま眠っていた弊害だ。気絶してから脱がずに今まで寝ていたらしい。
『ようやくお目覚めかね？　寝顔すら見られないこっちの身にもなってもらいた

いものだ』

どうやら施設の適当な一室に放り込まれていたらしい。雑用兼任のガードロボットが未だ稼働中らしく、人間は住まぬのに清掃は行き届いていた。

『相変わらず動じない男だ。実に腹立たしい……！　まあいい。目が覚めたなら早速こちらに来てもらおう』

軽く嘆息してからスピーカーの声に従い部屋を出る。鍵でもかかっているかと思ったが、必要な箇所のみ隔壁閉鎖しているらしい。

さもありなん。遺伝子研究施設ならば各ブロックの封鎖機能は必須だ。

道なりに進むと出たのはだだっ広い研究室と思しき部屋だった。一見するとドーム状の無機質で殺風景な空間だが、マシンアームや専用台座が各所に収納され、部屋そのものが被験体を待っていたかにも見えた。

「ようこそ。久しぶりだなクリス・エルディオン」

そこに生の肉声が響き、床の一部が円形に開き、下から椅子がせり上がって、一人の男が姿を見せた。

「こうして会うのは実に三度目か。なかなか因縁めいてきたものだ」

「迷惑だ。早く終わらせたいものだ」

バイザーの奥から敵意を込めて睨みつけてやると、相手の男は鼻白む表情を隠そうともしなかった。

（ジャグハバット……こんな形でまた会うとは……！）

再会を祝う風もなく、互いの視線が交錯し睨みあう。

ジャグハバット――その名はＥＦＩＤＡ内では知らぬ者がないほど有名だった。獰猛なマリグーノの中でも知性が抜きん出て高く狡猾（こうかつ）、数々の凶行に手を染めるばかりか知的財産にまで貪欲に手を出し、危険極まりない化学兵器やら薬物等を自ら開発し世に拡散させた者だ。

こうして見ると科学者風の人間の青年にしか見えないが、その正体は他と同じ甲虫類じみた外見の異星人だ。擬態し人間に成りすます事で非道を繰り返してきたのだ。

この男――牡らしいためそう呼んで構うまい――を追い自分は長い時間を費やしてきた。今回の調査もこの男絡みだ。直接の接触は過去に二度、間接的には数知れず。その都度逃げられ辛酸を舐めさせられてきたものだ。

「お前のおかげで何度煮え湯を飲まされた事か……いつか思い知らせてやろうと時が来るのを待っていたぞ」

もっともそれは相手とて同様で忌々しい事この上ないらしい。男の言う通り、今や因縁めいた間柄となっていた。

「さて。積もる恨みは山々だが……まずはそのスーツを脱いでもらおうか」

ジャグハバットは作り笑みを浮かべ、伊達眼鏡などをクイッとあげた。

「武装解除だ。まずは顔を見せろ。今さらだが、素顔すら知らないのでな」

「……」

クリスはしばしの間沈黙を保った。バイザーの奥から様々な意味を込め、因縁ある敵に視線を投げかける。

やがて小さく嘆息し、襟に手をやり接合を外すと、両手を頭部のヘルメットにかけ、

「……これで満足か？」

ヘルメットが外されると同時、金色（こんじき）に煌く豊かな長い髪が、ふわっと広がり背中に流れた。

ジャグハバットが思わずといった様子で目を見張る。
それをクリスは――彼女は、冷然とした眼差しで真っ直ぐに射貫く。
「男だと思っていたが、女だったとは……く、脆弱な牝体ごときにこの俺がしてやられてきたというのか……！」
「男だと名乗った覚えはない」
つまりはそういう事だった。
あらわとなったその素顔は、誰がどう見ても女性であった。それも美しい――地球人類の誰が見ようともはっとするほどの美女である。やや目尻の吊り上がった、クールな美貌がそこにはあった。
アイスブルーの形良い瞳には凛とした意思の光が。小さく結ばれた淡い唇には悪意に立ち向かう正義感が。抜けるような白い肌には溢れんばかりの若さと活力が。それぞれ垣間見え、そしてそれが、なおのこと美しい。文字通り兜を脱いだ美貌の女騎士という風貌であった。
「よく勘違いされるが、気にはしていない。私は女である前に特務騎士だ。女扱いなど無用だ」

自らの信念を誇示するがごとく、背中まである豊かな金髪をさっとかき上げて見据える美女。

その鋭い眼光に射抜かれたジャグハバットは、しばし睨み返していたものの、不意に陰湿な薄笑いを浮かべた。

「ククッ、ククク……そうか。あれもなかなかに人が悪い……ククッ」

「……何？」

「ならば決まりだ。お前の処遇はな」

「その前に彼らはどうした。仲間の安全確認が先だ」

「おいおい、俺に要求できる立場か？」

言われてクリスは両目をきゅっと細く絞った。真一文字に結んだ唇の奥、歯と歯がギッと音を立てる。期待するだけ無駄とはいえ、意に沿わぬ返答である事に違いはない。

ジャグハバットが指を鳴らすと、室内にある隔壁扉が軋んだ音を立てて開いた。

「まずは紹介しておこう。お前らを倒してみせた私の最高傑作、トリビュートだ！」

（っ、こいつはあの時の……！）

扉の奥から白い物体がふよふよと浮遊しながら進み出て来た。先に接触した半透明のクラゲもどきだった。

（だが違う、あの個体じゃない。あれよりひと回りは大きい）

あちらもさして小型ではなかったが、こちらの個体は本体の長さだけでも成人女性に匹敵するサイズだ。触手を含めればゆうに４メートルはあるだろう。

よく見ると中央には赤く光る瞳らしきものもある。それが二つ。露出はしておらず本体内に埋まっており、半透明の皮膚を通じて外界を視認できるのだろうか。

見れば見るほどに異様な生命体。端的に言って化け物と呼ぶに相応しい。

「素晴らしい能力だったろう？　私が苦心して創りあげた、まったく新種の生命体だ。様々な種族の体組織を融合させ、進化させ、調整し、やっとの思いで生み出した代物だ」

攻撃に備え身構えるクリスに、ジャグハバットが自慢げに熱く語りだす。

「驚異的な再生能力。あらゆる金属を溶かす体液。重力を中和し浮遊する能力。さらには圧倒的な環境適応能力。破壊するのが容易（よう い）でない事はお前自身が証明し

てくれた」

特務騎士ですら三体倒すのがやっとだったのだ。ジャグハバットはそう自賛し、続けた。

「そしてこいつはマザー。先ほどの連中の生みの親だよ。正確にはあれらはクローンだが……ともあれこいつはトリビュート唯一の成体、言わば親であり核であり絶対的支配者。他の連中はファミリアと名付けたよ」

（つまり、子供相手にあれだけ苦戦したというわけか。マザーの強さはそれ以上と見るべきか……）

注意深く観察するクリスは、少しでも情報を得ようとジャグハバットの前口上に耳を傾け続ける。

「そこで、だ。お前にはこいつの相手をしてもらいたい。戦闘ではなく、生殖行動の相手を、なぁ」

「……何？　生殖、だと？」

情報収集に努めていたクリスは、思いがけない単語につい目を見張っていた。

こちらの驚きを察したのだろう、ジャグハバットの口に笑みが浮かぶ。

「生憎こいつはまだ生まれたばかりでね。未だ繁殖はおろか分裂すら知らん。ファミリアも俺が逐一細胞を採取し培養してやらねば生み出せん。成体と言ったが、実はファミリアもあれで成体なのだ。成体でやっとあのサイズだ。クローニングではあれが限界なのだ」

暗にまだ不十分だとジャグハバットは語っていた。納得のいくレベルに達していないとも。

「そこでお前には生殖行動の相手をしてもらう。つまりは教育だ。どのように牝体を犯し繁殖を行うのか、それを教えてやってもらいたい。文字通り手取り足取りでなぁ、ククッ」

「っ……下劣な！」

正気の沙汰ではないとクリスは思った。こんなクラゲもどきが人間の女を犯す？　馬鹿馬鹿しい、犬が猫の子を産めるのか。イカがタコと交配するのか。不可能だ、一端の研究者が口にする論ではない。そもそも見た限り生殖器らしきものなど存在しないではないか。

「不可能だと思っているな？　生憎とそうでもない。なぜならこいつの体組織に

は人間の牡の細胞もふんだんに使われているのだからなぁ」
「っっ……人間を殺してマテリアルにしたのか、外道め！」
「加えて男性ホルモンを注入してある。まだ未発達できちんとした生殖器はないが、必要性を理解すればいずれ生えてくるだろう。なにせこいつは自己再生能力だけでなく驚異的な学習能力及び自己進化能力をも備えているのだからなぁ」
ジャグハバットはますます己に酔った調子で、加えてこう付け足した。
「犯すだけならば今すぐだろうとできる。自慢の触手でな。しかしそれでは真に女を知る事にはならんだろう？　なあ？」
「断る！　貴様の道楽に付き合ってやる気はない！」
拷問されるかと思っていたが、よもや化け物とセックスしろと命じられるとは。やはりこの男は狂人だ、今すぐにでも射殺しておきたい。
同時に密かな狼狽もある。まさか自分にこのような形で女である事を強要される日が来ようとは。
（この私が、女として相手を？　女として扱われる事など滅多にないというのにか）

多くの者がそうだったように、クリスは概ね男と勘違いされてきた。１７５センチという高身長、パワードスーツ装着時の外見、欠ける愛想に女性にしては低めの声、それらが重なって女だと知る者は案外少ない。

そんな自分が女を教えてやれだなどと、仮に人間の男相手でも困惑するに違いなかった。

（男と……交わった事さえない。女らしくない自覚もある。その私が？　それも、気色悪い化け物相手に？）

冷徹な表情を崩さぬまま、内では様々な感情が飛び交う。呆れ、戸惑い、困惑、そして羞恥、様々な心の流動が。

無論そこには嫌悪も含まれる。人外の異形を相手にするなど一人の人間として断固受け入れ難く、想像するだに鳥肌が立ちそうだ。

「まだ立場が分かっていないのか。ならばこれを見ろ」

ジャグハバットがまた指を鳴らすと、今度は別の隔壁が開き、

（っ!?　あれはマリーン、なんて事を――！）

現れた手狭な隣室、強化ガラス越しに映る内部を見て、クリスは表情を変えた。

ボロボロに破れ肌の露出した黒い戦闘服。無数の触手に局部を抉られる女体。怯えきって泣き喚く素顔。

仲間の一人がトリビュートどもに、よってたかって辱められていた。

「言ったろう、ただ犯すだけならば可能だと。男性ホルモンを活性化させれば性器がなくとも女を犯す。射精とて起こる。勢い余って牝を壊すので控えていたところなんだがなぁ、ククッ」

『助けて、いやぁ、触手が、触手がぁ！』

「分かった！　……従う。相手を、する……！」

クリスは咄嗟に承諾し、強い憤りにぐっと奥歯を噛んだ。

「だからマリーンを、彼女を離せ。今すぐに！」

「さすが特務騎士、決断が速い。いいだろう、あの女は助けてやる」

いけしゃあしゃあとした態度が虫唾が走るほど憎らしい。初めから拒否権など与える気はなく、こちらが要求を飲む以外にない状況に仕立てていたのは明白だった。

「……言っておくが女らしさを求められても無駄だ。分かっているだろう」

「それは困るな。トリビュートには女という生き物をつぶさに知ってもらいたい。女として振る舞わんのならあの女にやってもらうが？」

「く……」

おそらく報復の意味もあるのだろう、敵はこちらの退路を悉く絶ってくる。

「ククッ、屈辱にまみれたその顔、実に快い。では残りのスーツを脱いでもらおうか」

ジャグハバットが顎でしゃくってくる。すでに勝った気でいる態度だ。

不本意だがやむを得ない。クリスはひとつ深呼吸をし、目を閉じて無言の解除を命じた。

――シュワァ……ッ。

ナノ粒子で形成されていた白と赤のパワードスーツが、瞬く間に分解し、光の粒へと戻り、視認領域からも外れ、文字通り虚空へと消え去った。

「ほぉう……これはこれは、なかなかどうしていい身体つきじゃあないか」

異星人でさえ賞賛を口にするクリスの本体が明らかとなっていた。

最初に目に付くのは輝くほどの明るいスカイブルー。それが彼女の全身を覆い、

首から上を除くすべてを余さず包みこんでいる。機動性確保のため生地は極薄で、一分の隙もなくぴたりと肌にフィットしている。グローブとブーツもセットとなっており、ともすれば全身タイツかレオタード衣装にも見えた。

そして体型、これが意外にもすらりとした細身だった。パワードスーツ姿からは想像もできないほどスリムであり、これで男だと思いこむ者は皆無であろう姿だった。

加えて肉付き、こちらも実に見事で女性らしい。胸と臀部には柔らかな脂肪がしっかりとついており、スリムでありながら目を見張るほどにグラマラスな体型でもあった。

「これほどの肉体を隠していたとは。ククッ、大したものだ、顔といい身体といい向こうの女よりずっと上だ」

ジャグハバットは喉の奥で笑いながら、悠然と歩み来て胸の膨らみをむんずと両手で掴んできた。

「っっ！　……貴様に褒められて喜ぶとでも思うのか？」

「ふん、生意気な態度もいつまで続くか見物だな」

五指は限界まで開いていたが、それでも掴みきれぬほどに二つの房は大きかった。軽く見積もっても子供の頭ほどはある。指の股からはもっちりとした柔肉が溢れ、並々ならぬバストサイズが期せずしてアピールされていた。

男はなおも指を動かし、衣装ごと乱暴にぐいぐいと捏ね回してくる。

（っ、この程度……問題ない。少し気色悪いだけだ）

クリスは微かに眉根を寄せつつ表情を努めて動かさない。心はどうであろうと肉体への感覚はさほどでもない。

「ふふん、防護機能はないらしいな。簡易的なスーツ兼インナーといったところか。乳首は浮き出ていないようだ、内側にニプレスでもあるのかな」

掻き回すようにして量感と柔らかさを確かめる両手、その人差し指が先端部分をぐりぐりと爪先で無遠慮に引っかく。

「実に大きい、G、いやHはあるな。下着は無いか、柔らかいぞ、ククッ」

「っ……」

反射的に身震いしかけるのをどうにか自制し直立し続ける。たかだか胸を触られるだけ。こんな程度で動じるものか。雑に乳房を刺激されながらクリスはこと

さら無言を維持する。

「ふん、生意気だな。その不敵な態度が毎度毎度気に入らん……！　が、これでもまだ続くかな？」

ジャグハバットは一瞬憎悪の表情を見せたが、すぐにニヤリと笑みを作り、

「さあやれマザー！　この高慢ちきな女をその手で捕らえ嬲（なぶ）るがいい！」

「っ、ぁ……!?」

――しゅるっ、しゅるしゅるしゅるしゅるっ！

浮遊していたクラゲもどきが、本体と同じ半透明の触手を瞬時に伸ばし絡みつけてきた。

（なんだ、この縛り方はっ……まるで、くぅ……む、胸を、強調するかのように……？）

単なる拘束や絞殺のためのものとは違う。十字架にでも張り付ける風に両手両足を縛りあげ伸ばし、宙吊りにしたところで胴部にも別の触手を伸ばす。その触手は腹を無視して胸部に絡み、ちょうど上下から挟みこむ形で豊かな膨らみを根元から締め上げた。

（なんのつもりだ、む、胸を引き千切ろうとでも？　いや――これは――）

攻撃をまず疑ったのだがそんな素振りはなぜかない。むしろ掴んで撫で繰り回しているかに見えた。ちょうどジャグハバットが先ほどやっていた風に。

「っ、ぁ……ふ、んっ……!?」

「さすがだマザー、俺の仕草をちゃんと見て真似ている。この学習能力の高さこそ最高傑作たる所以だ！」

哄笑するジャグハバットを信じられない思いで睨みやる。あの程度で何かを学ぶなど普通ではない。混在する牡の遺伝子になんらかの衝動を呼び覚まされたとでも言うのだろうか。

「いいぞマザー、次はこうだ。乳房を隅々まで揉んで刺激を与えろ」

「っ、ぅぅ……ん、んっ……」

「女の乳房は性感帯の一つだ。こうやって刺激してやるだけでそのうち生殖本能が湧いてくる。多少強めでも構わん、乱暴なくらいしつこく揉んで羞恥と興奮で身体を熱くしてやれ」

こちらが動けぬのをいい事にジャグハバットは調子付いてくる。両手の指をわ

きわきと蠢かせわし掴みにしてこねくり回し、指先をぐいっと鋭く立てて引っ張る形で手前に擦ってくる。

クリスは「んっ」と小さく呻き眉根を寄せて睫毛を震わすも、きゅっと唇を真一文字にしてこみ上げる感情を押し隠した。

「ふふん、まだ耐えるか。しかし頬が赤らんできているぞ。ああそうか、男だと思われてきたから男を知らんのか。こいつは傑作だ、栄えある特務騎士どのが男の一人も知らんとはなぁ」

ずばり言い当てられアイスブルーの瞳が揺れる。不愛想で男勝り、女だと見られる機会すら少ない、そんな彼女が男を知っているはずがなかった。

（だからこそ感じたりするわけが――けれど、ううっ……なんだ、気色悪いはずが、は、肌が……）

男の指もさることながら、透けて見える白い触手は率直に言って気味が悪い。感触はまさに軟体生物で、弾力があり微妙にぬめっている。巨大なタコが身体に張り付き皮膚をまさぐってくるかのような心境だ。

しかし胸を締め上げる力は強すぎず弱すぎず絶妙の塩梅だ。ぐいぐいと根元を

搾りあげながら柔らかな肉を前へと押し出す。その柔肉を受け止める風にして両手がむにむにと揉みしだいてくると、こみ上げる羞恥の中にも、なんとも言えない感覚が生まれてきた。

（恥ずかしい、からか？　体温があがってきて……く、しつこい、こうも執拗に弄ばれると……）

クリスは度々睨みつけたが男は笑みを濃くするだけだった。かえって気分が乗った様子で掴んだ胸肉を上下に揺さぶる。

「解れてきたな、いい具合に柔らかさが増してくるぞ。さて、そろそろ先端も刺激してやりたいが、それにはこいつが邪魔だな」

男の指が襟元に伸び、ファスナーのスライダーを摘む。

そのまま下にさげていくと、自動吸着型ファスナーが開かれ、胸の前がゆっくりと左右に分かれていく。

（む、胸を――この男、わざと時間をかけて……！）

クリスは思わず白い頬に朱を上乗せした。いっそ手早く脱がせば良いものを時間をかけてじわじわと開くのは、明らかに屈辱を与えるためだ。恥じらう様を見

物しようという魂胆だろう。
それが分かったとて彼女になす術はない。白い肌が見え、深い谷間が顔を出し、ことさらゆっくりと露出されるのを黙って見ているより他はなく、
「っ、く……ぅぅ……！」
「ククッ、さぁて、お披露目だ！」
――ぐいっ！　ぱわっ、ぷるるっ！
最後の瞬間だけ勢いを込め、スライダーが腹までさげられた。インナーの前が左右に別れ、胸元が盛大に開かれる。
「ほほぉう、生で見るとなおさら大きく見事な乳房だ。これまで数々の地球人の女を犯したが、これだけデカいのは初めてかもしれんぞ」
（み、見られて……下劣な異星人ごときに、胸を……っ）
勢い良く露出させられたため乳房は派手に上下に揺れ出た。白人種らしい肌理の細かく白い肌。しっかりと発達した量感たっぷりの椀型の膨らみ。先端は淡くほのかに紅色で、メロンほどものサイズにもかかわらず透明感と垂れる事のない造形美が際立つ。

その見るも豊満で美しい乳房を間近でじっくり観察されると、さしものクリスにも羞恥の気配が現れ始めた。

「見るな、貴様にとっては珍しくもあるまいっ……！」

「いいや珍しいとも。いかにも男好きする乳房だというのに男を未だ知らんとはな。見せるのも初めてか、ん？　特務騎士どのぉ？」

「黙れ、んく……はぁ、ぅ……！」

（口車に乗ってしまった、これは罠だ、私に声を出させるための……！）

慌てて口を噤もうとしたが一歩遅くか弱い声が出てしまっていた。こういう時は最後まで黙して通すべきものを。

しかしどうあれ相手の言葉は確かに心に楔を打っていた。初めて異性に素肌を見られたという認識が、押し留めた羞恥心を徐々に心の亀裂から溢れさせてくる。

「おや、乳首が少し勃起してきたかな？　さては興奮してきたな？」

「っ、誰が――貴様などに――！」

「ほぉう、それにしては摘みやすそうな乳首だ。そぅら、こうも簡単になぁ」

――くぃいっ、きゅっ！

「ぁっ!?　んく、うぅ……！」
「どうした、引っ張っただけで声が出たぞ？　なんともないのではなかったのかなぁ？」
（この……っ！）
両の乳首をくいくい引っ張られクリスは屈辱と羞恥に歯噛みした。一度出してしまったからか、妙な声は噛み殺そうとも漏れてくる。敵を楽しませるだけだというのにだ。どうにか平静を保ちたいが思うように自制が利かない。
「ククッ、そうだ、もっと声をあげろ。感じる声をだ。分かるかマザーよ、これが女の、牝の生殖時の声だ。これを聞くのも牡体の愉悦なのだ」
ジャグハバットは乳首をきゅうっと手前に引っ張り、ぱっと離して乳肉をぷるぷると小刻みに躍らせた。
艶かしい波紋を刻む己の豊かな胸を見て、クリスの頬がまた一段と色味を増す。
「いい揺れっぷりだ、実に柔らかい。――さあマザーよ、お前もやってみろ。最初の前戯だ！」
――きゅるっ！　きゅいきゅいきゅいっ！

突然の事にクリスは「あっ!?」と声をあげ身震いした。胸元に巻き付いた白い触手が乳房そのものにも螺旋状に巻き付いたのだ。

それだけではない。筆先のごとく細い先端が乳首にも巻き付き前方に向けて引っ張ってくる。

（この触手、指と違う……体液でぬめって妙な感じがっ……！）

直接皮膚で感じ取ると異様な肌触りに鳥肌が立った。本能的な悪寒が走り反射的に身が竦む。ぬるりと触手が這いずった瞬間ついつい腰が小さく動く。

「離せ、胸、乳房からこれを――あっ!?　また引っ張って、よせ、あぁ……！」

触手はなおも乳首を引っ張り螺旋を描いてぐるぐると蠢きだす。たわわな膨らみが前に引き延ばされ白い円錐の球体となり、その先端の淡いポッチを触手の先がくりくりと撫で擦りだす。

クリスは無意識に上体を捻り刺激から逃れようとした。しかし無理だ。触手は器用に位置を調節し、宙に磔の女の肉体を覚えたての方法でまさぐっていく。

（纏わりつくように乳房の肌をっ……まるで舌だ、舌で舐められているみたいに……気持ちが悪い、ぬるぬるしてくすぐったい、くぅ、なんだか、へ、変な気分

にっ……！）

目の前の本体は変わらず無機質で感情というものが窺えない。だからこそなおのこと不気味でならない。いっそ感情が見えたらと思う。

そして、それが余計に恐怖というものを心に押しつけてくる。この化け物は一体なんなのか。何を思って女を嬲るのか。こんな異形に自分は犯されるというのか。非現実的であるがゆえにこそ精神は着実に畏縮し始める。

「そうだ、いいぞマザー、先端を刺激してやりながら強く搾って揉んでやれ。こんな風にな」

「んうっ、くはァ……!?」

ジャグハバットが触手の上から乳房を強引に握り締めた。

すでに円錐となっていたものが乱雑に五指でかき乱され、こねくり回され、柔らかな肉が歪な形にむにゅりむにゅりと絶え間なく変形する。

「む、胸、歪ん、で……はぁ、くぅ、離、せ……っ！」

「どうした、汗ばんでいるぞ？　見ろマザー、これが感じる牝の姿だ。体温が上昇し呼吸が荒くなっているのが分かるだろう？　生殖衝動に肌が色づき牡を受け

入れる準備をしているのだ」

ジャグハバットが囁いてみせると、トリビュート、いやマザーの瞳が鈍く赤い光を灯した。あたかも共に発情し目を血走らせたかのように。

次の瞬間、乳房に絡む二本の触手が各々左右に強く引っ張った。

「あっああッ――い、痛――千切れッ――くはぁァ……！」

「クハハいいザマだ、デカい乳がますます伸びて大きく見えるぞ！」

見事な爆乳が左右に引き延ばされ先端はきゅうっと細く尖らされる。深い谷間が観音開きとなり微かな痛みに柔肉が震えた。朱に色づいた肌からは汗が垂れ、床にポタリと雫を落とす。

クリスは小ぶりな唇を開き、熱っぽい吐息をふぅふぅと漏らす。

「どうだ、そろそろ感じてきた頃か？　いくら処女だろうと自分でする事くらいはあるだろう？　濡れてきたか？　身体の芯が疼いてきたか？」

「っ、ハァ、ハァ……いいや……」

額にうっすらと汗珠を浮かせ、クリスは垂れた前髪の奥から、潤んだ瞳で睨みつけてやった。

「少し、痛むだけだ……貴様らなどが相手では、な……」
「まだ減らず口を……！　ふん、本当かどうか確かめてやろう」
本質的に短気なマリグーノは再び激昂しかけたものの、流れは自分にあると見たか傲慢な笑みを作り直した。
途中で止まっていたスライダーを摘み、ファスナーを下へと降ろしていく。
「こちらを見てみれば分かる。ククッ、どうなっているか楽しみだ」
「っ、くぅ、ぅぅ……！」
腹から下までをもファスナーが下げられ白い下腹部が見えてくる。微かに汗ばむむき出しの肌が室内灯の光を浴び白く輝く。
ジャグハバットは今回もギリギリでスライダーを止めニヤリとした。最大の恥部を見られる屈辱をあえて助長し焦らしてくる。
「ククッ、簡単に見てしまっては面白くないな。こういうのはじっくり楽しむものだからなぁ」
「く……陰湿な奴め、やるなら、早く……っあ……!?」
と、不意に指の動きが止まり、すんでのところでファスナーを開くのをやめた。

一瞬戸惑うクリスを他所に、指はすっと狙いを変更して、
「あッ!?　あッあ、くぅ、触る、なぁ……ッ！」
「どれどれ――チッ、本当に濡れていないか。顔だけでなく身体の反応も鈍いのかクソが」
指はスーツの内側に押し入り中で直接粘膜に触れてきた。探り当て左右に開き、その内側をずりりと引っかく。
「こんなところまで我慢強いとはな。気に食わん、大人しく濡れておけばいいものを」
「っ……女の身体が、そう容易く濡れると、思うな……！」
男の言うように膣口はさして湿り気を帯びてはいなかった。胸をちょっと触った程度で女が濡れるなど幻想だ。実際膣奥は熱を持ったが蜜液が垂れるには至っていなかった。
それが面白くなかったのか、ジャグハバットは見る間に不快げな表情と化していく。
が、「そうか」と言って歯を見せて笑うと、彼は突っこんだままの指を、無遠

慮に動かし始めた。

「うっく、はぁァ、何をっ……!?」

「ならば直接刺激してやろうではないか。楽に終わると思うな、濡れておけば良かったと後悔させてやる」

男の身体が急激な変化を起こした。優男風だった肉体が膨張し、裂ける寸前まで白衣が突っ張り、肌は赤銅色に変色し、頭部は甲虫類じみたものとなる。マリグーノとしての本来の姿が現れたのだ。

その異星人は鋭い爪で、女のクリトリスをぎゅうっと摘む。

「ぎッあ!?　ぐぐっ、痛ッ～～くあ、あああ……！」

「どうだ、満足に濡れないまま急所を責められる気分は？　痛かろう。だがまだ終わらんぞ。解れきっていない肉を無理やりこじ開けほじくってやる」

――ズブッ、メリ――くちゅりっ！

「っあぁあ!?　あぐっ、やめろ――爪当たって、ぐ、ぐうう……！」

（本当にほじくって……ち、膣粘膜が、硬い指などに、抉られっ……す、擦れて、痛いっ……！）

クリスはあくまで耐えようとしたが思いのほか酷な作業だった。マリグーノの肌は無骨で粗く、繊細な粘膜には刺激が強すぎる。爪も長く鋭利だ。およそ愛撫には向いておらず苦痛が先に次々と襲い掛かってくる。

無論、快感など無く苦行を味わっているにすぎない。これで濡れろと言うほうが無理な話だ。が、

「ん？　なんだ、奥のほうはしっかり濡れているじゃあないか。強がりおって、本当に苛つかせてくれる！」

「んぐぅ――ぬ、濡れてなどいないッ――勘違い――っあぁ！」

（だめ、クリトリスが、痺れるッ――痛い、じんじんして――どうにかなりそう……！）

爪で急所を摘みながら中指が奥をずぼずぼと抉ってくる。中指の爪で奥を引っかき強引に蜜を掻き出してくる。浅い箇所にまで蜜が漏れ出し、次第にちゅくちゅくと音が出始める。

クリス自身は不本意極まるが、肉体の芯は確かに熱を溜め膣奥に潤いを持たせていた。官能以上に恐怖と羞恥とで心が昂ったせいかもしれなかった。

（馬鹿な、こんな程度で濡れるなどっ……自制しなければ、これでは奴の思う壺だ……！）

身勝手な暴虐に耐え抜かんと、ぎゅっと目を閉じ歯を食いしばるクリス。

そんな彼女に襲い掛かったのは、立てた中指でのピストンという名の刺激だった。

「うぐあッあうぅあッ!?　くふぅ、ふぅぅ、ハァ、ハァ、ハァハァ……！」

「ククッどうしたぁ、段々と余裕が無くなっているぞ？　息が上がって汗も多い。俺にはイキそうに見えるんだがなぁ？」

「ハァ誰が、この――程度――などッ――うぅ、くふぅッ！」

「食いしばって耐えても無駄だ、この反応、膣肉の締まり、感じていないなどとは言えまい！」

「違う、ハァハァ貴様の勝手な妄想だッ……！」

十字に縛られた肢体を震わせクリスはなおも言い返す。感じるわけがない、痛みしかない、そう己を叱咤しながら敵意で自尊心を繋ぎ留め続ける。

そうとも、これは苦痛による反応だ、早く終わらせて欲しいだけ。クリスは内

心そう罵(ののし)りつつ不本意な熱感にわななき続ける。ちゅくちゅくと音立つヒクつく粘膜、乱れる吐息、熱を帯び痺れゆく下腹部神経、それらと全力で戦い抗う。

それでも本人の意に反して肉体は反応を示していった。膣内で指が暴れるたびに四肢が強ばり腰はうねり、乳房までもが刺激に耐えかねぷるぷると柔らかに揺れて惑い、徐々に首振りが大きくなるにつれ長い金髪が舞うように波を打ち、そして、

「うッぐううッ――あ、あッ、ふううう……ッッ！」

――ビクッ、ビクッ、ビクッ、ビクッ……！

やがてくぐもった呻き声と共に、しなやかな背筋が小刻みに痙攣(けいれん)した。

「ククククッ、イったか？　さしものお前でも中はそれなりの感度だったか」

痙攣を続ける特務騎士に、ジャグハバットが生臭い息を吹きかけ嘲笑う。

「奥から蜜が溢れてきているぞ。おかげで指がぐしょ濡れになったがな」

「ハァ、ハァ、ハァ――誰が、イった、んだ……？」

クリスは肩で息をしながらも視線を鋭くして睨み返した。せめてもの意地で、薄く嘲笑すら返してやる。

「私の事なら、残念だったな、勘違いだ……苦痛ではあったが、この程度、では、な……」

「おのれ、どこまでも減らず口を！」

ジャグハバットは目に見えて憤り、白い両眼を鋭く険しくした。

「いいだろう、ならば――マザーよ！」

瞬間、白い化け物が即座に呼応し、両脚を搦め捕る触手が動いた。

ぎゅるりと太腿を這い上がって、男の手を追い、開かれたスーツの股部に潜り込む。

「な、何を、よせっ、あ、あああッ!?」

クリスも即座に反応し身震いした。触手は二本同時に入りこみ、太腿の付け根に巻き付く形で陰部をずりずりと這いずってきたのだ。

（ぬるぬるしたものがアソコをっ――こすっている、凄い勢いで……！）

まるで二匹の蛇だと感じた。それも熱くぬめった蛇だ。それが中央で交錯しながら陰部の上を這いずっている。濡れた入り口を擦過している。

予想だにせぬ刺激にクリスは反射的に身を捩ったが、刺激はそれだけに留まら

ない。むき出しの爆乳に巻き付く触手もぐにぐにと揉みしだく動きをしたのだ。

「こんなっ、こんな方法教えられたはずは、ふあッ、くふぅ……！」

「さすがだ、自らの肉体を鑑(かんが)みてアレンジしたか。ファミリアどもは単純に真似するだけだったが、こいつは違う、自分で考え工夫できる！」

興奮しきったジャグハバットの声も今のクリスの耳には遠かった。ナメクジじみた触手のぬめりは気色悪いが痛みを伴わず、無理やり熱くされた粘膜に得も言われぬ感覚を与え続ける。

（腰が、股の奥がゾクゾクする、ぬるぬる擦れ合うと痺れッ、か――感じて、しま……ッ!?）

なまじ気色悪いだけに覚える感覚はなおさら強い。嫌悪しようとそうでなかろうと意識はひたすらそこに向く。熱く疼いた膣粘膜は、蜜汁以外の新たなぬめりに興奮と共に官能をも得てしまう。

（ジャグハバットより、遥かに丁寧で、しつこいっ……繰り返し擦られると、腰から、力がぁ……ッ！）

太腿を閉じるべく力もうとしたが、それすらも満足にできない。舐めるがごと

き交錯と摩擦にクリトリスさえもが入念に刺激され、甘い痺れを覚えてしまい破廉恥にもぷるぷるとわななく。

しかもそこにさらなる変化が来た。新たな触手が先端を伸ばしファスナーを器用に下げたのだ。

触手が両脚を左右に引っ張り、限界まで下げたファスナーの奥をも披露する形で大きく開く。

「クハハハ、このほうが都合が良いと学んだか！　ククッ、いい見世物だ、下の口が丸見えではないか！」

ジャグハバットが奇声すらあげながら甲虫じみた頭部で覗きこむ。

「ほぉ、こちらもなかなかどうして。形の整った綺麗なマンコだ、毛の処理もしっかり行き届いている。さすがは特務騎士どのだ、クハハ！」

「み、見るな、見ないでッ……！」

条件反射的に口から漏れたのは、か弱げな女らしい台詞だった。声も普段のアルトではなくソプラノに近かった。

実際クリスの膣孔はくすみのない美しいものだった。ローズピンクの淡い裂け

目に透明な蜜がしっとりと浮き、小さく口開く極薄の粘膜は見目麗しい天然の二枚貝を彷彿とさせた。

「ククッ、いい声だ、さしものお前でもマンコ丸出しは恥ずかしいか」

ジャグハバットは口角を上げむき出しの歯をガチガチと鳴らした。羞恥心をあえて煽るべく鋭い爪先で割れ目を開き、蜜汁で濡れ光る初々しい粘膜をこれ見よがしに外気に触れさせる。

そして触手の一本を掴み、小ぶりな孔にぐりぐりと押しつけた。

「あッあぁあああ⁉」

「ここだマザー、この孔の奥をたっぷり刺激してやれ！　貫いても構わん、小生意気な牝を嬲り倒してやれ！」

「やめろ、やめてッ、そん――ひいい⁉」

触手はすぐにも反応を示し、膣孔の奥へぬるりと潜り込んできた。

（貫かれる、私ッ、初めて、を……⁉）

女としての、処女としての本能的危機感が、おののく心身を一層怯え竦ませる。

ほんの一瞬自制を忘れ、頬をあからさまに引きつらせるクリス。

だが予想に反して苦痛は来なかった。触手の先端から、さらに細長い触手が生えてきて、それが膣内に潜り込み、くちゅくちゅとかき混ぜ始めたのだ。

「ひッ、ほ、細い触手が、中でッ――吸いつく、ひィ……!?」

「おっと、言い忘れたが、こいつは体組織の9割が水分でな、水が大好物なのだ。本能的に水分を吸おうとしているらしい」

その水分とは、つまり蜜汁の事だろう。それを求めて奥へ奥へと徐々に突き進んでくるのだ。それも小指ほどの太さの触手で、処女膜に傷がつかぬように。

この、世にも奇怪な感触に、しかしクリスの豊満な肢体は官能を覚えてクナクナとその身を捩らせてしまった。

「ハァ、ハァ、よせ、中で擦れっ……ひィ、入ってくる、なぁ……！」

（細いものが中でうねうね動いている、信じられない、どうして、感じるッ……奥が疼いて、痺れて、腰が、動いてしまッ……！）

どうにかして逃れたいが、苦痛を伴うこれまでの刺激が感覚を疲弊させ力が入らない。力んでそのままこらえようにも感度が上がってそれすら出来ない。奥で小さく粘膜をまさぐりちゅるちゅると蜜汁を吸われるごとに、四肢から不覚にも

力が抜けていき怖気すらもが霞み始める。

化け物相手に屈するわけには――そう己を叱咤した矢先、新たな触手が群れ成して襲い来た。同じく細長い触手を伸ばし、複数まとめて膣孔に入ってくる。

「よせ、そんなに入らなッ――ひいィ!?　ひ、開い、てぇッ……!?」

触手群は侵入と同時に膣孔をぱっくりと開口させてきた。先端を小さなフックに見立て、外縁に引っ掛け八方に向けて開くかのごとく。

おかげで奥まで丸見えとなり怪物と怨敵の視姦を許した。強烈な羞恥に喉が震え、粘膜がひくひくと勝手に収縮する。

「こいつはいい、子宮の入り口まで丸見えだ！　ククッいいザマだ、無様としか言いようがないぞ！」

「ハァハァ見るなっ、お、犯すなら、犯せっ……私は貴様などに、辱めなどに屈しない……！」

「ふん、だそうだ。マザーよ、お前の望むようにしてやれ」

すでに余裕など皆無と見たかジャグハバットに笑みを消す素振りはない。

片やマザーは変わらず無機質で感情らしきものはやはり見えない。活発に動く

のは触手のみで本体はふよふよと宙に浮かんでいるばかり。

それでも何かしらの衝動はあるのか狙いを膣に定めて責めてくる。細長い先端を執拗にうねらせ濡れた粘膜をぬるぬるとまさぐり、滾々（こんこん）と湧き出る熱い体液をクラゲさながらに吸収していく。ヒダ肉を緩く引っかく行為は刺激を与える意図に他ならず、丹念に膣肉をこすられるたびに女体は感度を上げ身震いと共に吐息を弾ませる。

「ハァハァ、ハァハァ、く、なぜ……こんなァ……！」

（感じてしまう、ヒダヒダが擦れて、痺れて、もうッ……わ、私、耐えられ、ないィ……!?）

己自身が信じられぬ心地で霞む瞳を天井へと向ける。いっそ貫かれたほうが苦痛もあってマシだったやもしれない。破瓜（はか）を避け、ただ刺激を与えられるよりは。官能のみを生み出されるよりは。先の乱暴な行いのほうが忍耐が容易であったのは間違いない。

それでも女として、否、人間としてのプライドが、異形相手の絶頂だけはと忌避し回避せんともがく。

高潔なる死を覚悟する
麗しき姫騎士
その至高の肉体が
五〇を超える
悪漢に陵辱される!!
騎士団長姫騎士
Lオーク
小説／上田ながの
NOVEL
挿絵／FCT
ILLUSTRATION

「見つけましたよ。フンボルト……貴方もここまでです」
クオン王国アピア街道外れに位置するシメリアの森の中に、凛とした声が響き渡った。
「なんだぁ、てめぇ」
それを受けた森を根城とする盗賊団の一人が訝(いぶか)しげな表情を浮かべる。
「レイン＝ファル＝アスターゼです」
声の主である女騎士――レインが静かに名乗る。
「レイン？　まさか……姫騎士レインか!!」
その名乗りを受けた盗賊団メンバーの一人が目を見開いた。
「どうやら私のことは知っているようですね。でしたら話は早い。貴方達は最早ここまでです」
腰まで届くロングストレートの金髪をなびかせながら、レインは口元に不敵な笑みを浮かべた。
「まさかクオン王国の姫君自身がわざわざ出向いてくるとは。私も随分大物になったものだな」

レインの名乗りに盗賊団の中にいた一人のローブ姿の男がククククッと笑った。男の名はフンボルト――王都にて五〇名の女性を魔術儀式の生贄として陵辱、殺害し、現在指名手配を受けている男である。レインの目的は単なる盗賊団の壊滅ではない。この男の逮捕にあった。

「そういうこと。フンボルト……貴方はここまでです」

言葉と共にスッとレインは右手を挙げた。

その合図に合わせるように、レインが率いるクオン王国薔薇(ばら)騎士団の面々も姿を現す。その数レインを含めて一〇名。レインが手ずから集めた精鋭部隊である。剣を抜き、殺気立った視線を騎士団のみなが盗賊達へと向けた。その目に盗賊達は明らかに怯んだ様子を見せる。盗賊達の数は一〇〇をくだらないだろう。けれど、僅(わず)か一〇名の騎士団を前に、彼らは間違いなく恐怖を覚えていた。だが、その中の一人、フンボルトだけは笑みを崩さない。

「皆さん、怯む必要はありません。私がいる限り貴方達が敗北することはあり得ない。勝利は約束されています。私達は必ず勝つ。勝って……姫君の身体に教えてあげるんです。我々に逆らうことの愚かしさをね」

言葉と共にフンボルトは舐め回す様な視線をレインへと向けてきた。

レインは魔法剣士だ。己の魔力を身体能力に変換することで、並の男を遥かに超えるほどの力を発揮することができる。ただ、魔力伝導率を上げる為、鎧はどちらかというと薄い。ヘソは剥き出しであり、腰回りはスカートだ。防御という面ではかなり薄いといえるだろう。当然盗賊達の目は露わになっている太股に向く。視姦するような視線が不快だ。

「そうだな。先生がいれば負けるはずなんかねぇ。勝てば……この身体を」

「ああ……たまらねぇなぁ」

盗賊達が下卑(げび)た笑いを漏らす。

「姫様を穢(けが)れた目で……」

そうした敵の態度に騎士団の一人――副官であるゴルドがギリッと奥歯を噛んだ。いや、ゴルドだけじゃない。騎士団全員が殺気を迸(ほとばし)らせる。騎士団のメンバーは全員男だ。それ故というわけではないが、レインに対する敬愛の念は強い。姫に対する侮辱を彼らは絶対に許しはしないのだ。

そんな部下達に対しレインは静かに「怒る必要などありません」と告げた。

「私達は負けない。粛々と任務を果たすだけです。現実というものをヤツラにたっぷり教えてあげましょう。構いません。逆らうのならば斬り捨てなさい」

命令を下す。

それを受けた騎士団の面々は、空気が揺れるほどの声で「おおおおお！」と吠えた。

「さぁ、行きますよっ!!」

同時にレインは走り出す。剣を構えると、自ら率先して盗賊団へと突撃を開始した。

「犯す！　絶対犯してやる!!」

盗賊達も剣を抜く。一斉にレインに向かって突進してきた。

「はぁあああああ！」

そんな敵に対して剣を振るう。神速の剣を！

ヒュンッという風斬り音と共に、レインは三人の男を同時に斬った。血煙が噴き上がる。倒れ伏す盗賊達。命が消えた。だが、レインは気にしない。すぐさま次の男達に斬りかかる。

さあ十萌(ともえ)きらら！
魔法少女マジカル☆キララに変身だァメ！
待望のコミカライズ始動ですっ☆
もう魔法少女なんて二度とやらないって言ったのに！
誕生日を迎えた8月17日
私は魔法少女になってしまったのでした
きらら☆キララ THE COMIC
KIRARA★KIRARA
1話 NTR 魔法少女は変わっていく…
漫画 COMIC／雨宮(あまみや)ミズキ
原作 ORIGINAL／さかき傘(かさ)
キャラクター原案 CHARACTER／希望(のぞみ)つばめ

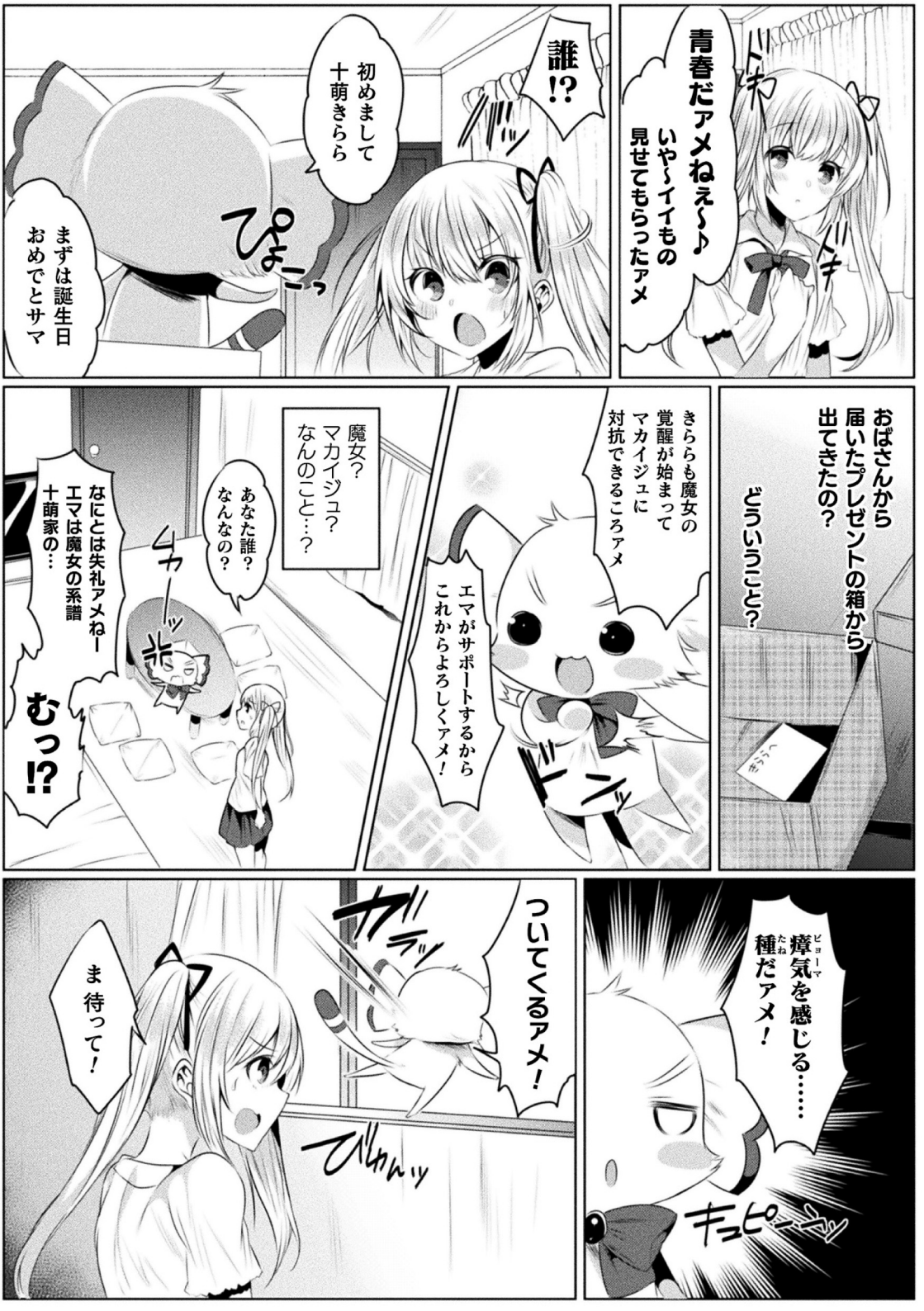
8月10日
起きろタダシっ！
やっと起きた
遅刻するよ！
登校日！
目覚ましかけとけって
言ったじゃない！
まだ夏休み…
悪いきらら…
チャイムが鳴るまで
あと15分しか
ないんだから！
にゃーもーっ！
タダシが起きるの
遅いからっ
きららだって
8時前の占い
見たがるだろ!?
コイツは
幼なじみのタダシ
ふぁ～…
なによ マダムマリの
占いは当たるんだから！
はいはい
私とタダシは
同じ学園に通っていて
いつもこうやって
一緒に登校しているの
十萌きらら
国鳥タダシ

たったったっ…
間に合ったー！
ぜーぜー
はー…
もう…
十萌さん
遅刻しなかったのは偉いですけど…
宿題はちゃんとやってきましたか？
ブッ
筑井かよ子
み宮代くん
おはよう！
十萌さん！
終わっていない宿題は
居残りでやって
もらいますからね
はよ…
宮代俊哉
今日は午前中だけ…
居残りに
なっちゃったけど
集中！！
は…
早く終わらせて
遊びたいなぁ

キーン
コーン
おーいきらら～
カーン
トン
あっ
ライちゃん
キラッ
一緒に帰ろうぜ
うん！
小浜ライカ
あっミィさーん
きららちゃん
ライちゃん
平坂ミサト
あれ 十萌も
帰るとこ？
キャッ
あ……
えっと
佐山アキラ

一緒に帰らない？
俺と平坂
いまから遊びに
行くんだけど
えっ
佐山くん
かっこいいけど
女好きで
節操ないん
だよね…
い 行かないよ
ミィさんと
約束してたんでしょ？
いいじゃん
お前らも仲いいし
みんなで…
キュッ
キュッ
!!
きゃっ
すいませーん
シュート
それちゃいました
タダシ…！
きらら 宿題
終わったんだったら
一緒に帰ろうぜ
えぁ
うん！
ひゃー
ひゃー
キュッ
邪魔しやがって…
チッ

8月17日
きららちゃん
お誕生日おめでとう！
パーッ
わーい♡
えへへ ありがとう
今日は私の
お誕生日！
私の家で友達と
お誕生日会を
開いたのだけれど…
ワイ
ワイ
タダシ 私に
プレゼント
くれなかったけど
どういうこと？
…。
去年アンタの
誕生日には
ケーキとシューズ
あげたのに！
ゴン
ゴッ
そろそろリボン
変えるころだろ？
しゅるっ
!!
じゃあ
俺も帰るから
ちょっ


青春だァメねぇ～♪
いや～イイもの
見せてもらったァメ
誰!?
初めまして
十萌きらら
ぴょこっ
まずは誕生日
おめでとサマ
おばさんから
届いたプレゼントの箱から
出てきたの？
どういうこと？
きららも魔女の
覚醒が始まって
マカイジュに
対抗できるころァメ
エマがサポートするから
これからよろしくァメ！
魔女？
マカイジュ？
なんのこと…？
あなた誰？
なんなの？
なにとは失礼アメねー
エマは魔女の系譜
十萌家の…
むっ!?
瘴気（ビョーマ）を感じる……
種（たね）だァメ！
キュピーン
ついてくるァメ！
ま待って！

はっ
はっ
はっ
なんで学校に…？
ここァメ！
はー
ふぉ
ふぉ
はっ
いや……あっ！宮代くン……っ
ミィさんの声…？
なにがイヤ～だ
ピラッ
さっきからヒクヒクしてるじゃないか
そうだぜ平坂
それに宮代くん…アキラくんの声も…？
三人なにをして…？
はっ♡
はっ♡
たぷんっ
お前みたいにデカイおっぱいしてると感じてるのがすぐ分かるんだ
あっ♡
はっ♡
♡
ビクッ
ずぽっ
ビクッ
ずぽっ
…!?
覗きはよくないわよ十萌さん
!!
ガラッ

先生だけど…
クス…
いつもの先生の雰囲気とちがう…！
十萌さん丁度いいところに
さあこっちへいらっしゃい
ハァ…
ハァ…
逃げるアメ！
ううん！
みんながおかしくなったのは「魔界樹の種」というものの仕業だアメ
あの先生はそれでおかしくなって種の出す瘴気で他の子もおかしくなってるんだアメ
ダダダダッ
バキッ
バキッ
あわわわ!!
逃がさないわよ…!!
じゃあミイさんも!?
どうすればいいの!?
種をやっつければみんな元に戻るアメ！
たっ
たっ
たっ

さあ
十萌きらら
ビシッ
魔法少女
マジカル☆キララに
変身だアメ！
きららの魔力を触媒に
エマが変身魔法を
使うアメ！
ポンッ
迷ってる暇はないアメ！
なんでもいいから呪文を
唱えるアメ！
ふんぬ――
――ッッッ!!
ズゴッ
わぁあ…
ほんとに
変身できちゃった
キャー♡
くるん
くるん
ええぇ呪文が
「ふんぬーッ」!?
先が思い
やられるアメ…

感動している暇はないアメ！
コイツらは眷属！
コイツらを戻すには種をしとめるしかないアメ！
とりあえず一発殴って気絶させるアメ！
家庭科室
はーい
あれ？逃げるアメ？殴らないアメ？
叩くのが嫌なの！しようがないじゃん！
ミィさん！助けに来たよ！
キララ！そいつから離れるアメ！
え…!?
今は校内にいる者全員が眷属になってるアメ！
早くエマを拾うアメ！エマはこの姿じゃ動けないアメー！
あらそう？いいことを聞いたわ
やめるアメー!!

怖がらないで
十萌さん
私はただ
可愛い生徒達に
私みたく後悔して
ほしくないだけなの
ひゃぁああ
私には夫がいる
だがセックスレスとなり
もう一年以上は
夜の営みがなかった
夫婦仲は円満なものの
性欲を満たされない
私は徐々にストレスが
溜まっていった
そこでマカイジュの種が
私に宿ったの
マカイジュの種は
寄生した人間の願いを
吸い叶えようとする
私に宿った種の力で
俊哉 アキラを発情させ
性欲を満たした
アキラの要望により
ガールフレンドのミサトも
仲間に入れることとなった
身持ちの固いミサトも
また私と同じように
性欲を溜めていたことを
私は見抜いていた

フフフ
十萌さんも仲間に
入れようと思っていたのよ
さあ佐山くん
宮代くん
十萌さんと仲良く
してあげましょうね
はーい
やあっ!?
平坂みたいに
デカくはないけど
柔らけー♡
きゃあ!!
へー可愛いパンツ
穿いてるじゃん
みんな
正気に戻って!
ここんなエッチな
ことなんて
好きな人同士で
することだよ!
佐山くんは
ミィさんのことが
好きなんでしょ!?

平坂なんてキープだよ
俺が狙ってたのはずっと十萌だけだよ
はあ!?なに言って…
!?
ふぁファーストキスだったのに…!
へへ最高だよ十萌ずっとお前とキスしたかったんだ
おい宮代お前はキスNGな
独占欲の強い奴まいいよ僕はこっちをもらうから
!!なんでお尻触るの!?
やめっ!!
うわすげー熱いよこれならちょっとほぐせばイケるようになるな
なんだよ宮代最初は尻でイかせるのか?

あっ
フフフ
思ったより
感じやすいのね
十萌さん
せ 先生…やめて…
宮代くんを止めて…
はぁはぁあっ♡
おっイイ声
出すじゃん
私はなにも
貴方が憎いわけ
じゃないの
むしろ
大好きなくらい
なんだから
舐め回したい
くらいにね…♡
せ 先生っ
そこっおしっこ
出るとこ…！やっ

小説 NOVEL／蒼井村正（あおいむらまさ）
挿絵 ILLUSTRATION／星名めいと（ほしな）

「くうぅぅ……もう、もうやめてくれ、死んじまう！」

「あららぁ？　さっきまでの威勢はどうしたの？　もう、腰を突き上げる余力もないのかしらぁ？　それで、よく性奴隷が務まったものね？」

むせかえりそうな淫臭に満たされた寝室内に、消え入りそうな男の声と、艶（あで）やかで高飛車な女の声が響く。

女の声の主は、赤い髪を長く伸ばした美少女だった。

きめ細かな肌の色は抜けるように白く、全体的には細く引き締まった体型なのに、胸と尻は過剰なまでのボリュームを誇示して張り出し、筋肉質に引き締まった男の胴をまたいで躍動している太腿も、むっちりと肉感的だ。

身にまとっているのは、黒い艶のある素材でできた、ゴシック風の衣装で、膝上までである編み上げブーツと、二の腕まで程の丈のロンググローブを着用しているが、そのコスチュームのいたるところに、粘り気の強い白濁液がドロリとこびりついていて、彼女が行ってきた淫宴を物語っている。

「ンフフフッ♪　おチンポがビクビク震えてきたわ。もうすぐイクのね？」

目を細めて含み笑い交じりに告げる少女は、床に仰向けに寝転がった男の下腹

に騎乗位でまたがり、艶(なまめ)かしい腰使いで尻をくねらせている。

「ダメ……だ、これ以上イッたら、本当に死んでしまう。お願いだから、やめ…

…おおおぉぉうぅぅッ!!」

弱音を吐いた男は、熱く潤んだ膣肉に扱(しご)き立てられているペニスの快感に呻(うめ)き、仰け反る。

「あはぁんッ！　そうよぉ、死ぬほど気持ちいいんでしょぉ？　命と引き換えにしてもいいって思える快感を与えてあげるわぁ♪」

甘い響きの声を上げた少女は、硬く強張(こわば)ったペニスを秘裂の奥までズッポリと咥え込み、自ら腰を振って快楽を貪る。

ぬちゅっ、くちゅっ、じゅぷるっ、ぐちゅぐちゅくちゅくちゅるっ……。

プリッと丸く張り詰めた、若々しい美尻が円を描くようにくねり、小刻みに上下に跳ねるたびに、卑猥な蜜鳴りの音が兵舎内に響き、膣奥から掻き出された精液が、ムワッ！　と熱い湿り気を含んだ淫臭を立ち昇らせた。

アグレッシブな尻降りに連動するかのように、生乾きの精液にぬめ光る豊かな胸がプルプルと揺れ弾み、尻から伸びた、黒い尻尾が宙でくねる。

その背中で時折、広がり、軽く羽ばたくように動いているのは、コウモリの皮翼に似た構造をした、二枚の翼だ。

そして、赤い髪の間からは、S字型にカーブした二本の黒い角が伸びていた。

そう。彼女は人間ではなく、人の精気と快楽波動を糧とする女淫魔、サキュバスなのだ。

彼女の名はヴェレーナ、高位のサキュバスだ。

「久しぶりにステキな時間を過ごせたわ♪　性奴隷というだけあって、精力が強い男たちがいっぱいいたから……」

騎乗位で組み敷いた男の胸板を撫でまわし、ピンッ！　と尖った乳首をもてあそびながら、女淫魔、ヴェレーナは艶然（えんぜん）と微笑む。

己の能力に絶大な自信を持っている彼女は、騎士団や軍の駐屯地、王侯貴族の屋敷など、警備が厳重な場所をあえて狙って暗躍し、数百人以上の男たちの精気を吸い尽くしてきたのだ。

国家の根幹を脅かすような、その大胆不敵で神出鬼没な行動から、ヴェレーナは、『傾国（けいこく）の女淫魔』の異名で恐れられている。

「も……、もう、やめて……くれ……。もう、出……ない……」

床に寝た男が、蚊の鳴くような声で哀願する。

大柄で筋肉質な体格の男性だったが、その頬はゲッソリと痩せこけ、半開きの目は落ちくぼんで焦点を失い、宙を見つめている。

人外の快楽と引き換えに、大量の精気を吸われ、明らかな死相が浮き出た顔だった。

「ダメよぉ！　アナタの立派なおチンポ、まだガチガチに硬いじゃないの？　もっと頑張って、命果てるまで、私の中に精を放ちなさい……。他の性奴隷さんたちのように、ね？」

肉感的な尻をなおも激しく振りたくって、膣内に捕らえたペニスを貪りながら、女淫魔は邪淫の笑みを浮かべて周囲を見回す。

濃厚な精臭に満たされた室内には、年齢も体格も肌の色も様々な、十人余りの男たちの姿があった。

ある者はベッドや床の上で、またある者は豪華なつくりのソファーに腰かけてグッタリとうなだれたまま、ピクリとも動かない。

全員が、人外の快楽に狂わされ、数限りない絶頂と引き換えに、すべての精気を吸い尽くされて絶命しているのだ。

ここは、さる大貴族の奥方が、密かに性奴隷たちを囲っていた屋敷。

濃厚な精気を嗅ぎつけたヴェレーナは、夜の闇に紛れて屋敷を急襲し、絶倫でテクニシャンな性奴隷たちを相手に淫らな宴に興じていた。

「アナタは一番立派なオチンポを持っていたから、メインディッシュにとっておいたのよ。だから、もっと頑張りなさい。ほらぁ、蕩けそうに気持ちいいでしょお？　もっと気持ちよくしてあげるわ♪」

色香の濃縮液のような甘く潤んだ声を上げ、女淫魔ヴェレーナは、犠牲者の勃起に、とどめのグラインドを仕掛ける。

ぬちゅっ、じゅぷじゅぷじゅぷぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅるっ！

卑猥な蜜鳴りの音を立てて丸く張り詰めた艶尻を振りたくり、淫魔のヴァギナに秘められた人外の快楽器官をフルに駆使して獲物の勃起を搾り抜く。

「精液袋も搾って、ザーメン作るお手伝いしてあげるわ……フフフッ♪」

後ろ手に回した手で男の陰嚢を掴み、二個の肉玉を内包した急所を、絶妙の力

加減でこね回す。

「クウゥゥ！　ンウゥゥゥゥ～!?」

痛悦入り混じった快感に襲われて呻く男の陰嚢を揉みしだき、会陰部の性感帯を指の腹で押し揉んで刺激すると、膣内の巨根はビクンビクンと苦しげに脈打ちながら、快楽の波動を搾り出された。

「人間相手では絶対に味わえない快感と引き換えに、いっぱいドクドク出しながら逝きなさい♪」

女淫魔は、膣道をうねらせて勃起全体を締め付けながら吸い上げ、今にもはち切れそうな亀頭に押し上げられている膣天井に、細やかに粒立った粘膜襞を形成して、ジョリジョリと摩擦音が聞こえてきそうな勢いで擦り嬲る。

「クホォォォォウゥゥゥゥ～ッ!?」

淫魔のヴァギナの魔性の蠢きに屈した男は、最後の絶頂を迎えて裸身を仰け反らせた。

ヴェレーナの膣奥までズッポリと咥え込まれたペニスが限界まで強張り、そして……。

びくびくびくびくんっ！　びゅずるるるるっ！　びゅくびゅくびゅくびゅぶるるるっ！　びゅるびゅるびゅるどびゅるるるる～ッ!?

ビクビクと、まさに断末魔の痙攣を続ける勃起の先端から、命の最後の一滴まで溶かし込まれた濃厚ザーメンが吐き出され、女淫魔の膣奥を熱く満たす。

「んはぁぁぁぁ～……イッ、いいわぁ……熱い命のお汁が、私の子宮に流れ込んでるぅ～♪　もっとぉ！　もっと出しなさいッ！」

歓喜の声を上げ、淫蕩そうな美貌を蕩けさせたヴェレーナは、下腹の筋肉を、キュッ、キュンッ！　と引き絞り、肉感的なヒップを小刻みに揺すって、射精中のペニスにさらなる快感を送り込む。

「ぐ……はぁぁぁぁ～!?」

最後の吐息とともに、びゅるるるっ！　とひときわ濃厚な精液を膣奥に吐き出し、男は沈黙した。

「あぁ……アナタが最後に放った精気、すごく濃くって美味しかったわよ」

歓喜と苦悶の混じった表情を浮かべたまま息絶えた男の上から、気だるげに尻を浮かせて離れた女淫魔は、フフッ、と満足げな含み笑いを漏らす。

「久しぶりに、いい食事ができたわ」
死の静寂に支配された屋敷を、優雅な足取りで出たヴェレーナは、背中の翼をはためかせ、漆黒の夜空に向かって飛翔した。
（満足はしたけれど、もうちょっと楽しみたいわね。そう、デザート代わりの精気を……）
深紅の髪を夜風になびかせ、黒い尻尾を優雅に揺らめかせて飛翔しながら、貪欲な高位サキュバスは思う。
「たしか、この少し先に、少し大きな町があったはず……。久しぶりに、女を知らない美少年でも可愛がってみようかしら？」
淫蕩な笑みを浮かべた高位サキュバスは速度を上げ、夜空を飛翔してゆく。
「あら、火が燃えてる？」
町の上空に近づいたヴェレーナは、町はずれの荒野に、オレンジ色の炎の揺らめきを見つけた。
「こんな真夜中に、何の儀式をしているのかしら？」
興味を持った女淫魔は、上空から様子をうかがう。

雑なつくりの石積みに囲まれたその場所は、罪人の処刑や、疫病で死んだ者の大規模火葬など、街中で行うのがはばかられる行為や儀式が行われる場所である。

火の粉を巻き上げて燃え盛る炎の前に一人座して、何やら祈祷（きとう）しているらしい人の姿がある以外には、ほかに人影もない。

耳を澄ませると、夜風に乗って、長く尾を引くような節回しで朗々と吟（ぎん）じる男の声がかすかに聞こえてきた。

（聞いたことのない言葉だわ……。異国の言語かしら？）

さらに興味を深めた女淫魔は、祈祷中の男の様子を観察する。

身にまとっているのは、フード付きのロングコートのようなもので、顔立ちや年齢はわからない。

（異国の、僧侶？　あの祈祷も、異国の儀式かしらね？）

用心深く気配を探ってみるが、魔力の反応は感じられず、男の身体からは殺気も放たれていなかった。

「ちょうどいいわ、デザート代わりに、少し味わいの違う精気が欲しかったの」

淫らな期待に含み笑いを漏らしつつ、ヴェレーナは男に向かってゆっくりと降

下してゆく。

戒律によって禁欲している僧侶や聖職者は、魔性の快感を与えられた時の反応が、実に彼女好みなのだ。

罪悪感と肉欲の板挟みに悶える彼らが発する精気と波動は、デザートとしてはもってこいの美味であった。

（さあて、どうやって仕留めてやろうかしら？）

高位サキュバスであるヴェレーナが男どもを篭絡するために使う技は、二種類。背中の翼の付け根にある分泌腺から放たれる『幻惑の魔香』と、相手と目を合わせて使用する、『魅了の魔眼』。

魔香を嗅がせて抵抗の意思を奪い、淫靡な夢の世界に引き込んでから、魔眼で操って、思うがままに淫らな宴に饗するのが、彼女のお決まりの戦術だ。

（魔香を使うには、この場所は開けすぎているし、少し風もあるわね。いいわ、直接目を見て、魔眼で操ってあげる……フフフッ♪）

女淫魔は、獲物に定めた男の背後にゆっくりと降下してゆく。

「夜遅いのに、精が出るわね？」

妖艶な響きを帯びた声をかけると、祈祷を止めた男は、ゆっくりと立ち上がり、彼女のほうを振り向いた。

（今よッ！　邪眼で虜にしてやるわ！）

勝利を確信したヴェレーナの目が、鮮やかな赤光を放つ。

しかし……。

こちらを振り向いた男の目は、文字とも文様ともわからぬ複雑な記号を描き込んだ、包帯のようなもので分厚く覆われていた。

「目を塞いでいる!?　クウウッ!?」

魔眼が通用しないと悟った女淫魔は、素早く後退しつつ背中の皮翼を羽ばたかせ、最高濃度の魔香を放つ。

（この濃度の魔香なら、少しぐらい風で吹き散らされても問題ないわ。一呼吸すれば、夢の世界に落ちる……）

勝利を確信するヴェレーナ。

高位のサキュバスである彼女は、狙った獲物を仕留め損ねたことは一度もない。

それが、彼女の誇りであったが……。

「喝～～～ッ!?」

空気がビリビリと震えるような大音声（だいおんじょう）で男が気合を放った。

轟ッ!?

声とともに発生した、目に見えぬ爆風のようなものが、男に迫っていた魔香を霧散させ、女淫魔の肉感的な身体も吹き飛ばす。

「キャアァァァ～ッ!?」

高位のサキュバスにあるまじき悲鳴を上げたヴェレーナは、何度も地を跳ね、土煙を上げて転がり、広場の境界である石積みに激突してようやく止まる。

「くうぅぅッ！　この私を地に這（は）わせたこと、万死に値するわよッ!?」

プライドの高い女淫魔は、怒りに震える声を上げながら起き上がろうとするが、手足に力が入らない。

「なっ……なぜ……魔力は発していなかったはずなのに……あうぅぅッ！」

立ち上がろうとして失敗したヴェレーナは、前のめりに突っ伏してしまう。

色白な頬をざらついた砂が擦り、豊かなバストが、固い地面に押し付けられてムギュリとひしゃげた。

「う……くうぅぅ～ッ!?」

全身が燃え上がりそうな怒りと恥辱に呻きつつ、なおも立ち上がろうとするが、身体は思うように動かず、無様に突き上げられた尻から伸びた黒い尾が、死にかけた蛇のように力なくくねるばかりだ。

「三日三晩かけて、体内で練り上げた、破魔の気を放った。あれを受けて滅せぬとは、かなり高位の魔物だな。もしや、お主が悪名高い、傾国の女淫魔か？」

男は、読経していた時と変わらぬ低く重い声で問いかけてくる。

「そうだ、と言ったら、どうするつもりなのかしら？」

異国の僧侶を睨みあげながら、挑発的な口調で質問を返すヴェレーナ。

「可能であれば、生け捕りにせよ、と、この町の依頼主には言われておる」

「生け捕りなんて悠長なことを言っていいのかしら？　きっと、後悔することになるわよ？」

矜持（きょうじ）の塊のような高位のサキュバスは、男を挑発する。

「私は、退魔士ではあるが、無益な殺生はせぬ主義なのでな……。どんな悪辣（あくらつ）な魔物であっても、調伏、改心の余地を与えることにしておる」

地に這ったまま動けぬ女淫魔に向かって歩み寄りながら、男が懐から取り出したのは、金属製の棒であった。

緩やかに反り、先端部に亀頭冠を張り出させた形状は、勃起した男根を模しており、その表面には、男の目を覆っている布と同じような、文字とも記号ともつかぬ文様が刻印されている。

太さはさほどでもないが、長さは女淫魔の子宮の奥まで余裕で届きそうだ。

「そんな粗末な張型で、いったい、何をするつもりなのかしら⁉」

かすかな不安を感じつつも、高飛車な女淫魔はなおも強がる。

「世の東西を問わず、女淫魔の力の源は子宮。なればこそ、破魔の慈具(じぐ)にて、魔封じの刻印を子宮に焼き込む！」

男の宣言に、ヴェレーナの美貌がひきつった。

「なッ⁉　やっ、やめなさいッ！　指一本でも触れたら、殺してやるッ！」

歯をむき出し、自由にならぬ身体を悶えさせて威嚇する女淫魔であったが、視界を封じた男は、彼女の剣幕にたじろぐ様子もなく歩み寄ってくる。

「殺す、か？　それができるならば、もう、とっくに私の命はないはず。……虚

勢だな」

「さっ、触るなって言ってるのよ！　あぁぁんッ!?」

殺気立って叫ぶヴェレーナの足首を掴んで開脚を強要した異国の僧侶は、目が見えているかのような的確な動きで、金属製のペニスを女淫魔の秘裂にあてがい、無造作に突き挿れた。

じゅぷっ！　ずぷぷぷぷッ!?

「んぁぁぁんッ!?」

冷たい金属棒が膣口をこじ開けて、深々と挿入されてくる屈辱的な感触に、女淫魔は悩ましげな声を上げて身を強張らせる。

淫魔にとっては捕食器官にあたる膣道をゴリゴリと擦りながら蹂躙した金属ペニスは、やがて、子宮口をこじ開け、その奥までズムンッ！　と突き当たる。

「あふうぅぅんッ!?」

目を大きく見開き、歯を食いしばりながら仰け反るヴェレーナの下腹が、奥の奥まで到達した金属ペニスに胎内側から突き上げられ、ポコッ！　と盛り上がる。

「子宮まで届いたか？　ならば……封印術式、ハッ!?」

晃ッ!?

淫魔の膣に挿入された金属棒がまばゆい光を放った。

真昼の陽光のように白々としたその光は、ヴェレーナの肉体越しにも透けて見えるほどに強烈であった。

ジュウウウウウ～ッ!?

光とともに、強烈な熱波が発生し、金属棒に刻印されていた封魔の記号が、女淫魔の子宮に焼き込まれる。

「ヒギャアアアアアア～ッ!?」

膣奥を灼熱の光で炙り焼かれた高位サキュバスの絶叫が、オレンジ色のかがり火に照らされた荒野に響き渡った。

「封印術式の刻印、完了……」

女淫魔の膣奥からズルリと引きずり出された金属棒に、ビシッ！　と音を立てて無数の亀裂が走り、砂のように崩れ去った。

「たった一度の使用で、破魔の慈具も崩壊してしまうか。まさに規格外の高位淫魔よな。捕らえることができたのは、お主の慢心故。我にとっては僥倖よな？」

その戦乙女。鋼よりも尚、鉄の如く。
凛々しき戦乙女が自身を慕う部下の前で恥辱に晒される！
小説 NOVEL／懺悔（ざんげ）
挿絵 ILLUSTRATION／あらと安里（あさと）

『宵ヨリ幽々タル、森ノ国』

その名が示す通り、昼間であろうと陽の光を一切遮断する深い木々に囲まれている。

この国の大半はそんな森林に覆われていた。

申し訳程度に舗装された道は苔が生い茂っており、その上を馬車が列を成している。

「巨人が住んでるって話もあながちお伽話じゃなさそうだな」

俺と一緒に輸送部隊の後衛を務めるダイゴが、天を覆い隠す大木の群れを見上げながら言った。

彼は俺の後輩でまだ二十歳にも満たない。しかしその大柄で精悍（せいかん）な容貌に見合う腕力と剣技を買われると、若くして正規隊員に抜擢された。

粗暴で品性に欠ける節もあるが、どのような危険が襲い来るかもわからぬこのような道中でその気性は心強い。

「なぁ、ユーリ。うちの隊長ってどう思う？」

俺のほうが幾つか年上だが、彼が俺に敬語を使ったのは入隊の挨拶の時だけだ。

そんな事に腹を立てたりはしないが、先輩として注意はする。
「どうとは？　剣の腕、品性共に尊敬に値する。最高の上官だ。それ以外に言い表しようもないだろう」
「女でもか？」
「関係無い」
「へぇ。俺はどうかと思うけどな。大体目の毒だろ。帝都の高級娼館でもあんな上玉中々見かけないぜ。動きやすさを優先してるんだろうが、到底筋肉なんてついてなさそうなムチムチした太ももを見せびらかしやがって。装備に隠れているがあの胸だって相当なもんだ。お宝だよお宝。軍規違反で咎められても、一度水浴びしてるところを覗いてみたいねぇ」
「ダイゴ。お前は礼節を重んじたほうが良い。折角優れた剣の腕を持ってしても、それでは出世は遠ざかるばかりだ」
ダイゴはつまらなさそうに鼻を鳴らした。
「出世？　そんなものに実力はハナから関係ねえだろ。うちの麗しき隊長を見たら一目瞭然だ」

「馬鹿な。ローザ隊長の資質はお前も知っているはずだ」
ローザ隊長は女だてらに我が護衛部隊隊長を務める。齢も二十半ばで俺とそう変わらない。
その華奢且つ女性らしい起伏に富んだ肢体で振るう剣戟は、神の祝福を受けたと評される程に流麗苛烈だ。
ダイゴは渋面を浮かべる。実際のところ訓練でも常に実力の差を見せつけられていた。
涼しい顔の隊長を前に、膝を折っているダイゴの姿は稽古場の常だ。
戦士は男が担うべきという思想のダイゴにとっては苦い事実だろう。
そんな劣等感を誤魔化す為に言う。
「確かにあれだけイイ女なら、夜の腕前は大したものだろうけどな。抱き心地の良さそうなエロい身体してやがる。あんなのと一晩共にしたら、どんな屈強な戦士でも骨抜きにさせられちまうわな」
「……何が言いたい？」
「別に」

ただでさえ陰鬱な森の中、不穏な空気が濃くなると、丁度休憩の号令が最後尾まで聞こえた。

ダイゴは無言で持ち場を離れたが、その背中は憤っていた。

ローザ隊長は文句無しに戦士としての腕前、そして指揮官としての適性を見込まれ昇進した。

しかしダイゴのような難癖をつけたがる人間も少なくない。

彼女は若く美しい。たとえ男でも嫉妬で焦がれる程に眩しいのだ。

野営の準備が整うと、俺は一人になりたくて、仮拠点から少し離れた場所に足を向ける。

そこには先客が居たが、俺は引き返さずに声を掛けた。

「お疲れ様です。隊長」

腰掛けた切り株の前に焚火をたいていた彼女の横顔は、はっとさせられる程に美麗だった。

ともすれば魑魅魍魎が漂っていそうなこの森の中で、彼女の透き通るような肌は天使や妖精を連想させる。

銀色の長い髪も過酷な任務の疲れや汚れを全く感じさせず煌(きら)めいていた。
「ユーリか。どうした」
「少し一人になりたくて」
「なら私は邪魔だったかな」
「いえそんな。もしよろしければ一緒にお茶でもどうですか？　先日通過した街で調達したものなんですが」
「折角だし頂こうか」
彼女の美貌は研ぎ澄まされた宝剣のようだ。口数も少なければ表情も乏しい。それらの要素が合わさって、近づきがたいという印象を持つ者は多い。
しかし存外話し掛ければ気さくに言葉を交わしてくれる。
「ここを越えれば任務も大詰めだ。後衛は最も気力を消耗するが頼んだぞ」
その言葉は毅然としながらもどこか柔らかい。
微笑とまではいかないが、その表情は部下の緊張を解(ほぐ)そうという思慮が窺える。
彼女から投げかけられた信頼に感激しながらも、俺は先程交わしたダイゴとのやり取りが気になっていた。

「……ローザ隊長は自分にとって命を預けるに値すると感じた、初めての上官です」

急に何を言いだすのだと自分が恥ずかしくなる。

「そ、その……前の隊長は上の顔ばかり気にしていて、現場の事は二の次にしていたもので……」

必死に取り繕う俺に、ローザ隊長は何かを感じ取ったのか小さく笑った。

「周りの声は気にしていない。私は私がやるべき事をやるだけだ。ユーリもそうしてくれたらいい」

「は、はいっ！」

「勤勉な君には釈迦に説法だったな」

「いえそんな。まだまだ未熟で」

彼女を取り囲む雑音は想像もできない程、煩わしいに違いない。それでも彼女の立ち振る舞いは常に颯然（さつぜん）としている。

俺はそんな彼女を神聖視すらしていた。その敬意には異性としての憧れも混じっていた。

ダイゴの言葉が耳に残っている。
『抱き心地の良さそうなエロい身体してやがる』
隊長は基本的に軽装だ。しなやかな四肢とグラマラスな起伏がどうしても男の視線を魅了する。
高潔なローザ隊長を前にこの想いは邪念だと自己嫌悪に陥る。そんな自分に彼女は問いかける。
「ユーリ。君はモテるだろう？」
「な、なんですか急に」
突然の言葉に心臓が爆ぜる。
「良い人が居るのなら早めに祝言を挙げる事だ。守るものがある人間は強くなれる」
ドギマギを隠せない鼓動を抑えつつ俺は意を決して言う。
「……俺は、いつか隊長をも守れるくらいの戦士になりたいですね」
隊長は静かに微笑んだ。
「そのような心意気を抱く部下が居るなら、私も頼もしいばかりだ」

勇ましいエルフの美姫に迫る屈辱の仕打ち!
ギャー
ぐえっ!!
みんな しっかり なさい!
頭の悪い オークなんて 簡単に駆逐 できるでしょ
西の渓谷に 誘き出して 炎の精霊(イフリート)に 捧げなさい
おお! ディナーリエ 姫様!
は! 早速!!
くぐ… ソウは いかんゾ
亡国のディナーリエ
~オークなんかに屈しませんわ~
漫画 COMIC ぱふぇ

ガハハハハ
オーク族長
アヴィ様が
来たぞ!!
覚悟しろ!
エルフども
本陣に忍び
込めたとは
あれは
隠れ身の
外套…
探知魔法を
潜り抜けた!?
オデの魔法
すごいデショ
アア
褒めてやる
バカな!
オークが魔法や
マジック
アイテムを!?
オマエが
ニンゲンから
買い入れた
精霊封じの
魔法陣
本当にアノ
ウザイ精霊が
消えたワ
今日こそ
エルフ王国は
終わりダ!
今マデの恨み
思い知れェえ
エエぇえい!!

少し魔法を覚えた程度で
調子に乗らないことよ!!
炎の精霊よ!!

そんな…
無傷!?
いいえ
当たる前に
かき消された
ハハハハ
精霊を消す
魔法陣だト
言ったダロ
バカエルフめ
オマエらに
勝ち目は
無ェンだ
よォオ!
ゴゴゴ
ゴゴゴ
アアア

くっ…
殺しなさいッ!!
オークごときに後れを取ったとあれば
生きて皆に合わせる顔がありません
侮ったわたくしの落ち度…
潔く…敗者の末路を受け入れます
イイ度胸だ
負けたカラ殺せと
嫌ダってコトだよな
つまりィ
負けた事ノ方が死ぬより

殺すヨリも！
いたぶってやるヨ！
あ貴方も王なら分かるでしょう？
矜持というものが！
キョウジ？
知らねェ言葉だナ
ソノ賢いお口を！
使ってやるゼ!!

がはハハハハハ
まズは一発ヌかねエとな
戦で昂ってるカラよ
なにっ!? 何をされていますの?
吐いてしまい…そ…う…
苦…しい
すぐに出して
ヤルぜ!

ああっ
姫様が…
おのれ！
狼藉者め
許さんぞ
キサマぁ！
王の
子種だゾ
ありがたク
飲みヤガれ
くくク
オークの
ニオイが
染みついて
あ…あ
イイ牝に
なったジャ
ねェかよ
おの…れ

あ♡は？♡
ぶるっ
オレらのチンポ汁は女を発情させるンだ
な…っ
な…んですの？
肉体が…火照…る♡
ビクビク…♡
妖精族たるエルフがそんな獣みたいな事ありえませんわ!!
…が疼いてる
この感覚…は…♡だ…め♡
精霊の力が消えテル今
お前らはタダの獣だって分からせテやるゼ

ゴゴゴ
そんな…姫様が
く…っおいたわしや
ががはは
エルフども
見るがイイ
お前タチの
国は我らノ
物になった
エルフ王国はどうなるんだー
晒し者にするなんてどこまで下衆なの！
こ殺しなさいよ！
こんな事…貴方の人格を貶めるだけよ
この牝がソノ証拠だ
目ェそらすンじゃねェぞ！
ソウカ？部下どもは喜んでるゾ
みんなお前ノ惨めナ姿を
ヒヒッ

!!
獣にはッ！鞭打ちダっ!!
そら！
ブははは グズグズ するナ！
やあああっ♡
縄ぁっ 引かないでぇッ！
食…い込んじゃ…あ♡
く…うっ ああッ♡

面白ェ！
ケツ叩かレテ
ヨガってんゾ
バカ！
信じるな
マジで？
あの姫様に
そんな趣味が
見ないで…
ああ…♡
体がおかしく
なってる…
みんなの
視線が…
けど耳が
垂れてるわ
あれは
本当に…
もっと叩いテ
やるヨ
ホラホラ
違ぁあ♡
これ…は
オークの
せーえき♡
のせい
はじッ
ビッ
ビシッ
ペチッ
ビッ
ビシッ
ビッ
ビシッ
ビッ
ビシ

デカい恥をかけヤ!!
サア!そろそろ
あ…う…♡
あぁ…

そら見タか！イキやがッタ
ぺちっ
ぱちっ
今のは…？気持ち良い…のが爆ぜて…
気持ち良い…!?
嘘…そんな姿を見られてたなんて
オークなんかに嬲られて…
とんだ変態エルフだナ
ケツ叩かれテ股に縄を食い込まさレテ!!
く…っこれ以上名誉を汚されるなら…
う…うぅ悔…しい
ぁ…はうるさい…ですわぁ
エルフどもコレが変態姫のマンコだゾ
ああっ
ヨク見せてやるゼ
皆様…わたくしの仇討ち！
頼みました…よ…
ぶるっ
ぶるっ
ぶるっ

気高きエルフの美少女二人組が
催淫ペニスに翻弄され堕ちていく！
ロクタの催淫紋と姫エルフ
小説 NOVEL／大角（おおつの）やぎ
挿絵 ILLUSTRATION／ボリス

「やめて！　みんなどうしたの!?」

薄暗い納屋の中、美しい村娘が地面に組み伏せられていた。村娘の四肢を掴むのは同じく若い村娘九人――それも全裸の娘たちだ。

「いや――っ！」

多勢に無勢。娘は全裸に剥かれ大開脚させられてしまった。

「いつも……見下しやがって」

獣臭。全裸の中年男が無防備に性器を露出した娘に近づいてきたのだ。

その男は目を血走らせ、びくつく不潔なペニスを娘の肉唇にあてがい、無遠慮に突き入れた。

「お、おねがいやめて！　は、はじめてだから！　痛いっ！　痛っ！」

中年男が欲望のまま腰を振ると、処女だった村娘は泣き叫ぶが、

「ああっ！　孕め！」

男が叫びながら膣内射精をする。

「はぁーっ♡　はぁーっ♡　もっと、もっとください……♡」

すると驚くことに、処女だった娘がさらなる性交を要求し始めた。中年男の頭

をかき抱き、濃厚な口づけをしながら自ら腰を振り始めたのだ。

「だ、だんなさまぁ……私たちも♡」

その周囲では、九人の娘たち全員が男に向けて脚を開いている。

納屋の中、中年男と一〇人の美少女たちの濃厚な交わりが始まった。

若い娘の匂いに包まれながら、中年男の獣欲をただひたすらに満たすような宴は翌朝まで続き――

「あ……♡　あ♡」

納屋の窓から朝日が差す頃、一〇人の村娘たちは陰部から精液を垂れ流しながら倒れていたのだった。

窓の鉄柵から水車と農村が見える。

ここはさびれた地方の農村。その領主の城の牢屋だった。

牢屋から見る風景は毎日変わらない。視界に広がるのは地平まで広がる平野と小麦畑だけ。

しかし今日は高級そうな外套を羽織った数人の騎士が、この地方村の牢屋に訪

れていたのだった。
「ロクタ・フースイだな」
騎士たちが、牢内でうずくまる小汚い中年男に話しかけている。
「半年前に西の魔窟にて魔女と契約。己が男根に『催淫紋の呪い』を得て、村の娘たちを手籠めにした極悪人――女の胎内に射精すればその女を快楽の奴隷にできる呪い持ちと聞いた」
騎士の問いに、中年男ロクタは大きなあくびをした。
「なんの用だ？　俺ぁ魔女との契約で寿命があと二年半しかねえからよ、牢屋で寝るのに忙しいんだわ」
不潔で傲岸不遜、これがこのロクタという中年男だった。
「お前を首都コルベルに連れていく」
「公開処刑か？　都会でやんのかよ」
「領主の許可は取ってある。出ろ」
ロクタは後ろ手に拘束されて馬車に乗せられた。
「俺を処刑するにしても、なんでわざわざ騎士様が手間かけて都会に連れていく

かね」

「私も不服だ。なぜ貴様のような罪人をわが騎士団の作戦に……」

騎士がぶつぶつ呟いている。単に処刑という話でもないようだが。

「み、みつけたぁ！」

突然馬車の鉄柵を女の手が掴んだ。

「はぁーっ♡　はぁーっ♡　ほ、ほしいの、おねがい……♡」

窓枠の外にいたのは、胡乱な目つきの、明らかに心を病んだ若い女だ。騎士が淡々と「出せ」と呟くと馬車が動いて女が弾き飛ばされる。

「あれが呪いにかかった女の末路か」

「あー多分な」

「アレを期待している。うまくいけば釈放してやるという話だ」

騎士はそれだけ言うと黙った。

馬車が街道を進んでいく。

ロクタ・フースイ。四〇歳。寿命と引き換えに呪いの男根を持つ男は――若い村娘一〇名を手籠めにし、うち七人を妊娠させ、村を大混乱に陥れた大罪人は

――こうして首都まで運ばれたのだった。

賑やかな街に入ったと思えばいきなり狭く陰気な石の空間だった。

「ずいぶん階段を上がるんだな」

ここは首都コルベル。それも端の尖塔ではあるが王城内だ。

その尖塔の最上階。ロクタは騎士に連れられて、ある部屋の前にたどり着いたのだった。

「この部屋の中にいるのが先ほど説明した作戦目標だ」

重々しい造りの扉。その横にある覗き窓が静かに開かれる。

簡素だがひと通りの家具が並ぶ部屋には二人の少女がいた。

まず見えたのは、ベッドに座っている見事な金髪の少女だ。

「グリゼルダ・ハテルベルク。エルフのハテルベルク族の姫だ」

よく見ると耳が長い。確かにエルフだ。エルフは長寿ゆえに年齢不詳のことが多いと聞くが、あのエルフは人間なら一〇代後半といった外見か。

エルフの民族服から見える肌は雪のように白い。顔は人形のように整ってこの

世のものか怪しむほどの美少女だ。しかも若々しい張りで服を突き上げる見事な乳房がある。

「もう一人は、近衛のハンナという」

そして姫の隣には、長い黒髪を一つに縛った、同じくエルフの少女が立っていた。凛々しい顔のしなやかな長身。脚が恐ろしく長く、細い腰からツンと上がった丸い尻がいやらしい曲線を描いている。これもまた人間でいえば、一生に一度お目にかかれるかどうかというほどの美少女だ。

ロクタが股間を膨らませながら息をつくと、横で騎士が咳払いして、

「ハテルベルク族は、東の大森林にある金の大鉱脈を独占している。ゆえに我が国との小競り合いが続いてきた。奴らの軍は人数こそ少ないものの魔法を使うゆえ強い。しかし今回の遠征で、この姫を捕らえることができた」

騎士の説明によると、エルフは高貴な者も前線で戦う習慣がある。特に王族は大規模な対軍魔法の起点だった。

そして今回、多大な犠牲とともに捕らえた姫、そんな重要な人質をどう使うか王城でも議論になったらしい。

鉱脈の割譲を迫る手もあった。しかし、この国も多方面で続く戦争による財政難ゆえ、慣習通り多額ではあるが目先の身代金と引き換えに姫の引き渡しに応じたのだ。

「だがそれだけでは終わらせないというのが騎士団上層部の意向だ。考え抜いた先、わが団はお前のうわさを聞いた。我が国が目指すはハテルベルク族の滅亡、領地と鉱脈の占領だ」

先ほどロクタが聞かされた作戦の概要だったが――

「要するにエルフの姫様を俺のチンポで奴隷にして、言うことを聞くようにすりゃいいんだろ？」

「そうだ。褒美は釈放、およびエルフ族相手なら凌辱の自由をやる。姫の引き渡しは二週間後だ。それまでになんとかしろ」

言い終わると騎士が部屋の扉をノックした。ロクタも連れられ入室する。金髪がさらりと揺れ、エルフのグリゼルダ姫がこちらに顔を向けた。

「なんだ突然。無礼ではないのか」

同時に近衛のハンナが傍らで警戒し始めた。

やはり美しい。部屋に入ると甘い匂いもする。極上の美少女二人にロクタはすでに股間を硬くしていた。

「下がりなさい、ハンナ」

近衛の横から涼やかな声がした。

「引き渡しまで手荒な真似はないと約定が交わされたはずですが、いったいなんの御用ですか？」

姫らしく優雅な口調だ。ロクタはこの姫をぜひ組み伏せてみたくなった。

「失礼しましたグリゼルダ姫。ですが本日はお知らせがありまして」

騎士がうやうやしく頭を下げ、

「このロクタという男が、引き渡しの期日まで同室することになりました」

汚らしい中年男を背後にした騎士の申し出に、グリゼルダ姫は首を傾げていた。

「下男ならば不要です。召使の役目もハンナがおりますので」

「そうじゃねえよ」

ロクタの無礼な語り掛けに、姫は目を丸くし、近衛のハンナはただならぬ気配を放ちながら硬直していた。

「ロクタ、あとは任せるが、今回の件は一つだけ問題がある」
騎士がそう言ってベッドに近づき、
「あっ！　何をする⁉」
いきなりハンナの腕をひねり上げ、後ろ手に手枷をはめたのだった。
「ロクタ、姫に触れてみろ」
騎士の勧めに、ロクタは姫に近づき手を伸ばしたが、
「ハンナを放してくださいますか？」
静かな怒りとともに言い放ったグリゼルダ姫の、ツンと立った胸を揉んでやろうとするが、触れられない。布一枚ほどの空気の壁で守られているような感触がする。
「軍の魔術師が言うには杖は取り上げているので殺傷力のある魔法は使えないはずだ。だが徒手でもエルフの王族は不可思議な結界や守護の魔法を使う」
「こんなんどうやって捕まえた？」
「結界は布一枚ゆえ縄で拘束はできる。だが直接肌に触れることは叶わぬ」
「これを俺になんとかしろ、と」

ロクタは嘆息する。催淫紋は膣に射精すれば女を奴隷にできるが、性交できなければどうしようもない。

「作戦は先ほど打ち合わせた通りだ。失敗したら死刑だ。ゆめ忘れるな」

穏やかでないが、ロクタは元々死ぬはずの人間だ。焦りは感じない。

姫は平然とした顔でいる。近衛のハンナは、後ろ手に拘束されたまま立ち上がり、姫を守るようにしていた。

「姫様に手を出そうというのか。愚かな。お前たち人間ごときが手を触れられる存在ではない」

確かに現段階では姫に手を触れる手立ては何もない。しかし騎士とロクタで考えた作戦があったのだ。

「いやいまは姫様に用はねえんだわ」

ロクタは黒髪エルフの肩を掴んだ。そのまま部屋の外に連れていく。

「は、ハンナ！」

初めて焦りを見せた姫を置いて部屋の扉を閉める。内から扉を叩く音が聞こえるが無視。ロクタの足元には黒髪の美麗なエルフが横たわっていて、

「おい従者。あの姫の結界を解く方法を教えろ」
「ふん、もしかして近衛である私に言っているのか？　馬鹿な」
ロクタが訊くがエルフの騎士は鼻で笑ってもちろん答えない。
「じゃ、あとは訊き出しておくわ」
ロクタが言うと、騎士たちは見張り番も含めて階下に降りていった。
監禁部屋前の冷たい石畳。小部屋ほどの、見張りが待機するための椅子しかない空間には、無防備な黒髪のエルフと下卑た中年だけしかいなくなる。
「……近寄るな」
ハンナが小さく震えていた。覚悟はあるのだろうが、これから何をされるのか怯え始めたような態度に、ロクタの嗜虐心がいたく刺激された。
「エルフのマンコってぶちこんだことないんだよな～」
「や、やめろ……私はしたことがない。それに約定を破る気か」
「お前の処女膜は破る気満々だが？」
「やめろ……私には婚約者が」
「ああ、妊娠させて破談にしてやる！」

ロクタが襲い掛かると、背後の監禁部屋の扉を叩く音がした。
「は、離れろっ！」と黒髪が振り乱されるが、拘束されているなら男と女の絶対的な体格差があるのみだ。
「へえ、エルフの女ってスケベな身体してんだな～」
ロクタはハンナの叫びも無視して馬乗りになって、わざと下卑た言葉をかけ、屈辱にゆがむ女の顔を見ながら両手で乳を揉んでやる。
「は、放せ。貴様が、貴様が触っていいものではな……あっやめろ！　服に手を入れるなぁ！」
「肌もすべすべ、男に揉まれるための乳じゃねえか」
しっとり吸い付く最高の肌だった。触れているだけで興奮する張りの乳房をたっぷり揉んでやる。
「あ、脱がすなーっ！」
上衣をたくしあげると見事な乳房がまろび出た。真っ白な大果実の上にはピンクの宝石があって、ロクタは反射的に吸い付くしかなかった。
「やめろーっ！　吸うな！　それは、将来、私の子供がすることだ！」

「お前の乳首に初めて吸い付いたのは俺だ！　ガキを産んだら乳をやるたび思い出せ！」

生娘の乳房に中年の唾液を塗りたくる。乳首を口に含み、下品に音を立てて吸い上げ、女の将来を汚してやるような発言をして性を貶めてやる。

黒髪のエルフ騎士は涙目だった。恐怖と屈辱に染まった美麗な顔にロクタは呼吸を荒くする。だがもちろんこんなものでは終わらせない。

「おいエルフ女！　交尾するぞ！」

今度はハンナをうつぶせに組み伏せた。黒髪に鼻を突っ込むと、ひどく甘い匂いがして睾丸がびくつく。

ロクタはハンナの細い身体を背後から抱きしめ柔らかい尻に股間を押し付けた。いやらしい柔らかさに股間が包まれ痛いくらいに勃起する。

「スケベなエルフ女！　これから処女の膣に種付けしてやるからな！」

「ふ、ふざけるな！　貴様とするくらいなら死ぬ！　いますぐ殺せっ！」

ロクタはハンナをもみくちゃにしながらさらに美少女の匂いを嗅ぐが、

「あっ！　やめろ――――っ！」

突然、ハンナがロクタに頭突きをかまして激昂したのだった。

「あ？　どうした？」

一瞬だが、突き抜けた怒りの剣幕にロクタも目を剥いていたのだが、

「み、耳……私の耳に、触れるな」

「なんでだ？」

「ふ、ふざけるな……エルフの耳は夫以外の異性が触ってはならぬ！　同性の親すら滅多に触れぬ部位だぞ！」

ロクタは田舎者なので当然のごとく異文化を知らない。だがこの最低な男にはこれ以上ない朗報で、

「あーっ！　やめろ――っ！」

ロクタは鼻歌交じりにハンナの耳の先を口内に入れた。べろべろに舐めて神聖な部位をしゃぶり上げてやる。

「お前の長い耳、俺の唾液漬けにしてやるよ！」

「やめ、本当にいやっ！」

凄まじい嫌悪のせいか、騎士のくせに普通の女のように叫んでいる。

ロクタは暴れるハンナを押さえつけまだまだ耳をしゃぶる。左右とも丁寧にしゃぶる。股間を尻にカクカク押し付けて交尾の真似事をしながら、耳に唾液を塗り込んでいく。

しばらくするとハンナが動きを止めた。嗚咽を漏らしている。

「こ、このような辱め……殺せ……殺してくれ……！」

耳はそこまで神聖な部位だったらしい。高慢ちきな騎士が屈辱に涙する姿にロクタは爆笑しそうになった。

「お前の耳、俺のよだれで臭えわ。べとべとの汚物だな。お前の婚約者クンはこんな汚ったねえ耳の女を嫁にするんだな～、へえ～」

言ってやるとハンナはさらに嗚咽を漏らした。このエルフにとっては処女に並ぶ聖域を汚された感覚に近いのかもしれない。

「……殺せ、もう誰にも顔向けできない」

「婚約者に捨てられても大丈夫だろ。これから俺と夫婦になるんだからよ」

ロクタはハンナを仰向けにして薄衣（うすぎぬ）を引っ張った。

「いや――――っ！」

エルフの薄衣を思いきりはだけさせると、雪のように白い半裸の肢体が現れる。ロクタは全裸になってハンナの肢体を抱きしめた。胸の谷間に顔をうずめ、また白い乳房を舐め、

「孕まされるのが嫌なら姫様の結界を消す方法を言え！」

「ば、馬鹿め、誰が言うかっ！」

ずっと嫌悪に叫んでいたハンナだったが、この言葉で使命を思い出したのか、若干の凛々しさを取り戻していた。だがロクタはお構いなしに美乳を弄ぶ。もちろん正常位の姿勢で抱きしめて、ペニスで下着をドスドスと突いていたのだが、

「あれ？　騎士様、濡れてねえ？」

途中でロクタが気づいた。ハンナの下着を剥ぐとなぜか股間がたっぷり濡れていたのだ。

「あ、分かったぞ」

ロクタは閃いて両耳を握ってみた。するとハンナは「ひんっ♡」と顔を真っ赤にして下腹を跳ねさせたのだ。

「なるほどエルフは耳が感じるのか。だから耳は夫しか触れないと。そうか耳舐

めしてる時から感じてたのか。へぇー、だから恥ずかしかったのかー」

ロクタがにやにや見下ろすと、エルフの騎士はこれ以上ないくらい悔しそうな表情をしていた。

「性感帯を外に露出させてるのか、エルフってのは性感帯丸出し種族なんだな。笑えるわ～」

「き、貴様は……なんたる侮辱を……ゆ、許さんぞ！」

「うるせえ淫乱種族、股開けよ！」

差別的な言葉を投げ掛け、しなやかな長い脚を開いてやると、股間には美しいピンクの貝が濡れていた。このいかにも新品の粘膜に、これから中年男の黒ずんだ粘膜を沈めるのである。

ロクタは鼻息荒く、ペニスをびくつかせながら腰を前に進めていき、

「やめろ……人間のモノなど！」

「やっべ、こんな綺麗なマンコ見たことねえや」

「たのむ……亡き者にしたいなら、そのまま殺せ……！」

「じゃあ言えよ。姫様の結界を解く方法をよ！」

「誰が言うか！　や、やめろ、貴様のだけは、ん、い、やぁぁ……っ！」

ナマの亀頭がピンクの肉唇に、つぷりと結合した。

「ああハンナっ！　汚らわしい人間と大事なトコがくっついたぞ！」

ロクタが亀頭の埋まった肉棒を見下ろすと、陰茎の入れ墨。コイン大の魔法陣がうっすら光った。

「やめ……痛い、いたい！」

にゅるにゅるまとわりつく粘膜をかき分けて、肉棒を押し進める。

処女であるハンナには当然痛みがあるようだ。ロクタの男根にある呪いは女を快楽に狂わせる力があるがすぐには効かない。それまで破瓜の痛みに苦しむ女の顔を見るのが、このロクタは何よりも好きだった。

「い、痛っ――――！」

ぶっ、と何かを破るような感覚がしてペニスが膣内に収まった。温かくぬるぬる締め付けてくる処女の膣に、ロクタは腰が痺れそうになる。

「エルフ女、お前の初めては俺だ！　処女膜破ったのは俺だぞ覚えとけ！」

唇を噛みしめるハンナと見つめ合えば、高潔な女の人生に自分を刻むようで興

奮する。真っ白な女と結合した快感にロクタは夢中で腰を振り始めた。

「やめ！　んっ♡！　やめろっ♡！」

仰向けの正常位で乳を掴んで肉棒を抽送させる。亀頭が奥まで刺されば催淫紋の呪いの第一段階だ。痛みが和らいで快感になる。

「んっ♡　やめっ♡　ころせっ♡！」

ハンナの声がだんだんメスの嬌声になってきた。このエルフは破瓜の痛みが不思議と引いていくのに気づき始めているに違いない。

「あっ殺せっ♡　もうころせっ♡！」

ロクタはハンナを腋の下から抱きしめ、首すじを舐めながら腰を振る。触っているだけで性欲が湧くような滑らかな肌の上で泳ぐようにして、全身を堪能してやるのだ。

「待て……っ♡　なぜ人間の男根から魔力が！　んっ♡！」

エルフは魔力に敏感らしい。ロクタの催淫紋の存在に気づいたようだ。

「俺のチンポは誰でも気持ちよくなるんだぞ。そして中に精を放たれればメスはもう逆らえなくなる」

これが催淫紋の呪いの第二段階だった。膣内射精されれば終わり、抗えないほどの快楽がやってくる。

「し、知っているぞ♡　それは魔窟の魔女の……禁忌術っ♡　んっ♡」

ロクタの出会った魔女のことも知っているようだ。魔法を使うエルフだけあって見識があるらしい。

「奴隷になったお前から姫様の秘密を吐かせてやるよ！」

これがロクタと騎士の狙いだった。催淫紋の呪いで従順にした近衛から姫の結界を解く方法を吐かせる。解けたならばロクタが姫を奴隷化する。

「や、やめろ！　アレは知ってる！　分かった殺せ！　殺していいから姫様を裏切らせる真似はやめろぉ！」

声に哀願が混じっていた。何度か同じ呪いに狂った女を見たことがあるのかもしれない。

そうだ。アレはもう術者のペニスのことしか考えられなくなる。ただし術者は呪いのために寿命三年となるため時限付きではあるが、それまでは心まで奴隷になるのだ。

「へえ、中に出されたくないのか？」
ロクタは正常位で密着したまま、弱みを得たりとにやついた。
「じゃあ俺と口づけをしろ。そうしたら外に出してやる」
「ふ、ふざけるな♡　だれが、貴様と神聖な男女の契りをっ♡！」
「ならこのまま出すぞ。あー出る出る！　奴隷になれ！」
ロクタが膣奥を突くとハンナは「んおっ♡」と下腹をびくつかせながら、
「す……すればいいのだろう!?」
卑劣な要求に屈したのだった。
「ああっ！　口開け！」
「わ、わか……んむ♡　ちゅむ♡　……やめっ♡　だえきを、んむっ♡」
ロクタとハンナの舌を絡めた深い交合が始まった。
しなやかな身体にしがみつきながら生殖器を深く合わせ、上の口でも舌を絡める。舌はぬるぬる、汗ばんできた肌に全身をこすりつけ、性器も水音を立てながらぬるぬる結合させる。
「……んむ……奥っ、ひゃめろ♡」

この黒髪の清楚なエルフは不潔な中年と、男女としてこれ以上ないくらい深くつながってしまったのだ。

ロクタの睾丸が震えてペニスの根元に精液が殺到してくる。もう女体に使うことはないと思ったペニスと睾丸を喜び跳ねさせ、さらさらの黒髪の、美少女の身体をきつく抱きしめて、

「んむぅ……！」

舌を絡めながら思いきり射精した。

外に出す約束など守られるわけがなかった。農村の牢屋に入れられて以来一カ月ぶりの性交。しかもぶちまける先はすべすべのエルフ美少女だ。

狭い膣に締められながら陰茎が拍動する。汚液が尿道を痛快に通り抜けるたび、電撃のような刺激が下半身に走る。

ロクタは意識を飛ばしかけるくらいの快楽に震えながらエルフの膣奥に、びゅるびゅると、煮凝(にこご)りのような精液を注入していた。

美少女の匂いを嗅ぎながら、エルフの膣奥に濃厚な体液がへばりつく感覚を味わう。同時に、ロクタは陰茎で魔法陣が発光する熱も感じていて、

「ぷはっ！　へ？　待て！　貴様、私の中に！」

中出しされればこの呪いは完成する。流れ込んでくる魔力を感じたのかハンナは激怒の表情を見せたが、

「うるせえ！　イけ！」

ロクタがハンナの両耳を掴むと「あ――っ♡！」と叫んだ。呪いの中出しで敏感に、そして元々性感帯の耳を掴まれ大絶頂してしまったのである。

「あ……あ♡　あ……っ♡」

ハンナは両耳を掴まれながら、口を半開きにした間抜け顔で震えていた。下腹と膣を痙攣させ、ロクタの精液を子宮へと貪欲に吸い込んでいる。

「あー、エルフマンコすげえな」

ペニスが跳ねるたびにタイミングよく膣が締まるせいで何度も精液が射出された。そして魔法に無知なロクタも感じていた。精液が少女の聖域を占領するのと同時に、呪いの魔力がハンナの子宮から体内に侵入し、少女の身体の隅まで行き渡っていく感覚を。

「お前もう俺の奴隷だからな……！」

エルフ女の下腹に複雑な魔法陣が浮かんでくる。この淫紋が刻印されれば呪いの完成だった。

絶頂に放心するハンナを抱きしめながら、その唇をじっとり舐めて、ロクタはまた膣奥に、ばびゅ、と精液を噴き出したのだった。

ロクタは監禁部屋の扉を開けた。

ハンナとの性交の間ずっと叩かれていた扉は、絶頂後から静かになっていたが、扉が開くと美しい金髪の姫が、その瞳を涙に濡らしていたのである。

「ああ、ハンナ、ハンナ、大丈夫？　なんてひどいことを……！」

従者にも優しい姫様のようだが、これから起こることにロクタは思わずほくそ笑むしかない。

「ハンナ……？」

ロクタが姫の前に差し出した半裸のエルフが、ゆっくりと顔を上げた。その目はうつろで、どこか奇妙な喜色に染まっていて、

「ひ、姫様ぁ……結界解いてくれますか。一緒に旦那様に中出ししてもらいまし

聖天使ユミエル
カオティックロンド

第8話 光と影

わたしの勝ちよ
お姉ちゃん…
聖天使ユミエル！

我ノ勝利ダ
貴様の全ては
我ノモノダ

暗い… もう
何の光もない

私の心の中は
もう絶望の闇しか
なかった

遠くで今も快楽に
喘ぐ「ワタシ」の声が
聞こえてくる

そうか…
コレが私の
心の世界

漫画 COMIC 白う〜凪い
原作 ORIGINAL 黒井弘騎

こんな
おぞましい腐肉で
出来た世界が…
醜悪な肉しか
ない世界が――
私の…
当然よね…
やぁん！
もう許し
てぇ…
私はママから
授かった誇りも
使命も
ああぁんっ
もっとしてぇ！
もっと
動いてぇ！
もう天使ですら
ないんだもの…
んふぁ♥
悠美（ゆみ）の
エッチな所ぉ…
いっ虐め
てえっっ！
全部なくした
唯の弱虫
イカせてぇお願いい！
嫌だよぉ
やめちゃ嫌だよぉ！
こんなのいやあぁ!!
私 永遠にこのままなの？
イケないまま
ずっと生殺しで
閉じ込められ続けるの!?

それでも
よかったん
だけどね
この…声
…嘘
ククッ
貴女(あなた)の顔なんて
見たくも
なかったけど
エンジェル…
エクリプス！
会いに
来てあげたわよ
光の私
いっ…

いやあああ！
来ないでえっ！
メキョッ
ククッ
わたしが
怖い？
恐ろしい？
グッ
ニチッ
私に近づか
ないでえ!!
や…
だめっ
ガッ
ガッ
ひっ…
いいわよ
その怯えた顔
胸が
すくわ！

こ…こんなのが私の本性なの…？
私 こんないやらしくなんか…
こんなにエッチで男の子が喜びそうな身体
エッチすぎるよ…
腰なんて折れそうなぐらい細いのにお尻の膨らみは弾けそうなぐらい…
なんて素敵な格好…
あぁ…本当に…すごい
アラアラ

どうしたのうっとりしちゃって？
自分自身に見惚れるなんてとんだナルシストの変態じゃない！
や…やぁ
そ…そんなことないよ…ぉ
ウゥ
ふん…
自分自身とすら向き合えないの？
こんな弱虫に今まで抑え込まれていたなんて我ながら情けないわ
でもう違う！
これからは「わたし」が悠美なのよ！
貴女はもうイらない!!

まずは鞭打ちなんてどうっ!?
ひっ やめ…!
ぎっ! ひっ…ぎあああああああっ!
ひゃはははっ!!
ぎっ…
くひいいい
だだめ! そこだけは許…
あっ! がっ! 乳首ひいいイ――!!
んひいいい!
わたひの乳首…壊れちゃうよぉおっ!

いいわ…！
じぶんで自分を
虐めるのってこんなに
楽しかったのねぇ！
嬉しいわあ！
わたし
「幸せ」よぉ!!
え――
幸せ…？
もう許ひ
へえぇっ…
お…お願ひ
エクリプスなのに
幸せになって
喜んでいる…の？
ちゃっ
クワクワ
まだよ
まだこれから
次はもっと
酷いことして
あげる！
そっ…
そんな
そんなことされたら
わたひ壊れひゃ…
これ以上ひどいこと
なんてあるの？
滅茶苦茶にされるの？
びくん
う嘘…？
どうして
私…
ヌチョ
え…
ツー…

あらあら
どうしたの
かしら？
ひょっとして
わたしに虐められて
感じちゃったのぉ？
違う違うぅ！
私 わたしぃ…っ
貴女は
いつもそうね
悠美…
ハァ？
カマトト
ぶって
嘘ばっかり
こっちのお口は
こんなに正直
なのにねっ!!!!
んぎっ
いいっ!?
痛あぁああ
あっっ
食いっ…こむう
おまんこ
裂けちゃ…う!!

すごいっ…腰から下がもう狂っちゃいそう！
ひうっ ひいぃんん！ こ 擦れる…… あぁあアァ！
んんぎぃ…… あぐッ！
クリトリス 熱いぃ！
ククク 健気に歯を食いしばって そそる表情 もっと虐めたくなっちゃうわ
こうやってねぇ!!
ん… はぁあぁ
クフフ♪
ぐん〜〜〜ッ!!
んひぃぃ!?

ビグビグ
おっおお！
んぎっ…くっふう
うウウ～!!!
ふへぇ
素敵な表情に
なってきたわね
悠美
ちゅぱ
貴女は
大っ嫌いだけど
その可愛らしい
アヘ顔は嫌いじゃ
ないわよ

屈辱の変態野外露出！
誇りを穢される少女退魔剣士！
死を超えるモノ
～露出地獄に堕ちる退魔剣士～
小説／有機企画
NOVEL
挿絵／弱電波
ILLUSTRATION

退魔剣士、それは闇より出づる鬼を斬り裂き、祓う者。
幽鬼、それは闇へ人を誘い、命を摘み取る者。
今日もまた陰と陽、対極に位置する世界の住人が鎬を削っていた。
キンッ！　ギギンッ！　ガキンッ！　金属のぶつかる鋭い音が薄暗いトンネルに響く。
入口から差し込む陽光が交差する二つの影を淡く照らした。
（硬く速い。幾人もの退魔剣士を退けてきただけのことはあるか）
華麗に身を翻し、ひび割れたアスファルトに着地するのは、漆黒の長髪をポニーテールに束ねた少女だ。
髪だけでなく身に着けるセーラー服も、ロングスカートも、タイツも真っ黒で、胸元の赤いリボンがなければ夜闇に溶けてしまいそうである。
（だが届かない相手ではない。わたしとこの銀雪ならば！）
少女は『銀雪』と名付けられた日本刀の柄を握りしめ、刃を立てたまま頭の右手側に寄せ、左足を前に出した八相の構えを取る。
その肢体はしなやかさと、欲情の視線を向けずにはいられない、肉感にあふれ

ていた。

さらしに抑えつけられたおっぱいはバレーボールサイズのマシュマロのようで、タプンッタプンッと窮屈そうに弾む。

ウエストは細くくびれ、花瓶の首を思わせた。双臀は柔らかな曲線を描き、スカートの上からでも形のよさが十分に見て取れた。

涼やかな顔立ちは大和撫子という言葉を体現するようで、切れ長の双眸（そうぼう）と薄くリップクリームの塗られた唇が、さらに魅力を高めている。

緊張の色が滲（にじ）む瞳は十メートルほど先に佇（たたず）む幽鬼に注がれていた。

「罪のない人間の命を奪い、弄（もてあそ）んだ罪、今日こそ償ってもらうぞパペーティア！」

「若いですねお嬢さん。そういうセリフ嫌いじゃないですよ」

パペーティアと呼ばれたのは、ミドルウェーブのカツラを頭に乗せた自動人形（オートマタ）タイプの西洋幽鬼だ。

顔には手のひらをデザインした仮面を被り、陶器でできた身体にはボロ布が巻かれている。

「その余裕ぶった態度もここまでだ。鍋島刀子（なべしまとうこ）の名に懸けて貴様を斬る！」

両足のタイツが青白く光ると、タンッとアスファルトを蹴り刀子は跳ぶ。
十メートルの距離を一歩で詰め、パペーティアの首に狙いを定めて斬りかかった。
「おおっと危ない。人間なら死んでいるところだ」
「チッ」
パペーティアは自ら頭部を取り外し、余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）といった様子でジャグリングしてみせる。
標的を外した白刃はアスファルトを斬り裂き、深い溝を作った。
「ゴリラ並みのパワーですね。怖い怖い」
「その言葉が遺言でいいんだな？」
刀子は全身を青白く発光させると、追尾ミサイルのごとく駆け、斬撃の雨を降らせる。
パペーティアは頭がナイフでできたデッサン人形を多数出現させると、指先から伸ばした糸を接続した。
人形劇を演じるように、凶器で彩られた小人が踊り狂う。

刃と刃がぶつかり合い、無数の火花が影を照らした。
（数は多いが一体一体は非力。このまま押し切る！）
多数を相手取る人間離れしたスピードを生み出しているのは、『破魔の気』という力だ。
幽鬼にダメージを与える唯一の手段にして、退魔剣士の肉体を補強する生命エネルギー。
罪なき人々を守るための青白い光を身体に宿し、刀子は刃を振るう。
「もっと、もっと華麗に踊るのです！」
「木偶（でく）人形が集まったところで！」
ナイフがスカートを掠（かす）ると、水玉模様のパンティがチラリと顔を覗かせる。標的を外した凶刃はトンネルの壁にぶつかり、コンクリートを豆腐のように斬り裂いた。
人間の常識では考えられない破壊力だが、刀子に焦りはない。
流水のように刃を振るい、三体を同時に斬り捨てた。
「眼福眼福。可愛らしい下着ですね。胸の形も素晴らしい」

「黙れ」

下着に続いて片胸のさらしも露出するが、わずかに頬を染めるだけで正確無比に刃を走らせる黒髪剣士。

白く柔らかな肉毬が上へ下へとダイナミックに跳ねる。

「ハァァ……らあぁぁあああああああああっ！」

「ちょっとトばし過ぎでは？　息切れしてしまいますよ？」

「聞く耳もたん！」

始めこそ互角だった戦況は徐々に刀子へ傾いていった。

白刃が舞うたびにボロ布が削がれ、陶器製のボディが斬り裂かれる。

（いける！　ヤツの犠牲になった人々の無念、ここで晴らす）

人肉と人骨で作られた人形たち、血と脂の匂いが充満する廃墟の一室、通称工作室の光景は、忘れることができない。

狂った創作意欲を満たすためだけに犠牲になった被害者を想い、刀子の太刀筋が鋭さを増す。

「ぐうううぅ。……一度休憩を取るというのはどうでしょう」

「スポーツでもしているつもりか。ふざけるな！」
怒気を刃に込め四方八方から斬撃が飛ぶ。
刀子はパペーティアをトンネルの壁に追い詰めると、破魔の気を刀身に集中させた。
青白い光が銀雪を強く輝かせる。
「奥義！　氷牙縛斬（ひょうがばくざん）！」
「お、おおおぉオオオオオオオオォオオオ!?」
無数に奔（はし）る刀子の剣戟、それによってつけられた傷の一つ一つが氷結していく。
瞬く間に氷柱（ひょうちゅう）が出現し、パペーティアを閉じ込めた。
「……」
「人形遊びならそこでしろ。空想の世界で永遠にな」
沈黙するパペーティアを見つめ刀子は残心を決める。
幽鬼の力の源である妖気はすでに消え失せていた。
（完全に祓うことのできない強敵だったな。後は封印処理班に任せるとしよう）
高位の幽鬼にはトドメを刺せないこともある。

刀子は退魔剣士の本部に連絡を取ろうとスマートフォンを取り出し――、その場で固まった。

「な、なに!?」

指一本動かせない金縛り状態に、刀子は目を見開く。

そして、それを見計らったように、背後から足音が聞こえた。

「ナイス表情。スマホの待ち受け画面にしたいくらいです」

「パペーティア……どういうことだ!?」

当たり前のように現れたのは今氷結したばかりのパペーティアだ。

姿形こそ同じだが、陶器製の身体には傷一つない。

「簡単な話ですよ。キミが今まで戦っていたのはボクの分身だったということです。どうです？　びっくりしましたか？」

「馬鹿な。傀儡（くぐつ）にあれだけの動きができるはずがない！」

「ああ、誤解しているようですけど、キミが倒したのは紛れもないボクですよ。ただ一人ではありません。人間と違ってね」

玩具を新調するように、自分にはストックがあるのだとパペーティアは自慢気

に語る。
　一瞬にして追い込まれた退魔剣士は己の不甲斐なさに唇を噛んだ。
「目先の敵には集中できても背中がお留守でしたね。ハッキングストリングの味はどうですか？」
「そうか傀儡の呪法……わたしの身体に糸を通したな」
　身体の内を侵食する糸によって、刀子の肉体はパペーティアのものとなった。最早自分の意思で動かすことは適わない。
「さて、どうしましょうか。実はキミのことは戦う前から知っていたんですよ。鍋島刀子さん」
「なんだと？」
「退魔剣士協会で十指に入るほどの実力者。ボクの同輩を数え切れないほど斬り捨ててきたそうじゃないですか」
「それがどうした。人の命を塵芥（ちりあくた）とも思わん貴様らの所業、反吐（へど）が出る」
「キミたちとボクたちの命を同価値だと思ってほしくないのですが。まあ、それはいいとしましょう。ボクの目的はただ一つ、キミで遊ぶことです」

「貴様まさか……」

恐怖で鼓動を早める心臓を懸命になだめ、刀子は瞳だけで背後を見る。

最悪の予感に冷や汗がうなじを流れ落ちていった。

「くっ、殺せ！　貴様の辱めを受けるつもりはない！」

幽鬼に敗北した退魔剣士の末路は悲惨の一言だ。

男は殺され女は陵辱の限りを尽くされる。刀子もそのことは嫌というほど理解していた。

「殺すなんてもったいない。それより見せてくださいよ。ボクに絶望の表情を」

「わたしは貴様の思惑通りにはならない。トドメを刺さなかったことを後悔するなよ」

パペーティアの指先から糸が伸びると、刀子のセーラー服とミニスカートを斬り裂いた。

胸を守るさらしと可愛らしい水玉模様のパンティが露わになる。

「大きなおっぱいですね。戦っていた時からずっと気になっていましたよ」

「ぐっ、ジロジロ見るな！」

敗者を待つ運命は、性奴隷となる屈辱と歓喜！
FREYJA GIRL HANON
フレイヤガール
ハノン
～神の力を受け継いだ乙女～
小説／天戸祐輝
NOVEL
挿絵／どぅーゆーうぉんとぅー
ILLUSTRATION

神々のいたずら。
傲慢・嫉妬・憤怒・怠惰・強欲・暴食・色欲。
それに対をなす、謙譲・忍耐・慈悲・勤勉・救恤・節制・純潔。
神話時代に地上に撒き散らされた悪意の芽。
それは、現代では人の心理、ある種の抗えない欲望となって実っていた。
「その子たちから離れなさい！」
レオタード状の白い装束、それを彩る青い軽鎧を身に着けた少女が白い翼を広げ、制服姿の少女を襲っていたゴブリンを聖剣で切り裂いた。
長く美しい金髪を三つ編みにした彼女は澄んだ青い瞳を輝かせ、目の前で行われている蛮行に美唇を噛み締める。
「許しません、このような行いをする愚者に与える慈悲などない！」
翼を羽ばたかせて空に舞い上がり、黄金鍔の聖剣を天に掲げて輝かせる。
神秘的な光は一瞬にして夜空を染め、そこに持ち主の姿を幻想的に浮きあがらせた。
細面で整った少女の美貌、身体にぴったりと張り付くレオタード装束に包まれ

たDカップの丸い柔房。

十代後半らしき彼女は戦女神、そう呼ぶに相応(ふさわ)しい美少女だった。

「この神の力を受け継ぎし身体に見惚(みほ)れなさい」

「「キーキー！　キキー！」」

細い身体に形のいい胸、そして腰鎧から覗けるムチムチとした太ももと、ハイレグ状の布が食い込んだ陰部とお尻。

その魅惑的な戦女神の姿に、地上で少女たちを犯していたゴブリンたちが興味を示した。

美しい三つ編み女神に小鬼たちは吠え、短剣を手にその肉体を求めている。

「醜い魔物を喜ばせる趣味はない、消え去りなさい！」

戦女神が無慈悲に呟き、天にかざしていた聖剣を地上に振り下ろした。

神罰の鉄槌、神話の再現のようなその一撃は一筋の光の柱を降臨させ、地上を一瞬で光の園に変えてゴブリンどもを消滅させた。

「光に還りなさい」

半裸の少女だけになった下界を切れ長の瞳に映して囁(ささや)く。

ゴブリンどもがたむろしていた場所は元の公園の姿を取り戻し、犯されていた少女たちは悲しみも忘れ、戦女神の美しさに涙を流しながら跪いた。

「あなたたち、大丈夫？」

「は、はい……」

小羽根を舞い散らせながら地上に降りた戦女神を、制服を破られている少女がうっとりと見上げた。

その隣では裸の少女が戦女神の美しさに当てられ、瞬きもせずにその姿を瞳に焼き付けている。

「酷い目に遭ってしまいましたね。心の傷は癒やせないけど、身体の傷はわたしの力で癒やしてあげるわ」

身体中が精液にまみれ、ぽっかりと空いた膣口から精子を溢れさせている彼女たちに戦女神は手をかざし、暖かい光を降り注ぐ。

「あ、ああ……女神様……」

少女たちが歓喜の涙を流した瞬間、彼女たちの身体の汚れが消え去り、ピンクと青い下着、そして白いブラウスとブレザー、赤いミニスカートといった学園の

制服が完全に復元された。
神の御業に少女たちは両手を組み、彼女を崇めるように頭を下げる。
「そんなに畏(かしこ)まらないでください。わたしはフレイヤガールハノン、天から力を与えられただけの人間なのですから……」
ハノンと名乗った戦女神は優しげに微笑(ほほえ)み、夜空に向かってその神々しい翼を羽ばたかせた。
「行かないで女神様、女神様ぁあああああっ！」
飛び立った場所から自分を呼び止める声が聞こえる。
しかしハノンは振り向くことなく羽ばたき、今度は近くの学園に舞い降りた。
「まさかこの学園の生徒が襲われていたなんて……」
ぽつりと呟き、青い瞳を閉じて深呼吸をする。
その瞬間、女神の装束が光に変わり、襲われていた少女たちと同じ白いブラウスとブレザー、赤いネクタイとミニスカートに身を包んだ少女が姿を現した。
金色(こんじき)の三つ編みだった髪は黒いロングストレートに変わり、青い瞳が黒い輝きを放ちはじめた。

ガントレットやブーツアーマーは消え、淡い色香の太ももは少女らしい紺のニーソックスに包み込まれている。

「カバン取って早く帰らないと、もう下校時間も過ぎているわ」

戦女神フレイヤガールハノンから、本来の姿である未鈴羽音（みすずはのん）に戻った美少女はミニスカートを翻（ひるがえ）し、急いで下校しようと教室に向かっていった。

翻るミニスカートから白い下着を瞬かせる羽音を、少したれ目な赤い瞳が見つめていた。

卵型に整った輪郭に黒く長い艶髪、高い鼻頭、何よりも印象的なのは艶めかしく光る白い肌と、肉食的でぷっくりとした赤い唇だ。

女性としては少し背の高い彼女は、十代の少女にも、三十代の女性にも見え、まさに年齢不明の美女――。

しかも彼女はその身体を惜しげもなく晒し、Hカップはありそうな胸と大きなお尻を、金の刺繍（ししゅう）が施されたセクシーな黒い下着で包んでいるだけだった。

「神の力を受け継いだのがあんな女の子だったなんて……、ふふふ、いいことを

思いついちゃったわ……」

羽音を見つめる艶めかしい美女は、毒々しい蛇のような赤い舌で唇を濡らした。

翌日のお昼休み。

制服姿の羽音は慌てながら女子トイレに駆け込んでいた。

「もう、わたしは生徒会長選には立候補しないって言っているのに……」

授業が終わりお昼休みになった途端、羽音は教師と現生徒会長に呼び出され、延々と「次期生徒会長になって欲しい」と説得されていたのだ。

何度断っても強引に勧誘され、結局お弁当も食べられずに午後の授業を受けることになりそうだ。

「生徒会長には今の副会長がなればいいのに。もう立候補しているんだし、やる気のある人がやれば生徒会もうまく機能するはずだわ」

同級生の現副会長はもう立候補している。

となれば、今更自分が立候補したところで、現体制がそのまま移行する次期生徒会がうまく機能することはない。

新しい組織としてのひな型ができているのに、自分という異分子がそこに加われば瓦解するのは必然だ。

何より、悪魔から人々を守っている羽音には、そんな時間はなかった。

「未鈴羽音さん、生徒会の者なのですけれど、少しお話をよろしいでしょうか？」

（もう、トイレくらい行かせてよっ）

「ごめんなさい、少し待っていてもらっても構わないでしょうか？」

こんなところに来てまで話をされたくない。

そう思いながら黒縁メガネの女子に微笑んで個室に入ろうとした直後、羽音は生徒会と名乗った彼女に違和感を覚えた。

前に生徒会室に行った時、現メンバーと紹介された顔に黒縁メガネの女子はいなかった。

何より、彼女の制服の胸元は大きく膨らみ、あれほどの胸なら学園で有名になり、羽音の記憶に名前が残っているはずだ。

「あの、今生徒会と言いましたけど……っ!?」

違和感に気付いて振り向こうとした瞬間、羽音の背中に大きな胸が押し当てら

れ、背後から回された手で口元を覆われた。
「んぅううっ、んぅううう〜〜〜〜〜〜っ!?」
（なんなの!?　すごい力で押さえられてっ）
とても女子の力とは思えない。
それどころか、拘束もされてない手足が全く動かせず、まるで金縛りにあったように身体中の筋肉がピクピクと痙攣（けいれん）している。
「さすがね、少しの違和感だけで私を警戒するなんて」
（なんなのこの人？　まるで頭の中に染み込んでくるような声で……）
怖さよりも、彼女の声に意識が奪われていく。
身体を溶かし、頭の中に染みわたっていくような艶めかしい声だ。
まるで甘い毒、そんな淫猥（いんわい）で魅惑的な声に心臓の鼓動が早まる。
「いい形のおっぱい、貴女にはこれから良い物あげるわ」
（良い物って……）
「んぅううっ、んむぅううううっ!?」
彼女から漂ってきた甘いアルコールのような香りを嗅がされた瞬間、羽音は瞳

を見開き、背中を仰け反らせながら身体を痙攣させた。
背後から突然揉まれた胸が狂おしいほど疼き、身体中が一気に汗ばんでいく。
揉まれていない胸や陰部もジクジクと疼き、下着の中で乳首と陰核が膨らんでいくのが分かるほどだ。
初めてでも分かる急激な興奮と欲情、その感覚に頭の中が混乱する。
「ふふ、身体中が火照ってるでしょう。これは神の媚薬、どんな貞淑な女でもチンポ好きの娼婦になってしまう最高の祝福よ」
「しゅ、祝福って……んんっ!?　んんんんんん――――――っ！」
制服とブラ越しに膨らんだ乳首を摘まれた瞬間、羽音は全身を痙攣させながら絶頂し、ショーツからオシッコを染み出させて意識を失った。

「んっ、んぅうう……んん……」
あれから何時間経ったのだろう？
羽音は全身を蝕（むしば）むムズ痒さで目を覚ました。
「ここは……？」

熱い吐息を漏らし、潤んだ瞳で周りを確認する。
棄(す)てられた機械や薄汚れた壁、それだけでここが廃工場だと分かった。
そして自分を取り囲んでいる見知らぬ男たち。
攫(さら)われた、それが一目で分かる状況だ。
（身体まで縛られて……）
後ろ手に縛られて天井から吊るされた身体、何より最悪なのは、片足を犬の放尿のように縛られていることだった。
しかも制服の胸元も開けられ、白い下着が丸見えになっている。
（最悪だわ）
攫われて縛られ、男たちに下着を見られているのも最悪だが、それよりも羽音の心を蝕んでいるのは、今の自分の身体だ。
神の媚薬で全身が疼き、肌にふれる風にさえ声を出してしまいそうだ。
胸もブラの中で大きさを増し、カップの縁が柔らかな乳房に喰い込んでいる。
ショーツの中では淫唇がぷっくりと膨らんで開き、溢れた愛液が下着から染み出してダラダラと太ももに伝っていた。

「素敵な恰好よ、フレイヤガール」

艶めかしく、脳の奥にまで染み込んでくる声が聞こえてきた。

そこに瞳を向けてみれば、艶めかしい美女が惜しげもなく黒い下着に包まれた身体を晒し、四つん這いにした男に座って脚を組んでいる。

「私はイシュタル、趣味を邪魔してくれた貴女にお仕置きをする女神よ」

豊穣、そして淫乱な女神の名前を持つその女は赤い瞳を輝かせ、羽音より大きな胸を揺らしながら近づいてきた。

「セックスを楽しむために下界に降りてきたのに、貴女のような人間が正義を振りかざして邪魔をするなんて……、傲慢にもほどがあるわ」

「んあぁっ!?」

イシュタルが握り潰すようにブラ越しの胸を揉んできた。

お尻もさわられ、ショーツ越しの感触を楽しむように撫でまわされている。

「んぅうっ、んっ、やめなさい、女神がこんな……」

「何をやめろと言うの？　これからが楽しいのよ」

「何が楽しいと……っ!?　あぁあああああっ！」

胸が剥きだされ、お尻を撫でていた手がショーツの中に入り込んできた。
媚薬で疼かされていた乳首は巧みな指使いで転がされ、淫裂に潜り込んだ指が膣口を擦りあげてくる。
「んうっ、やめっ、やめなさい！」
「ふふふ、こんなに感じているのに何を言ってるの？　男たちも喜んでいるなんて、女としては誇りに思える状況じゃない」
「誇りって……っ!?　見ないでください、そんないやらしい目で見ないで！」
胸や陰部を嬲られる焦燥感に身体を揺らして叫ぶが、男たちが羽音から目を離すことはない。
それどころかもっと女神の寵愛を見ようと近寄り、揉まれる胸や、細い指に擦られるオマンコを覗き込んでくる。
「見ないで、はぁはぁ、覗きに来ないでください！　こんな女神の言葉に……」
「こんな女神なんて失礼ね。私は豊穣を司る女神のひとり、富を求める彼らが私を敬うのは必然、だから富を授けてあげたのよ」
「富って……ああっ!?」

ぐにゅっと膣口を歪められ、細い指先が膣内に挿入されてきた。
初めての指挿入に感じるピリッとしたわずかな痛み、しかしそれ以上に膣内を擦られるムズ痒さに腰がくねり、愛液が溢れていく。
「ゆ、指を抜きなさい……んっ、皆さんもこんな女神の口車に乗せられないで！」
「あはははっ、この男たちに助けを求めても無駄よ。私の忠実な信徒、そして忠実な性の相手なのだから」
羽音を嘲笑った直後、イシュタルは赤い瞳を輝かせた。
彼女から感じる神々しい女神のオーラ。
しかし、それを浴びた羽音の身体はムズ痒さが倍増し、指を挿入された膣口からコプコプと愛液が溢れ出ていく。
女神の寵愛を楽しんでいた男たちは羽音の姿を楽しみながら服を脱ぎ、その肉体を隆起させて別の生物に変化しはじめた。
「な、何をして……ああっ!?」
イシュタルが処女膜に気付いて笑みを浮かべた瞬間、羽音も別の事に気付いて瞳を見開いた。

男たちが体格を倍以上に大きくさせ、豚の化け物に変貌していたのだ。

「どうして……」

「彼らは富を求めて私に従う信徒、だから富の象徴でもあるブタの姿を授けてあげたのよ。ふふふ、あはははははははっ」

イシュタルが口元を歪め、女神とは思えぬ残忍な顔で笑いだした。

自分に忠誠を誓い、思いのまま動かすことのできる信徒。

それを豚の魔物に変えるなど、神とは思えない所業だ。

「許せない。人を、自分の信徒を魔物に変える女神なんて、絶対に許せない！」

自分の欲望のために人々を蔑ろにする女神、そして魔物に変わった男たち。

もうこの場に守るべき人々も、救わなければならない男たちもいない。

「神意顕現、戦女神の力を今ここに、フレイヤノブレス！」

その言葉を叫んだ刹那、羽音を吊るしていたロープが千切れ飛び、制服が一瞬に消滅して綺麗な裸身が宙に浮かびあがった。

黒いロングヘアは金色に変わりながら三つ編みを形成し、胸や陰部が白いハイレグ水着のような衣に包まれていく。

戦女神の力をその身に宿した身体には青い軽鎧が装着され、人々を守る大きな翼が広がった。

「フレイヤガールハノン！　悪しきその思惑、神に代わって断罪します！」

現れた黄金の聖剣をイシュタルに向け、青く変わった瞳に淫らな女神を映して判決を下す。

二人の姿はまさに天から舞い降りた女神と、地上で天を見上げる堕神（だしん）。

絵画にできそうな神と魔の対図、そのものだった。

「神に力を与えられた人間が女神を断罪するなんて、身の程を知りなさい！」

不満ありげにイシュタルが指をパチンッと鳴らした直後、無数の紅き矢が現れハノンに襲い掛かっていく。

「幾多の矢など、戦女神の力を受け継いだわたしには効かない！」

たかが矢に戦女神ハノンが負けるはずがない。

彼女は大きな翼を羽ばたかせ、空中で身を翻してすべて避けきった。

「さすがね、でも私のアヴィド（強欲）・フレッチャ（矢）からは誰も逃れられない」

淫神が不敵に笑った瞬間、かわしたはずの矢がハノンに矢先を向けた。

追尾する無数の矢、そんな神意の武器に聖剣一つでは抗えない。
ハノンは次第に攻撃を避けられなくなり、胸元を引き裂かれはじめた。
「くっ、この程度で……」
圧倒的な力の差、それが矢の動きだけで分かる。
矢は鎧や衣服を裂く事だけに集中し、肌に傷をつけてくることは一切ない。
力の差を見せつけるように、そして徐々に剥かれる肌を楽しむように弄ぶ。
「あくっ、媚薬に蝕まれてなければ……」
「勝てるとでも？　それが思い上がりだと何度言えば分かるのかしら？」
パチンッ！　と指を鳴らした瞬間、イシュタルの意思を得た矢がハノンを円形に囲み、その鋭い矢先を細い身体に向けた。
「その身体は傷つけないであげる、ディスペラツィオーネ！」
「あくぁあああああああああああっ！」
悲鳴というよりも絶叫だった。
胸を、お腹を、お尻を、陰部を、身体中を無数の矢が貫いていく。
衝撃にハノンは身体を仰け反らせ、空中上で叫びながら涙を飛び散らすことし

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/